

フナイン・イブン・イスハーク著 『医学の質問集』

矢口 直英* 訳・注

1. 著者について

フナイン・イブン・イスハーク Ḥunayn ibn Ishāq al-'Ibādī (808-73) はネストリウス派のキリスト教徒で、ヒーラ Ḥīra で薬屋の父親のもとに生まれた。翻訳者であり、医者であり、神学者であった。バグダードにおいてユーハンナー・イブン・マーサワイヒ Yūḥannā ibn Māsawaih (777-857) のもとで医学を学んだ。しかし、マーサワイヒに破門されてバグダードを離れた。一説によればこの時期にアレクサンドリアへ行き、ギリシア語に習熟したという。その後マーサワイヒとの関係は改善し、フナインはアッバース朝カリフのマアムーンから、「知恵の館 (Bayt al-Hikma)」で展開されたといわれる翻訳活動の総指揮を任されることとなった。

彼は息子のイスハーク・イブン・フナイン Ishāq ibn Ḥunayn (d.910) や甥のフバイシュ・イブン・アル＝ハサン Ḥubaish ibn al-Ḥasan al-Dimashqī (fl.ca.860) といった協力者と共に、ギリシア語で書かれた哲学書や医学書などを翻訳した。彼らの翻訳は依頼人に応じて言語が異なる。つまり、キリスト教徒にはシリア語に、イスラム教徒にはアラビア語で翻訳を作成したのである。

フナインの翻訳手法は優れていた。翻訳の際フナインは原典の写本を複数集め、まずそれらを校合して正確なテキストを決定することから始めたといわれる。また、既存の翻訳を参考にして、それらを改訂することもあった。訳文についても、原文の言葉を単に置き換えるのではなく、原文の意味を自然なアラビア語やシリア語で表現することを目指した。

フナインやその協力者らが翻訳した文献はプラトンやアリストテレスの著作も含まれていたが、ヒポクラテス、ディオスコリデス、ガレノスといった医学の著作が主であった。医学に関する文献の翻訳は、フナイン以前に既にいくつか存在していたが、その正確で優れた翻訳によって、彼らはギリシア医学のイスラム圏への伝達において最も重要な役割を果たした。さらに、アラビア語にまだ専門用語として使える語彙が充分で無かった時代に、彼らの翻訳活動は必要とされる様々な語彙を生み出した。彼らは既存の医学をイスラムの医学者が使用できるようにしただけでなく、医学を研究するための言葉という道具を用意することで、その後の医学の発展の基礎を造りあげたのである。

2. 『医学の質問集』について

多数の翻訳を手がけたため霞んでしまいがちであるが、フナインは自ら医学書を著した。その中で特に重要なのが今回翻訳した『医学の質問集 (Kitāb masā'il fī al-ṭibb)』、あるいは『学習者のための医学の質問集 (Kitāb masā'il fī al-ṭibb lil-muta'allimīn)』である。写本によっては別の題名を冠しており、『医学入門 (Kitāb madkhal fī al-ṭibb)』とも呼ばれる。それぞれ別の書物に見えるが、同じ内容に異なる形式を採っている。前者は問いと答えの形式を採っているのに対し¹⁾、後者は一般的な

* 東京大学大学院人文社会系研究科

1) 問答形式は後期古代アレクサンドリアで用いられていた教育手法である。[Pormann & Savage-Smith 2007:68] を

論説形式である。この著作はまずフナインが手がけ、彼の死後甥のフバイシュが完成した。それぞれの記述がどちらの手によるのかは判断しがたい。その後最低でも11世紀から13世紀にわたって8冊の注釈書、4冊の要約が作成されるなど²⁾、入門書として広く普及していた。

イスラム圏で人気だっただけでなく、この医学書はラテン語訳に訳されて伝わった。『ヨハンニティウスの医学入門 (*Isagoge de Johannitius*)』³⁾、あるいは長い名前で『ガレノス・テグニ入門 (*Isagoge de Johannitius ad Tegni Galeni*)』という。ヨハンニティウスとはフナインを指す名前、後者のテグニとはガレノスの著作『医術 (*Ars Medica*)』のことである。その名前が示す通り、フナインの『医学入門』はガレノスの『医術』、またガレノスの医学全体の入門的医学書として受け取られた。そして、例えばサレルノの大学で必須教科書群 (アルティセラ *Articella*) に算入されるなど、ヨーロッパでも重視された。

『医学の質問集』は医学で必要とされる基礎知識を与えるものとなっている。その内容は、生理学、病理学、病因論、治療学、診断学に及ぶ。入門用の医学書として作成されており、イブン・シーナーの『医学典範』といった後代の医学書が含んでいるような詳細な解剖学は含まれていない。また、個別の病気に対する治療法や、薬物学や調合に関する情報も扱っていない。だが、イスラム医学の概観を把握するには便利であり、その検討には意義があると思われる。

3. 翻訳について

この翻訳で底本としたのは、Rayyān, M. A. A., M. M. ‘Arab & J. M. Mūsā, *al-Masā’il fī al-ṭibb li-Ḥunayn b. Ishāq*, Cairo: Dār al-Jāmi‘a al-Miṣrīya, 1978 である。当テキストの英訳 [Ghalioungui 1980] を参考にした。

いくつかの事柄が列挙される箇所では、[1] [2] ……と番号を付けた。番号が無くても明瞭な箇所にも敢えて付けている。それは、この著作自体が過剰なほどに区分を繰り返しているためである⁴⁾。訳者による補充は [] に入れた。

それぞれの質問を分けるため、各質問の頭に番号を付けた。また質問と回答の間にはダッシュを付けた。これらは、翻訳に使用した校訂版に元々あるものではない。

本文に登場する薬品名の翻訳を正確にするため、ギリシア語の医学書 (ディオスコリデスおよびガレノス) に登場するものの名称を注に記した。さらに [Beck, 2005] に依拠し、同定した学名を記した。

校訂者が「文脈に従った補充」として各所で補記している箇所が多いが、この補記は不要と判断したため省略した。この校訂版の章立ては不完全なので (6章、9章、10章の番号が抜け落ちている)、英訳および関連する他の著作を参考にして章立てをした。またこの校訂版と異なる読みをした箇所は指示したが、アラビア文字の性質に由来するテキストの誤りについては特に指示していない。

参照。

2) [Sezgin 1970:250–51]。

3) [Gracia & Vidal 1974/5]。

4) それぞれの項目を細かく分類する教育手法 (*διάψεις* と呼ばれるもの) は後期古代アレクサンドリアに普及していた教育の手法であった。フナインもその伝統を受け継いでいるものと考えられる。[Pormann & Savage-Smith 2007:13–15] を参照。

4. 引用文献

ガレノス 1998『自然の機能について』（種山恭子訳 内山勝利編）京都大学学術出版会。

Adams, F. 1844–47. *The Seven Books of Paulus Aegineta*. 3vols. London: Sydenham Society.

Beck, L. Y. 2005. *De materia medica*. Hildesheim: Olms.

Bergsträsser, G. 1925. *Ḥunayn b. Ishāq über die syrischen und arabischen Galen-Übersetzungen*. Leipzig: Brockhaus.

Dioscorides. 1958. *Pedanius Dioscuridis Anazarbei De materia medica*. Ed. M. Wellmann. 3vols. 2nd ed. Berolini: Weidmann.

Galen. 1821–33. *Clavdii Galeni opera omnia*. Ed. C. G. Kühn. 20 vols. Leipzig: Knobloch.

García-Ballester, L. 1993. “On the Origins of the ‘Six Non-natural Things’ in Galen,” in J. Kollesh & D. Nickel eds., *Galen und das hellenistische Erbe*, Stuttgart: F. Steiner, pp.105–15.

Ghalioungui, P. 1980. *Questions on Medicine for Scholars*. Cairo: al-Ahram Center for Scientific Translations.

Gracia, D. & J.-L. Vidal. 1974/5. “La ‘Isagoge de Iohannitius’: introducción, edición, traducción y notas,” *Asclepio* 26/7, pp.267–382.

Hippocrates. 1839–61. *Oeuvres complètes d'Hippocrate*. Ed. E. Littré. 10 vols. Paris: J.-B. Baillière.

Ḥunayn ibn Ishāq. 1978. Ed. Rayyān, M. A. A., M. M. ‘Arab & J. M. Mūsā. *al-Masā’il fī al-ṭibb li-l-muta’allimīn*. Cairo: Dār al-Jāmi‘at al-Miṣrīya.

Ibn Bayṭār. 2001. *al-Jāmi‘ li-mufradāt al-adwiya wa-l-aghghiya*. 2vols. Bayrūt: Dār al-Kutub al-‘Ilmiya.

Ibn Sīnā. 1999. *Qānūn fī al-ṭibb*. Ed. M. A. Dinnāwī. 3vols. Bayrūt: Dār al-Kutub al-‘Ilmiya.

Jacquart, D. 1986. “À l’aube de la renaissance médicale des XIe-XIIe siècles: l’‘Isagoge Iohannitii’ et son traducteur,” *Bibliothèque de l’École des chartes* 144, pp. 209–40.

Kazimirski, B. 1860. *Dictionnaire arabe-français*. 2 vols. Paris: Maisonneuve.

Koning, P. de. 1903. *Trois traités d’anatomie arabes*. Leiden: Brill.

Lane, E. W. 1984. *Arabic-English Lexicon*. 2vols. Cambridge: Islamic Texts Society.

Lloyd, G. E. R. 1964. “The Hot and the Cold, the Dry and the Wet in Greek Philosophy,” *Journal of Hellenic Studies* 84, pp.92–107.

Lyons, M. 1969. *Galenus De partibus artis medicativae, De causis contentivis, De diaeta in morbis acutis secundum Hippocratem libellorum versiones Arabicae*. CMG Suppl. Or. II. Berlin: Akademie-Verlag.

Pormann, P. E. & E. Savage-Smith. 2007. *Medieval Islamic medicine*. Edinburgh: Edinburgh University Press.

Rayyān, M. A. A., M. M. ‘Arab & J. M. Mūsā. 1978. *al-Masā’il fī al-ṭibb li-Ḥunayn b. Ishāq*. Cairo: Dār al-Jāmi‘a al-Miṣrīya.

Sezgin, F. 1970. *Geschichte des arabischen Schrifttums*. Bd.3. Leiden: Brill.

Temkin, O. 1951. “On Galen’s Pneumatology,” *Gesnerus* 8, pp.180–89.

Theophilus. 1824. Ed. G. A. Greenhill. *Theophilus Protospatharius: De corporis humani fabrica*. Oxford: Typographeo Academico.

『医学の質問集』

翻訳

第1章——[自然要素について]⁵⁾

01: 医学はいくつの部分に分かれるか? ——2部分に。

02: それは何か? —— (1) 理論 (nazar) と (2) 実践 ('amal)⁶⁾。

03: 理論はいくつの部分に分かれるか? ——3部分に。

04: それは何か? —— (1) 自然要素の理論。その[あるべき]状態から自然要素が外れることとして、ここから病気の知識が導き出される。(2) [病気の]原因の理論。(3) 徴候の理論⁷⁾。

05: 自然要素はいくつ? ——7つのもの。

06: それは何か? —— (1) 元素 (arkān)⁸⁾、(2) 気質 (amzija)、(3) 体液 (akhlāt)、(4) 器官 (a'dā)、(5) 能力 (quwan)、(6) 機能 (af'āl)、(7) 精气 (arwāh)。

07: 諸元素はいくつ? ——4つ。

08: それは何か? —— (1) 火 (nār)、(2) 空気 (hawā')、(3) 水 (mā')、(4) 土 (ard)。

09: 火の力は何か⁹⁾? ——熱かつ乾。

10: 空気の力は何か? ——熱かつ湿。

11: 水の力は何か? ——冷かつ湿。

12: 土の力は何か? ——冷かつ乾¹⁰⁾。

13: 諸気質の種類¹¹⁾はいくつ? ——9つ。

14: それは何か? ——そのうち8つは平衡でない、1つは平衡。8つの平衡でないもののうち4つは単純、つまり (1) 熱、(2) 冷、(3) 湿、(4) 乾。4つは複合、つまり (5) 熱かつ乾、(6) 熱かつ湿、(7) 冷かつ乾、(8) 冷かつ湿¹²⁾。

15: 諸体液はいくつ? ——4つ。

16: それは何か? —— (1) 血液 (dam)、(2) 粘液 (balgham)、(3) 黄胆汁 (mirra safrā')、(4) 黒胆汁 (mirra sawdā')¹³⁾。

17: 血液の力は何か? ——熱かつ湿。

18: 粘液の力は何か? ——冷かつ湿。

19: 黄胆汁の力は何か? ——熱かつ乾。

5) ラテン語訳の第1章 01-14 節に相当する。

6) 理論と実践の区分は以降の医学文献に継承されていった。特に Majūsī, *Kiūāb Kāmil al-šinā'a al-tibbiya* は著作全体がこの区分にしたがって2分されており、理論を扱う医師と実践(手技)を行う外科医との区別を生み出すこととなった。

7) (1) は第1節と第2節、(2) は第3節、(3) は第4節で扱う内容である。

8) 著作によっては στοιχειών の音写の usūquss が用いられる。

9) 力 (qūwa) は δύναμις の訳語であり、ここでは特性や属性といった意味である。Aristoteles, *De Partibus Animalium*, 第2巻1章 646a12-17 を参照。

10) 各元素の特性についてはガレノスが継承したアリストテレスの理論と同等である。Aristoteles, *De Generatione et Corruptione*, 第2巻3章 330a30-331a6 を参照。

11) 種類を意味する単語は明確に区別されている。šanf を「種類」、jins を「類」、naw' を「種」、darb を「形式」と訳す。

12) 上記の元素を含め、様々な要素がこれら気質のいずれかと対応する構図は、ヒポクラテス以降の医学者らによって発展していった。

13) Hippocrates, *De Natura Hominis*, 第4-5節 [Hippocrates VI:38-45] を参照。

- 20: 黒胆汁の力は何か? —— 冷かつ乾¹⁴⁾。
- 21: 粘液の種類はいくつか? —— 5つ¹⁵⁾。
- 22: それは何か? —— すなわち (1) 塩っぱいもの、これは最も熱く、最も乾いた種類の粘液。(2) 甘いもの、これは熱と湿気がかっている。(3) 酸っぱいもの、これは冷と乾気がかっている。(4) 溶けたガラスに似たもの、この種類は最も冷で、最も湿で、最も濃い種類の粘液。(5) 味の無いもの、これは冷と湿気が純粋であり、味が欠損したもの (maskh al-ṭa'm)、つまり無味と言われる。
- 23: 黄胆汁の種類はいくつか? —— 5つ。
- 24: それは何か? —— (1) その色が澄んだ赤色のもの、この種類は自然で根本的なものであり、この生成は肝臓。(2) その色が黄色のもの、この生成は水性の湿気と澄んだ赤色の胆汁¹⁶⁾ との混合から。そのためこの種類は他より熱量が少なくなる。(3) 卵の黄身に似たもの、この生成は濃い粘液質の湿気と澄んだ赤色の胆汁との混合から。そのためこの種類もまた他より熱量が少なくなる。(4) その色がポロネギ色のもの、この種類の生成は大抵は胃である。(5) 緑青や錆、有毒動物の毒に似たもの、この生成は激しい燃焼から。そのためこの種類は熱が過剰になり、悪質気味である。
- 25: 黒胆汁の種類はいくつか? —— 2つ。
- 26: それは何か? —— (1) 自然で根本的なもの、これは血液の屑や滓にあたり、黒色の体液として知られ、この種類は実際に冷かつ乾。(2) 自然な事態ではない種類は体液の燃焼から生成し、これが実際に黒胆汁と呼ばれるもの。これは第一の種類より熱くより乾いて、激しさをもち、その性質は悪質で破壊的である¹⁷⁾。
- 27: 諸器官の種類はいくつか? —— 4つ¹⁸⁾。
- 28: それは何か? —— (1) 根源や脈として主要なもの (ra'īsīya)。これは4つ、つまり (1a) 脳 (dimāgh)、(1b) 心臓 (qalb)、(1c) 肝臓 (kabid)、(1d) 睪丸 (unthayān)¹⁹⁾。(2) これらの主要器官に奉仕するもの、つまり (2a) 脳には神経 ('aşab) が奉仕し、(2b) 心臓には脈打つ血管 ('urūq dawārib)²⁰⁾ が奉仕し、(2c) 肝臓には脈打たない血管 ('urūq ghayr dawārib)²¹⁾ が奉仕し、(2d) 睪丸には精管 (aw'iyat al-minā) が奉仕する。諸器官には、(3) その統御とその状況の基礎が [実現する]ための内在の力がある器官がある。骨 ('izām)、軟骨 (ghaḍārīf)、被膜 (aghshiya)、靱帯 (ribātāt)、脂肪 (shahm)、肉 (lahm)²²⁾ のように。(4) 内在の力をもち、別の力がそれら根源から流れてくるもの。胃 (ma'ida)、腸 (am'ā)、腎臓 (kulan)、脾臓 (ṭihāl)、全ての筋肉 ('aḍal) のように。というもこれらの器官には内在の力があり、それによって食料を吸引し変質させ、また他の諸機能を自然な状態で行う。これらにはまたそれら根源から流れてくる別の力があり、それによって感覚や生命のみが [実現する]、あるいはこれらと共に意志での運動が [実現する]。

14) Galenus, *De Causis Morborum*, 第6章 [Galen VII:21–22] を参照。

15) 各体液の種類とは、自然に身体に存在するものと異常なもの種類のこと。摂取した栄養から血液が作られる際に生じる副産物が自然な(血液以外の)体液である。

16) 黄胆汁のこと。

17) 後代の医学者によれば血液の種類には2つあり、ひとつは気質が多少変化した血液、もうひとつは別の体液が混入した血液である [Smā I:29]。

18) 以下 1:27–45 は、8:96–113 で扱う内容と同じ。

19) 当時はまだ区別が明確でなく、睪丸と卵巣の両方を指している。それぞれ「男の睪丸」「女の睪丸」と表現された。Galenus, *De Semine*, 第2巻1章によれば、カルケドンのヘロフィロス (c.330–260BC) は睪丸 ὄρχος を別の単語 δίδυμοι (複数形、双子を意味する) を使用して卵巣について記述している [Galen IV:596–98]。

20) 動脈のこと。著作によっては sharāyīn が用いられる。[Bergsträsser 1925:7] を参照。

21) 静脈のこと。また、単独で 'urūq という場合は静脈の意味になる。

22) σάρξ の訳語。[種山 1998] によれば、これは器官の実質を指す。

- 29: 諸能力の種類はいくつか? — 3つ。
- 30: それは何か? — (1) 自然的 (tabī'īya)²³⁾ なもの、(2) 動物的 (ḥayawānīya)²⁴⁾ なもの、(3) 精神的 (nafsānīya)²⁵⁾ なもの²⁶⁾。
- 31: 自然的能力の種類はいくつか? — 2つ²⁷⁾。
- 32: それは何か? — (1) その他に奉仕されるもの、あるいは (2) その他に奉仕するもの。
- 33: 奉仕される自然的能力の種類はいくつか? — 3つ。
- 34: それは何か? — (1) 生殖力 (muwallida)、(2) 成長力 (murabbiya)、(3) 栄養力 (ghādhīya)。
- 35: 奉仕する自然的能力の種類はいくつか? — 4つ。
- 36: それは何か? — (1) 吸引力 (jādhiba)、(2) 保持力 (māsika)、(3) 消化力 (hāḍīma)、(4) 排出力 (dāfi'a)。すなわち、これらの能力は栄養力に奉仕する。同様に栄養力は成長力に奉仕し、生殖力には2つの別の能力、つまり第一の変質力 (mughayyira ūlā) と第二の変質力 (mughayyira thāniya) が奉仕する。これは形成する (muṣawwira) [力] である。
- 37: 第一の変質力と第二の変質力との相違は何か? — 第一の変質力は何かに同化させずに変質させて生殖能力に奉仕するが、第二の変質力は同化によって変質させて栄養力に奉仕する。
- 38: 形成力²⁸⁾ の機能は何か? — 造形 (shakl)²⁹⁾、窪み (taq'ir)、脈絡 (manāfidh)、粗面 (khushūna)、滑沢 (malāsa)。
- 39: 動物的能力の種類はいくつか? — 2つ。
- 40: それは何か? — (1) 能動的なもの、あるいは (2) 受動的なもの。能動の能力は、心臓および脈打つ血管の拡張を起こす能力と、それらの収縮を起こす能力³⁰⁾。受動の能力は、怒りが [実現する] ための能力、高慢が [実現する] ための能力、勝利や支配や名声を求める闘争や精神的現象 (ahdāth nafsānīya)³¹⁾ が [実現する] ための能力。
- 41: 精神的能力の種類はいくつか? — 3つ。
- 42: それは何か? — (1) 統御し統治する力 (mudabbira sāyisa)³²⁾、(2) 意志で動かす力 (mā tuḥarriku bi-irāda)、(3) 感覚する力 (ḥassāsa)。統御する力は3つ、つまり (1a) 想像 (takhayyul) が [実現する] ための力、(1b) 思考 (fikr) が [実現する] ための力、(1c) 記憶 (dhikr) が [実現する] ための力。意志で動かす力とは、筋肉を動かし、そうして意志で動かされる器官が動くことになるような力。感覚する力は5つ、つまり (3a) 視覚の力 (baṣar)、(3b) 聴覚の力 (sam'), (3c) 嗅覚の力 (shamm)、(3d) 味覚の力 (madhāq)、(3e) 触覚の力 (lams)³³⁾。
-
- 23) = δύναντις φυσική. 植物、動物、人間が有する。ガレノスは植物と動物に共通する能力を自然 (φύσις) に、動物のみが有する感覚と随意運動を魂 (ψυχή) に帰属させている。Galenus, *De Naturalibus Facultatibus*, 第1巻1章 [Galen II:1-2] を参照。
- 24) = δύναντις ζωική. 動物、人間が有する。下記 1:49 の注を参照。
- 25) = δύναντις ψυχική. 人間が有する。
- 26) それぞれ、肝臓 (生殖に関するもののみ睾丸)、心臓、脳を源とし、下記の精気を媒介にして、静脈、動脈、神経を通じて伝播する。
- 27) Galenus, *De Naturalibus Facultatibus* [Galen II:1-214] で扱われている。
- 28) 第二の変質力のこと。
- 29) ラテン語訳では *assimilativa* と訳されている [Gracia&Vidal 1974/5:319]。
- 30) 動脈の拡張と収縮つまり脈拍は、心臓から動脈の壁を通して送られる力によって実現されると考えられた。この力は心臓自体の拡張と収縮も実現させている。Galenus, *De Usu Pulsuum*, 第4章 [Galen V:164] を参照。
- 31) 感情のこと。
- 32) mudabbir および (3) の ḥassāsa と並ぶことを考えて、sāyisa と読む。dabbara は διοικειν の訳か。プラトンなどが言う、脳にある人間を統御する靈魂の部分にあたる。
- 33) 脳には前部 (さらに2つに分かれる)、中部、後部と脳室が3つに区分されていて、そのそれぞれで精神的能力が実現されると考えられていた。前部は想像、中部は思考、後部は記憶を司る [Theophilus:184]。ガレノスには

- 43: 自然的能力はどこから起こるか? —— 肝臓から。
- 44: 動物的能力はどこから起こるか? —— 心臓から。
- 45: 精神的能力はどこから起こるか? —— 脳から。
- 46: 諸機能の種類はいくつか? —— 2つ。
- 47: それは何か? —— (1) 単純な機能、つまりそれぞれ1つの能力によって為される機能。吸引、保持、消化、排出のように。(2) 複合の機能、つまり2つあるいはそれ以上の能力によって為されるもの。食欲、栄養の浸透のように。というも、食欲は2つの能力の機能によって完成し、その片方は吸引力、他方は感覚能力である。栄養の浸透もまた2つの能力の機能によって完成し、その片方は吸引力、他方は排出力である。
- 48: 諸精気はいくつか? —— 3つ。
- 49: それは何か? —— (1) 自然精気 (tabī'īya)³⁴⁾、(2) 動物精気 (ḥayawānīya)³⁵⁾、(3) 精神精気 (nafsānīya)³⁶⁾。(1) 自然精気は肝臓から送られ、脈打たない血管から身体全体に浸透し、自然的能力に奉仕する。(2) 動物精気は心臓から送られ、脈打つ血管から身体全体に浸透し、動物的能力に奉仕する。(3) 精神精気は脳から送られ、神経から身体全体に浸透し、精神的能力に奉仕する³⁷⁾。

第2章—— [自然な過程から外れた状態について]³⁸⁾

- 01: 自然要素が、それぞれその [あるべき] 状態から外れたとき、身体に生じるものは何か? —— 病気、あるいは健康でも病気でもない状態を生じる。
- 02: 病気の類はいくつか? —— 3つ。
- 03: それは何か? —— (1) 部分が等しい器官 (a'dā' mutashābiha al-ajzā')³⁹⁾ に生じる病気、それが生じる器官の名前を共有するもの。(2) 道具的器官 (a'dā' āliya)⁴⁰⁾ に生じる病気、それと [その病気が生じる] これらの器官の間で共通の名前のもの。(3) これら2種類の器官に共通するもの。これは連続性の分断 (tafaruq al-itṭiṣāl) である。
- 04: 部分が等しい病気の種類はいくつか? —— 8つ。
- 05: それは何か? —— 4つは単純、つまり (1) 熱性、(2) 冷性、(3) 湿性、(4) 乾性。4つは複合、つまり (5) 熱性かつ乾性、(6) 熱性かつ湿性、(7) 冷性かつ乾性、(8) 冷性かつ湿性。
- 06: その8つそれぞれの種類はいくつか? —— 2つ。
- 07: それは何か? —— (1) 単純な性質から生じるもの、あるいは (2) 実体 (mādda)⁴¹⁾ の流出を

無いこの説は、イスラームの医学者に受け入れられた。また前部の脳室は各感覚器と、後部の脳室は脊髄と繋がるため、これらの能力を司っている。Galenus, *De Usu Partium*, 第9巻 [Galen III:684-758] を参照。

34) = πνεῦμα φυσικόν。プラトンが採った魂の三部分説に従ってガレノスは上記自然的能力の源を肝臓としたが、それに奉仕すべき自然精気はガレノスの著作には登場しない。[Temkin 1951] を参照。

35) = πνεῦμα ζωτικόν。本来、「生命の」精気であったが、ζωτικόν (動物の) と混同されて翻訳された。[Jacquart 1986: 228] を参照。動物精気は心臓 (左心室) で、精製されて蒸気状になった血液と吸気から生じる。

36) = πνεῦμα ψυχικόν。精神精気は脳にある (と考えられていた) 血管の網で、動脈内の動物精気がさらに精製されることによって生じる。

37) 従って人間には、脳 - 神経 - 精神的能力、心臓 - 動脈 - 動物的能力、肝臓 - 静脈 - 自然的能力という3重の脈管系が存在することになる。これに骨格系と筋肉系を加えたものが、中世医学の解剖図譜の典型となった。

38) ラテン語訳の第3章 05-11 節に相当する。

39) 等質部分 (ὁμοιομερής) のことで、組織を指す。

40) 異質部分 (ἀνομοιομερής) のことで、(現在でいう) 器官を指す。Aristoteles, *De Partibus Animalium*, 第2巻1章 646b10-27 を参照。

41) 異常な体液のこと。体液を意味する単語は khilt / akhlāt (体液)、mādda / māddāt (実体)、faql / fuḍūl (余剰物) と

伴うもの。

08: 単純な性質による熱性の病気とは例えば何か? — 根本的器官 (a'dā' ašlīya)⁴²⁾ に固着する発熱で、ギリシア人がイクティコス (iqṭīqūs)⁴³⁾ と呼んだもの、つまり消耗熱 (ḥummā al-dīqq)。

09: 実体の流出を伴う熱性の病気とは例えば何か? — 腐敗から生じる発熱。

10: 実体を伴わない冷性の病気とは例えば何か? — 例えば、雪の中を旅して寒さに晒された人に生じるような硬直。

11: 実体の流出を伴う冷性の病気とは例えば何か? — 半身不随 (fālij)。

12: 実体を伴わない湿性の病気とは例えば何か? — 例えば、潰瘍の肉が弛むこと、あるいは身体他の肉が弛むこと。

13: 実体を伴う湿性の病気とは例えば何か? — 例えば、水腫 (istisqā')。

14: 実体を伴わない乾性の病気とは例えば何か? — 例えば、嘔吐から生じる痙攣。

15: 実体を伴う乾性の病気とは例えば何か? — 瘰 (saraṭān)。

16: 道具的病気の種類はいくつか? — 4つ。

17: それは何か? — (1) 外見 (khilqa) つまり形の病気、(2) 器官の量の病気、(3) その数の病気、(4) その位置の病気。

18: 外見つまり形に関する道具的病気の種類はいくつか?⁴⁴⁾ — 5つ。

19: それは何か? — 造形 (shakl) の病気、穴 (tajwif) の病気、脈管 (majārī) の病気、粗面 (khushūna) による病気、滑沢 (malāsa) による病気。

20: 造形の病気とは例えば何か? — 例えば、籠のような頭 (ra's musaffat)⁴⁵⁾。

21: 穴の病気とは例えば何か? — 例えば、足の土踏まずや手のひらの内側が埋まっていること。

22: 脈管の病気とは例えば何か? — 例えば、脈管が狭い、あるいは広いこと。

23: 粗面の病気とは例えば何か? — 例えば、粗い気管。

24: 滑沢の病気とは例えば何か? — 例えば、滑らかな子宮。

25: 器官の量に関する道具的病気の種類はいくつか? — 2つ。

26: それは何か? — (1) 必要なもの以上に肥大したときの、器官の量の増大によるもの。大きな頭や厚い舌のように。(2) 必要なもの以下となる減少や縮小によるもの。小さい頭や、胃と肝臓が小さいときのように。

27: 器官の数に関する道具的病気の種類はいくつか? — 2つ。

28: それは何か? — (1) 増加によるもの、あるいは (2) 減少によるもの。

29: 増加による形式はいくつか? — 2つ。

30: それは何か? — (1) 自然な過程に沿う類のもの、増えた指のように。(2) 自然な過程から外れた類のもの、寄生虫 (dūd)、条虫 (ḥubb al-qarā'), いぼ (tha'ālīl) のように。

31: 減少による形式はいくつか? — 2つ。

32: それは何か? — (1) 減少が全体的な減少のもの、指の完全な欠如のように。(2) 減少が部分的な減少のもの、指の指骨ひとつの欠如のように。

33: 器官の位置に関する道具的病気の種類はいくつか? — 2つ。

いくつかあり、その文脈に応じて使い分けられていると考えられる。詳しくは [Jacquart 1986: 226–27] を参照。

42) 主要器官のこと。9:03 を参照。

43) =ἐκτικός。

44) 25-26/3 は重複のため削除。

45) safat (=大きな籠) のような頭 [Lane I:1372c]。

34:それは何か? —— (1) 器官のその [あるべき] 位置からの移動によるもの、脱臼のように。(2) 器官とそれに繋がる [別の] 器官との接合の悪化によるもの、唇や指がくっついて離れない、あるいは離れて接触しないときのように。

35:連続性の分離 (infiṣāl al-itṭiṣāl)⁴⁶⁾ はどのようにして共通の病気になるか? —— 部分が等しい器官の1つのみに、また道具的器官に生じることから。

36:部分が等しい器官の1つのみに生じるそれは例えば何か⁴⁷⁾? ——それは時には骨に生じる、時には肉に生じる、時には神経に生じる、時には脈打つ血管と脈打たない血管に生じる、時には筋肉に生じる、時には皮膚に生じる⁴⁸⁾。骨に生じたなら骨折 (kasr)⁴⁹⁾、肉に生じて新しいなら傷 (jurh)⁵⁰⁾、それが古いなら潰瘍 (qarḥa)⁵¹⁾、神経に生じたなら切断 (batr)⁵²⁾ と呼ばれる。血管に生じたなら別の名前で呼ばれる。つまりその血管が脈打つものならその傷は血液の母、ギリシア語でアヌーリシマ (anūrisīmā)⁵³⁾ と呼ばれ、脈打たないものなら破裂 (fazr)⁵⁴⁾ と呼ばれる。筋肉に生じ、それが筋肉の両端に生じたなら綻び (hatk)⁵⁵⁾ と言われ、筋肉の真ん中なら破れ (faskh)⁵⁶⁾、ギリシア語でアヌーリシマ (anūrisīmā) と呼ばれる。皮膚に生じたなら擦り剥け (salkh)⁵⁷⁾ と呼ばれ、古いなら分断 (tafarruq) と呼ばれる。

37:道具的器官のそれは例えば何か? ——手や足の切断。

38:身体の状態はいくつか? ——3つ。

39:それは何か? —— (1) 健康、(2) 病気、(3) 健康でも病気でもない状態 (al-ḥāl allatī laysat bi-ṣiḥḥati wa-lā marḍ)⁵⁸⁾。

40:健康とは何か? ——健康とは、自然な過程に沿った諸機能が遂行されるような身体の状態。

41:病気とは何か? ——病気とは、自然な過程から外れ、諸機能が直接に害を被るような身体の状態。

42:健康でも病気でもない状態とは何か? ——健康でも病気でもない状態とは、健康であるとも病気であるとも決して言い切れないような身体の状態。

43:健康でも病気でもない状態とはいくつの形式によって言われるか? ——3つの形式による。

44:それは何か? —— (1) 1つの身体で別々の器官に健康と病気が共にあるとき、盲目の人や跛行の人の身体のように。(2) それが身体に極限まで達していないとき、老人や回復中の人の身体のように。(3) あるときは身体が健康であるが、あるときは病気である場合。

45:それは例えば何か? ——気質が熱の人は夏は多くの場合に病気で、冬は健康である。気質が冷の人は冬は多くの場合に病気で、夏は健康である。気質が湿の人は幼年期は多くの場合に病気であ

46) 怪我に当たり、外科的治療に関わる分野である。イスラームの医学者らはその治療に関する情報を、7世紀に活躍したアエギナのパウロス Paulus Aegineta (ca.625-ca.690) に負っている。

47) 31/3-4 は重複のため削除。

48) Galenus, *De Constitutione Artis Medicae* [Galen I:238-39] には「等質 [部分] にはそのような病気が生じることを知らねばならない。骨、神経、静脈、動脈、肉において、連続するものが刺されたり、腐食したり、切れたり、裂けたり、壊れたり、崩れたりする。」とあるが、その箇所には骨と肉に関する事柄しか記述されていない。

49) = κάταγμα.

50) = τραῦμα.

51) = ἔλκος.

52) = νύγμα.

53) = ἀνευρυσμα.

54) = ῥῆξις φλεβοραγία とも言う。

55) = ῥῆγμα.

56) = σπάσμα.

57) = ἔκδαρμα.

58) ギリシア語では οὐδέτερα, ラテン語では neutralitas, つまり中立状態を示す言葉が用いられる。

り、青年期や老年期になるとその身体は健康になる。気質が乾の人は、幼年期は多くの状況で健康であり、青年期や老年期は病気になる。

46:健康、病気、健康でも病気でもない状態はそれぞれ、いくつのものにあるか?—3つのものに。

47:それは何か?—(1)これら3つの状態の1つがある身体、(2)これらを引き起こし維持する原因、(3)これらを示す徴候⁵⁹⁾。

第3章——[病気の原因について]⁶⁰⁾

01:[病気の]原因⁶¹⁾の類は何か?—2つ。

02:それは何か?—(1)自然なもの、あるいは(2)自然な過程から外れたもの。(1)自然な原因とは、健康を維持するものとそれを引き起こすもの。それを維持する原因は健康な人々にあり、それを引き起こす原因は病気の人々にある。(2)自然な過程から外れた原因とは、病気の原因あるいは健康でも病気でもない状態の原因。病気の原因とは、病気を生じる原因とそれを維持する原因。健康でも病気でもない状態の原因とは、健康でも病気でもない状態を生じる原因とそれを維持する原因。

03:健康と病気に一般的で、共通する原因の種類はいくつか?—6つ。

04:それは何か?—(1)人間の身体を取り巻く大気(hawā' muḥīt)、(2)食べるものと飲むもの(mā yu'kalu wa yushrabu)、(3)運動と静養(ḥaraka wa sukūn)、(4)睡眠と覚醒(nawm wa yaqza)、(5)排出と滞留(istifrāgh wa ihtiqān)、(6)精神的現象(aḥdāth nafsāniya)。これら6つ⁶²⁾は、量、質、時、順序に関してあるべき程度に適合していると、健康を維持し、またそれを生じる。量、質、時、順序に関してこの反対のように機能すると、病気を生じ、またそれを維持する。

05:病気にする原因の種類はいくつか?—3つ。

06:それは何か?—(1)始原(bādi'a)⁶³⁾と呼ばれるもの、これは外から身体に現れる原因。暑さや寒さのように。(2)先行(sābiqa)⁶⁴⁾と呼ばれるもの、これは身体の内から作用する原因。鬱血(imtilā')のように。(3)結合(wāṣila)⁶⁵⁾と呼ばれるもの、これは存在している間は病気が存在し、無くなるとそれが無くなることで病気も無くなるような原因。発熱を生じる腐敗のように⁶⁶⁾。

07:別の区分の形式によれば、病気の原因の種類はいくつか?—2つ。

08:それは何か?—(1)共通なもの、あるいは(2)特殊なもの。

09:病気を生じる共通な原因の種類はいくつか?—2つ。

10:それは何か?—(1)偶然的なもの、あるいは(2)必然的なもの。

11:偶然的原因とは例えば何か?—石、剣での切断、火での火傷、害虫に刺されること、猛獣に

59) つまり、これらがそれぞれ上記の3つの状態に分類され関係づけられる。

60) ラテン語訳の第3章12-27節に相当する。

61) sababを「原因」または「理由」と訳す。時として同義になる'illaは、その場合は「病因」と訳したが、「病気」の意味か「病因」の意味か判別できない箇所も多い。

62) これら6つはラテン語で非自然要素 sex res nonnaturales と呼ばれたもの。人間にとって本性的(natural)では無いが、本性に反するもの(contra natural)つまり病気でもないため、そう呼ばれる。これらの非自然要素はガレノスの著作に既に見られる[Galen I:368]が、これが自然要素と並ぶ必須なものとして整理されたのはガレノス以降である[García-Ballester 1993]。また、第8章を参照。

63) = προκαταρκτικός.

64) = προκαταρκτικός.

65) = συνεκτικός. sabab māsik と訳されることもある。

66) このような原因の分類はもともとストア派の説である。[Lyons 1969]を参照。

咬まれること。

12: 必然的原因とは例えば何か? ——必然的原因とは、既に述べた6つのこと⁶⁷⁾。[さらに] 言えば、これは健康と病気に共通する。

13: 病気を生じる特殊な原因の種類はいくつか? ——3つ。

14: それは何か? ——(1) 部分が等しい器官の病気を生じる、あるいはそれを維持するもの。(2) 道具的器官の病気を生じる、あるいは維持するもの。(3) 連続性の分断を生じる、あるいは維持するもの。

15: 熱性の病気の原因はいくつか? ——5つ。

16: それは何か? ——(1) その第一は精神の動きでも身体の動きでも、節度を越えた動き。精神の動きとは、怒りや不安など。身体の動きとは、体操など。(2) 第二の原因は外的な現実的な熱との接触。火の熱や太陽の熱との接触のように。(3) 第三の原因は可能的に身体に現れる熱。タマネギ (baṣal)⁶⁸⁾、ニンニク (thūm)⁶⁹⁾、カラシ (khardal)⁷⁰⁾、コショウ (filfil)⁷¹⁾などを食べて身体が獲得する熱のように。(4) 第四の原因は毛穴の詰まり。(5) 第五の原因は腐敗⁷²⁾。

17: 冷性の病気の原因はいくつか? ——8つ。

18: それは何か? ——(1) 第一の原因は外的な現実的な他の冷との接触。雪の冷たさのように。(2) 第二の原因は可能的に冷のものが身体に現れること。ケシ (khashkhāsh aswad)⁷³⁾のミルク、つまりオピウム (afyūn)⁷⁴⁾と呼ばれるもののように。(3) 第三の原因は身体に現れるものが多く、それを浸して内在熱が消えてしまうほどになること。(4) 第四の原因は身体に現れるものが少なすぎて、内在熱が鎮静し消失してしまうほどになること。(5) 第五の原因は余剰物を保持し、内在熱を浸してしまうほどの過剰な詰まり。(6) 第六の原因は内在熱が消散するほどの身体の熱量や震えの過剰。(7) 第七の原因は消散するものが多くなるほど過剰な運動。(8) 第八の原因は過剰な静養。

19: 乾性の病気の原因はいくつか? ——4つ。

20: それは何か? ——(1) 第一の原因は外的な現実的な他の乾との接触。熱風 (samā'im) のように。(2) 第二の原因は可能的に乾のものが身体に現れること。酢や塩のように。(3) 第三の原因は食べるものと飲むものが少ないこと。(4) 第四の原因は過剰な運動。

21: 湿性の病気の原因はいくつか? ——4つ。

22: それは何か? ——(1) 第一の原因は現実的に湿らせるものとの接触。入浴のように。(2) 第二の原因は可能的に湿らせるものが身体に現れること。新鮮な魚のように。(3) 第三の原因は食べるものと飲むものが多いこと。(4) 第四の原因は安らぎや温和。

23: 病んだ器官へ流れる実体を伴う、気質の悪化による病気の原因はいくつか? ——5つ。

24: それは何か? ——(1) 排出する器官の強さ、(2) 受け取る器官の弱さ、(3) 実体の多さ、(4) 栄養力の弱さ、(5) 脈管の広さ。

25: 自然な器官の造形に害が加わる形式はいくつか? ——5つ。

67) 3:04を参照。

68) κρόμμυον / *Allium cepa* L. [Sinā II:390-1] [Baytār I: 132-34]。

69) σκόρδον / *Allium sativum* L. [Sinā II:695-96] [Baytār I: 207-209]。

70) σίνηπι / *Sinapis alba* L. [Sinā II:702] [Baytār I: 318-19]。

71) πέπερι / *Piper nigrum* L. [Sinā II:626-27] [Baytār III: 227-28]。

72) 以下、熱性、冷性、乾性、湿性の病気の原因については、Galenus, *De Causis Morborum*, 第2-5章 [Galen VII:2-20]を参照。

73) μήκων / *Papaver somniferum* L. [Sinā II: 699-701] [Baytār II: 328-29]。

74) ὄπιον. ケシの液汁。[Sinā II:366-67] [Baytār I: 61-63]。

26:それは何か?——(1)子宮の中での胎の発生の時に。(2)誕生の時に。(3)産着[を着せる]時に。(4)授乳の時に。(5)これらの時のいずれか、あるいはその後で起こる病因のため。(1)子宮の中での胎発生の時に器官の造形が悪化するの、精液が多ければ実体の多さのため、精液が乏しければ実体の少なさのため、精液が濃いあるいは水っぽく薄いならばその性質の適切さが少ないためである。(2)赤子の出産の時に造形が悪化するの、赤子が上手く出てこない場合。背中からあるいは両膝からのように。(3)産着を着せる時に[造形が悪化するの]は、産着を着せるのに失敗する場合。(4)授乳の時に[造形が悪化するの]は、抱えるのに失敗した、あるいは乳を飲ませ吸わせる時に[失敗した]場合。(5)これらの時のそれぞれ、あるいはその後で起こる病因とは、赤子に起こる病因のように。例えば、神経の切断、神経に起こる痙攣、神経の弛緩、潰瘍や腫瘍の痕。

27:自然な器官の造形に害が加わる原因はいくつか?——7つの原因による。

28:それは何か?——(1)乳母、(2)医者、(3)病人自身、(4)骨折、(5)打撲、(6)実体の余剰、(7)その不足。(1)乳母は、赤子を抱くのに失敗した場合、また歩き始めるべき時より前に彼を歩かせた場合。(2)医者は、骨折が生じた器官を上手く整復し固定できない場合。(3)病人自身は、整復された器官が丈夫で強くなる前に動かした場合。(4)骨折は、尻の関節の端が丸まり、腿が曲がってしまう場合のように。(5)打撲は、鼻が砕けて、そのためつぶれた鼻が起こる場合のように。(6)実体の余剰は、癩病患者を襲うもののように。(7)実体の不足とは、肺病患者を襲うもののように。

29:脈管の狭さはいくつの原因によるか?——3つの原因による。

30:それは何か?——(1)その結合のため、(2)その癒着のため、(3)そこに起こる閉塞のため。(1)結合とは、保持力の激しさのため、落とす力の弱さのため、冷の優勢のため、停滞の優勢のため、乾の優勢のため、強い結束のようなその場所に起こる圧迫の原因のため、自然な器官の造形に加わる害のため、そこに生じる腫瘍のために起こる。(2)癒着は、それが潰瘍の発生に先行した場合に起こる。(3)閉塞は、糜汁、結石、凝固した血液、膿のような脈管の穴にあるもののため、あるいは増大した肉やいぼのような脈管の中で生長するものために起こる。

31:脈管の拡大はいくつの原因によるか?——4つの原因による。

32:それは何か?——(1)排出力の悪い動きのため。(2)保持力の弱さのため。(3)熱と湿の優勢のため。(4)開放性の薬品のため。

33:滑沢が生じるのはいくつの原因によるか?——2つの原因による。

34:それは何か?——(1)内からの原因による、あるいは(2)外からの原因による。(1)内部の原因とは、粘ついた体液など。(2)外からの原因とは、油に溶かした蠟など。

35:粗面が生じるのはいくつの原因によるか?——2つの原因による。(1)内からの原因による、あるいは(2)外からの原因による。(1)内からの原因とは、熱性の余剰物など。(2)外からの原因とは、煙や埃など⁷⁵⁾。

36:諸器官の数の増加が生じるのはいくつの原因によるか?——2つの原因による。

37:それは何か?——(1)その増加が自然なものなら、自然で良質な実体や力の余剰による。(2)自然な事態から外れたものなら、自然でない実体や力の余剰による。

38:諸器官の数の減少はいくつの原因によるか?——2つの原因による。

39:それは何か?——(1)内からの原因による、あるいは(2)外からの原因による。(1)内からの原因によるとは、実体の不足によること。(2)外からの原因によるとは、火による火傷、寒さ、腐敗、切断によること。腐敗が生じるのは、壊死させ腐敗させる薬品、あるいは消散するもの保

75) 造形などの原因については、Galenus, *De Causis Morborum*, 第7章 [Galen VII: 26-34] を参照。

持による⁷⁶⁾。

40: 諸器官の肥大はいくつの原因によるか? — 3つの原因による。

41: それは何か? — (1) 実体の多さによる、(2) 力の余剰、あるいは (3) その両方による。

42: 諸器官の萎縮はいくつの原因によるか? — 3つの原因による。

43: それは何か? — (1) 力の弱さ、(2) 良質な実体の不足、あるいは (3) 切断、火による火傷、腐敗、寒さのような外からの病因⁷⁷⁾。

44: 器官のその [あるべき] 位置からの移動はいくつの原因によるか? — 2つの原因による。

45: それは何か? — (1) 過剰な運動による、あるいは (2) 器官を弛緩させ滑らせるような節度を越えた湿気。

46: それ以外との結合におけるその [あるべき] 状態からの、器官の移動はいくつの原因によるか? — 2つの原因による。(1) 分断し難い集合による、あるいは (2) 集合し得ない分断による。

47: これらはそれぞれどのような原因によるか? — 分断のない集合なら、その人間の誕生から起こるもの、あるいは潰瘍から生じるもの。集合のない分断なら、それが生じるのは濃縮、潰瘍の痕、痙攣から⁷⁸⁾。

48: 連続性の分断はいくつの原因によるか? — 2つの原因による。

49: それは何か? — (1) 外からの原因による、あるいは (2) 内からの原因。(1) 外からの原因とは、乱暴な運動のような割って裂くもの、剣のような切断するもの、綱のような伸ばすもの、石のような砕き打つもの。(2) 内からの原因とは、切断するようなきつい糜汁、伸ばすような濃厚なガス、裂くような濃い糜汁⁷⁹⁾。

第4章 — [徴候について]⁸⁰⁾

01: 諸徴候の類はいくつか? — 3つ。

02: それは何か? — (1) 健康を示すもの、(2) 病気を示すもの、(3) 健康でも病気でもない状態を示すもの。

03: これら3つ、つまり健康、病気、健康でも病気でもない状態のそれぞれを示す徴候の類はいくつか? — 2つ。

04: それは何か? — (1) 部分が等しい器官 [について] を示すもの、あるいは (2) 道具的器官 [について] を示すもの。

05: 部分が等しい器官の病気を示す徴候の種類はいくつか? — 2つ。

06: それは何か? — (1) 本質的なもの、あるいは (2) 偶然的なもの。

07: 本質的徴候とはどのような徴候か? — 熱、冷、湿、乾。

08: 偶然的徴候はいくつか? — 3つ。

09: それは何か? — (1) 触覚で知覚されるもの、固さや軟らかさのように。(2) 視覚で知覚されるもの、白さや赤さのように。(3) 完璧の点からわかるもの、完全に完璧な諸機能のように。

10: 道具的器官の病気を示す徴候の種類はいくつか? — 2つ。

76) 増加および減少の原因については、Galenus, *De Causis Morborum*, 第8章 [Galen VII: 34–35] を参照。

77) 肥大および萎縮の原因については、Galenus, *De Causis Morborum*, 第9章 [Galen VII: 35] を参照。

78) 位置の移動の原因については、Galenus, *De Causis Morborum*, 第10章 [Galen VII: 35–37] を参照。

79) 連続性の分断の原因については、Galenus, *De Causis Morborum*, 第11章 [Galen VII: 37–41] を参照。

80) ラテン語訳の第3章 28–33 節に相当する。

- 11：それは何か？——(1) 本質的なもの、あるいは(2) 偶然的なもの。
- 12：本質的徴候の種類はいくつか？——4つ。
- 13：それは何か？——鑄型 (ṣīgha)、量 (miqdār)、数 (‘adad)、位置 (wad‘)。
- 14：偶然的徴候の種類はいくつか？——4つ。美しさ (ḥusn)、醜さ (qubh)、完璧な機能 (fi‘l mustakmal)、欠陥のある機能 (fi‘l māriq)。
- 15：最も共通の徴候の類はいくつか？——3つ。
- 16：それは何か？——(1) 既に過ぎ去ったことを示すものは、想起させるもの (mudhakkira)⁸¹⁾ と呼ばれる。例えば、身体が湿っているのを見たとき、発汗がそれ以前にあったことを知るように。(2) 現存することを示すものは、指し示すもの (dālla)⁸²⁾ と名付けられている。例えば、脈が大きく速いのを見つけたとき、そこから熱が優勢であることを証明するように。(3) いずれ起こることを示すものは、知識が先立つもの (sābiq al-‘ilm)⁸³⁾ と名付けられている⁸⁴⁾。例えば、下唇を見たときそれが震えているなら、そこから進んで、嘔吐がいずれ起こることを知るように。そのことを明らかにしたときには、その先取りは予後 (indhār) と呼ばれる。
- 17：徴候と症状 (a‘rād) の相違は何か？——その相違は、そのそれぞれが関係するものとの関係にある。すなわち、それらが意図することは両方とも同じ事柄であるが、病人にとっては症状、医者にとっては徴候となる。
- 18：症状の類はいくつか？——3つ。
- 19：それは何か？——(1) 諸機能に加わる害に見つかるもの、消化の悪化のように。(2) 身体の状態の悪化に見つかるもの、黄疸 (yaraqān) のように。(3) 身体から排出されるものの状態に見つかるもの、黒い尿のように⁸⁵⁾。
- 20：諸機能に加わる害に生じる症状の種類はいくつか？——3つ。
- 21：それは何か？——(1) 機能の停止によって生じるもの、盲目や消化不良のように。(2) その不足によって生じるもの、視界の暗さや消化の遅れのように。(3) その [あるべき] 状態からの変化によって生じるもの、目前に虫 (baqq) や枝 (‘idān) が見える者の見え方⁸⁶⁾、あるいは食べ物が消化の過程で酸性や煙状になるように⁸⁷⁾。
- 22：身体の状態に生じる症状の種類はいくつか？——4つ。
- 23：それは何か？——(1) 視覚で知覚されるもの、黄疸、癩病 (baraṣ)、白斑 (bahaq)、黒い舌、赤さ、白さなどのように。(2) 嗅覚で知覚されるもの、息の臭い、汗の臭い、鼻孔の臭い、脇の下の臭いのように。(3) 味覚で知覚されるもの、苦さ、塩っぱさ、酸っぱさ、甘さのように⁸⁸⁾。(4) 触覚で知覚されるもの、軟らかさや固さのように。
- 24：身体から排出されるものの状態に起こる症状の種類はいくつか？——2つ。
- 25：それは何か？——(1) 聴覚で知覚されるもの、あるいは(2) 限りなく出るもの。
- 26：聴覚で知覚されるものはいくつか？——2つ。

81) = σημεία ἀναμνηστική.

82) = σημεία διαγνωστική.

83) = σημεία προγνωστική. mundhira と訳されることもある。

84) Galenus, *Ars Medica*, 第3章 [Galen I: 313–14] を参照。

85) Galenus, *De Constitutione Artis Medicae*, 第14章 [Galen I: 273] を参照。

86) 幻覚、幻視のこと。

87) (1) から (3) までで挙がっている例のうち、前者は動物的能力の欠陥、後者は自然的能力の欠陥である。

88) これらは汗や唾液などの味を指す。

27:それは何か?——(1)音(awwāt)、(2)声色(naghm)。(1)音とは、げっぶの音、腹鳴の音、肛門から出る風の音など。(2)声色とは、しわがれや水飲みと関連する声色など⁸⁹⁾。

28:限りなく出るものはいくつか?——3つ。

29:それは何か?——(1)その類全体で⁹⁰⁾自然な過程から外れたもの、血液の噴出のように。(2)量に関して自然な過程から外れたもの、下痢や鼻血のように。(3)質に関して自然な過程から外れたもの、黒い尿のように。

30:病因が生じた器官を証明するのは、どのような徴候によってか?——そのような「病因が生じた」器官が身体の外側にあるなら、感覚に対して表れるものから証明する。肌の色の变化、それに生じる軟らかさや固さ、熱さや冷たさ、器官の大きさやその部分の数のように。そのような器官が内側にあるなら、6つの方法で証明する。第一の方法は機能に加わる害から。第二の方式は身体から排出されるものから。第三の方法は器官それぞれに特有の痛みから。第四の方法は病んだ器官の位置から。第五の方法は病因の独自性と共通性から。第六は検査と問診から。

31:病気の症状の原因は何か?——すなわち症状が生じるのは、気質の悪化から、道具的病気から、あるいは連続性の分断から。

第5章——[治療について]⁹¹⁾

01:医学の治療はいくつの部分に分かれるか?——2つ。

02:それは何か?——(1)健康な人々を、彼らの[現状の]状態に近いものに依る健康に維持すること。また(2)病気の人々が回復するまで、彼らの病気と反対のものによって治療すること⁹²⁾。

03:健康な人々を健康に維持することはいくつの部分に分かれるか?——3つ。

04:それは何か?——(1)第一は全く欠点が無いような健康の状態にある身体の維持。(2)第二は健康の状態から逸れ始めた身体の維持を先行させること。(3)第三は弱い身体の管理。

05:健康に全く欠点の無いような者の健康の維持は何によるか?——あの共通の6つの原因(awwāb sitta)⁹³⁾の改善によって。これらは、我々の身体を取り巻く大気、食べるものと飲むもの、睡眠と覚醒、排出と滞留、運動と静養、精神的現象のこと。

06:健康から逸れかかった身体の維持における処置は何によるか?——2つのことによる。

07:それは何か?——(1)身体で優勢な体液の排出。あるいは(2)前に述べたあの6つのことのうち賞賛される実体に身体を任せること⁹⁴⁾。

08:健康の維持のために管理を必要とする弱い身体とはどのような身体か?——赤子の身体、老人の身体、回復中の人々の身体。赤子と老人の身体は、その弱さと、そこに生まれる余剰物の多さのため、そしてそれらが危険と離れていないため。回復中の人々の身体は、その血液が少なく、増やす必要があるため。

09:治療の種類はいくつか?——2つ。

89) 声も含め、身体から発する様々な音は、体内にある空気が原因である。その中でも声は、口、喉、肺といった呼吸に関わる器官から発する音に限られる。そのため、このような区分が為されている。

90) 後述の量と質の両方に関して、ということ。

91) ラテン語訳の第3章34-37節に相当する。

92) 厳密な意味での治療は後者。前者は予防にあたる。

93) 3:04を参照。

94) つまり賞賛されるような条件に身体を置くこと。

10:それは何か?——(1) 共通なもの。これは既に述べたあの6つの原因の管理による。(2) 特殊なもの。

11:特殊な治療の種類はいくつか?——3つ。

12:それは何か?——(1) 部分が等しい器官の病気に対して。(2) 道具的器官の病気に対して。(3) 連続性の分断に対して。

13:造形に生じる病気は何によって治すか?——造形を自然な状態に戻すこと、またその状態に留まるように固定することによって。

14:器官の窪みの病気は何によって治すか?——その窪みの全てが、あるべき程度より増えているなら、その治療は安静と固定による。必要なものに足りないなら、その治療はその器官を集中的に機能させることおよび呼吸の抑制による。

15:脈管の広さの病気は何によって治療するか?——器官の窪みの増加における病気を治すものによって、またそれを生じる原因と反対のものによって。

16:脈管の狭さから生じる病気は何によって治すか?——脈管の狭さが、保持力の激しさの余剰から生じたなら、その治療はその器官を弛緩させるような罨法⁹⁵⁾や温湿布によって。その狭さが排出力の弱さから起こるなら、閉塞を開放し力づけるものによって。狭さが冷から起こるなら、加温によって。停滞から起こるなら、弛緩させるものによって。乾から起こるなら、加湿によって。強い結束から生じたなら、放し解くことによって。造形の悪化から生じたなら、造形の矯正によって。腫瘍から生じたなら、その治療はこの腫瘍が回復するように治療することによる。それが生じたのが癒着からなら、裂くことによって。その狭さがその脈管の中に入り込んだもののためなら、開放性の薬品や切開によって。その脈管の中で生長するもののためなら、その治療はその中で生長したものの切除による。

17:滑沢は何によって治療するか?——粗くすることによって。

18:粗面は何によって治療するか?——滑らかにすることによって。

19:数の余剰は何によって治療するか?——瘰癧(khanāzīr)に対して為されるように、打ち壊すことによって。あるいは目に集まる水に対して為されるように、その場所からの移動によって。

20:数の不足が回復するのは誰で、回復しないのは誰か?——不足する器官が血液から生まれるものなら、全ての年齢において回復できる。精液から生まれるものなら、幼年期にのみ回復できる。

21:器官の肥大は何によって治療するか?——安静と固定によって。

22:器官の萎縮は何によって治療するか?——運動と摩擦によって。

23:器官のその[あるべき]位置からの移動は何によって治療するか?——器官を伸ばし、その[あるべき]位置に戻すことによって。

24:器官の間の位置における接合の変化は何によって治療するか?——それが、分断できないように集合することになったためなら、その治療は分断による。それが、集合できないように分断することになったため、潰瘍の痕のためなら、その治療は鉄⁹⁶⁾による。それが腫瘍のためなら、その治療はその腫瘍を消散させることによる。痙攣のためなら、その治療は消散させ弛緩させることによる。

25:連続性の分断が回復するまでの治療において必要とされることはいくつか?——4つ。

26:それは何か?——(1) 分断したものを集めること、(2) 集めたものをその状態に維持すること、

95) 薬剤などの温かい液体を患部に注ぐ方法。

96) 切開を意味する。Hippocrates, *Aphorismi*, 第7巻87 [Hippocrates IV:608-9]を参照。

(3) 分断したものの間に何かが入り込むのを防ぐこと、(4) その器官の本性⁹⁷⁾を維持すること。

27: 治療はいくつのことによって完成するか?—3つのことのいずれかによって。

28: それは何か?—(1) 前に述べたあの6つの必然的基盤 (mawādd)⁹⁸⁾の矯正、(2) 薬品の使用、手技での治療。

29: 薬品での治療の使用の種類はいくつか?—2つ。

30: それは何か?—(1) 時にそれを内から使用する、(2) 時にそれを外から使用する。(1) 内からは、口、鼻孔、耳孔、肛門、膣から身体に与えられて。(2) 外からとは、温湿布 (takmīd)、罨法 (tanṭīl)、灌注 (sakb)、塗布液 (tilāʾ)、擦り込み (mash)、散布 (nashr)、軟化 (talyīn)⁹⁹⁾、硬膏 (aḍmida)、軟膏 (marāhim) などの使用。

31: 薬品はいくつの目的のために身体の内から使用されるか?—3つ。

32: それは何か?—(1) 身体の中のを排出するため、スカンモニア (saqmūniyā)¹⁰⁰⁾のように。(2) 身体から排出されるものを防ぐため、マルメロ (safarjal)¹⁰¹⁾のように。(3) 身体の気質を変化させるため、発熱時の冷水のように。

33: 薬品はいくつの目的のために身体の外から使用されるか?—4つ。

34: それは何か?—(1) 身体を減少させるため、腐食性の薬品 (akkāl) のように。(2) それを増大させるため、肉を生長させる薬品のように。(3) そこから出てくるものを防ぐため、血液を止める薬品のように。(4) その気質を変化させるため、発熱時に身体に注がれる冷水のように。

35: 医学における手技での治療の種類はいくつか?—2つ。

36: それは何か?—(1) 時にそれを肉に対して使用する、(2) 時にそれを骨に対して使用する。

37: 肉に対するその治療の使用とは例えば何か?—切開 (baṭṭ)、切除 (qaṭʿ)、焼灼 (kayy)、縫合 (khiyāta)。

38: 骨に対するその使用とは例えば何か?—脱臼の復元や骨折の整復。

39: 治療が完成して病気の回復が一般的になるのは、いくつの方式によってか?—5つの方式によって。

40: それは何か?—(1) 薬品の性質の尺度、(2) その量の尺度、(3) その使用の正しい方法、(4) その使用に適切な時の算定、(5) その正しい選定。

41: 薬品の性質の尺度は何から算出されるか?—病気の種から。すなわち、病気が熱性なら、それを治療する薬品は冷却する薬品である。冷性なら、加温する薬品によって [治療する]。他の単純および複合の性質についても、この規範に従う。つまり、病気を治す薬品の性質は病気の性質の反対となる。

42: 薬品の量の尺度は何から算出されるか?—身体の気質から、病気の量から、あるいはその組み合わせや一致によって必要なことが証明できるような他のことから。

43: 薬品の量の尺度の、身体の気質からの算出とは例えば何か?—熱の気質をもつ身体が熱性の病気に罹ったなら、その冷却は軽くすべきである。その自然な気質とは軽く離れているだけであるから。また冷の気質をもつ身体が熱性の病気に罹るなら、その最初の気質から大きく外れることになる。そのため、その自然な状態および最初の気質に戻すために、その冷却は充分すべきである。

97) ṭabīʿa は πύσις の訳語。

98) 3:04 を参照。

99) 便を通じさせること

100) σκαμμωνία / *Convulvulus scammonia* L. [Sīnā II: 593–594] [Baytār III: 23–26]

101) κυδόνια / *Cydonia oblonga* Mill. [Sīnā II: 607–8]

44：薬品の量の、病気の量からの算出とは例えば何か？——病気が強い熱性なら、冷の激しい薬品によって治療する必要がある。熱が少ないなら、冷の少ない薬品によって。

45：その組み合わせによって必要なことが証明できることとは何か、また薬品の量の尺度はそこからどのように算出されるか？——その組み合わせによって必要なことが証明できることとは、病人が住む土地、病気が生じた時点の季節、その時の大気の状態。これらのものが熱性で、病気が熱性なら、冷却を十分にすべきことを示している。またこれらが冷性で、病気が熱性なら、冷却は少しにすべきことを示している。

46：薬品の使用に適切な時はどのようなことからわかるか？——病気の段階 (waqt al-mard) から、病人の体力から、あるいはその組み合わせによって必要なことが証明できるような他のことから。

47：病気の段階から知られるそれとは例えば何か？——病気が初期のもので急性 (hādd) なら、病人に優しい処置をすべきことを示している。慢性 (muzmin) なら、荒々しい処置 [をすべきことを示している]。病気が既に絶頂に達したなら、病人に必ず優しい処置をすべきことを示している。病気が既に鎮静したなら、その患者には病気から回復中の人に対する処置をすべきことを示している。

48：病人の体力からわかるそれとは例えば何か？——病人の体力が強く、その身体の排出が必要であり、発熱があるなら、初めから恐れることなく排出させられる。また弱いなら、排出させられない。初めに穏やかな冷のものを使用し、その体力が戻ってから排出させる。

49：その一致や組み合わせによって必要ことが証明できるような他のことから把握されるそれとは例えば何か？——身体を排出させるものを使用する必要があるなら、冬には朝にはではなく正午に使用し、夏には特に夜明けに [使用する]。夏に病人に食べさせる必要があるなら、正午にはではなく特に朝に食べさせる。

50：薬品の使用の正しい方法についての知識はどのようなことから算出されるか？——病人の体力の程度から、病んだ場所自体から、あるいはその一致によって必要なことが証明できるような他のことから。

51：そのこと [薬品の使用の正しい方法] の、病人の体力の程度からの算出とは例えば何か？——病人の体力が強く、その身体の増大あるいは減少を必要とするなら、必要とする程度、意図すること [増大あるいは減少] を一回で一挙に行う。その体力が弱いなら、それを一挙には行わず、少しずつ何回か [に分けて] 行う。

52：そのことの、病んだ場所自体からの把握とは例えば何か？——その人間に腸炎 (saḥj) があり、潰瘍が上方の腸つまり小腸 (am'ā' diqāq) にあるなら、飲ませるものによって治療する。潰瘍が大腸 (am'ā' ghilāz) つまり下方の腸にあるなら、浣腸 (ḥaḥn) によって治療する。

53：その組み合わせによって必要なものが証明できるような他のことからわかるそれとは例えば何か？——その時点が夏の時期なら、冷やすことのできる現実的に冷である任意のものを使用する。その時が冬なら、それら [現実的に冷のもの] のうち和らげる任意のものを使用する。排出が必要で、その時が夏なら、上から嘔吐によって排出する。その時が冬なら、下から下剤によって排出する。

54：薬品の実体の正しい選定についての知識はどのようなものから算出されるか？——病人の体力や身体の気質から。

55：そのことの、病人の体力からの算出とは例えば何か？——病人の体力が強く、彼に食べさせる必要があるなら、豚 (khanāzīr)¹⁰²⁾ の肉のように栄養の多い食料を少しの量だけ食べさせる。病人

102) κάπρος. あるいはイノシシを指す。なお、以下の家畜の肉類に対応するギリシア語は、Dioscorides, *De Materia*

の体力が弱いなら、野菜のように栄養の少ない食料を多くの量だけ食べさせる。

56: そのことの、身体の気質からの算出されるとは例えば何か? —— 身体の気質が自然な過程から外れていないなら、気質においてその身体の気質と似た食料を病人に食べさせる。その気質から変化してしまったなら、薬効ある食料、つまりその身体の気質と反対の気質の食料を食べさせる。

57: 器官それぞれにおいて、病気の治療はいくつの方式によって完成するか? —— 4つの方式によって。

58: それは何か? —— (1) 第一は病んだ器官の気質から推し量る方式。(2) 第二はその性分 (khilqa) から推し量る方式。(3) 第三はその位置から推し量る方式。(4) 第四はその力から推し量る方式。

59: 病んだ器官の気質から推し量る方式とは例えば何か? —— 一部の器官においては、肉のように、熱が冷より優勢である。一部においては、神経のように、冷が熱より優勢である。また一部においては、皮膚のように、根本的に諸元素 ('anāsir)¹⁰³ が均等な部分から構成されているために気質が平衡である。それゆえ、これらはそれぞれ、その自然な気質が変化したら、自然な気質へ戻す必要がある。そのため、気質が変化した時にその器官を最初の自然な気質へ戻す薬品は、平衡な気質から逸れていて、病因のためにその器官の気質がよってしまった方向と反対に寄っていないなければならない。

60: 器官の性分から推し量る方式とは例えば何か? —— 病んだ器官の実質がどのような実質か、その窪みに穴があるか否かを考慮する。

61: 器官の実質がどのような実質かの考慮とは例えば何か? —— 一部の器官は、肺のように、その実質が淡く希薄である。一部は、腎臓のように、その実質が堅く密である。一部は、肝臓や脾臓のように、その実質がこれらの中間にある。第一の [淡く希薄な] 実質の器官は、強力な薬品による治療に耐えられない。第二の [堅く密な] 実質のものは、強力な薬品に耐えられ、それによって損傷されない。第三の [その中間の] 実質のものは、強力な薬品に耐えられるか否かに関して中間の状態にある。

62: 器官の窪みに穴があるか否かの考慮とは例えば何か? —— 一部の器官は、胃や、両手や両足にある脈打つ血管と脈打たない血管のように、内側にのみ穴がある。あるいは腹膜 (ṣifāq)¹⁰⁴ 内の神経のように、外側にのみ [穴がある]。あるいは肺のように内側にも外側にも [穴がある]。というのも、肺は外側からは胸の空間 (faḍā' al-ṣadr)¹⁰⁵ に囲まれ、内側には気管や脈打つ血管の分岐が拡がり分かれている。また一部の器官は、両手や両足にある神経のように、平坦で根本的に穴が無い。そのため、器官を乾かしそこに集まった余剰物を消し去る必要があるときにそれぞれについてその方法を証明できるようなものは、それを証明できるようなそれ以外のものとは異なると考えられることになる¹⁰⁶。すなわち、内側にも外側にも穴がある器官には、非常に強い薬品を必要とするような集まった余剰物が流れ注がれる。両方に穴がある器官が、実質が密で堅いなら、中間の等級の力をもつ薬品を必要とする。実質が淡く希薄なら、弱い薬品で充分である。片方にのみ穴がある器官は、これら [両側に穴がある] 器官が必要とする薬品より強い薬品を必要とする。なぜなら、こ

Medica, 第2巻 [Dioscorides II] とイブンバイタルの各項の比較、および Galenus, *De Alimentis Facultatibus* [Galen VI: 453-748] とイブン・バイタルの肉 (lahm) の項 [Baytār IV: 374-77] の比較から推定したものである。[Baytār II: 354]

103) arkān と同義。

104) = ὤμην.

105) 胸腔のこと。

106) つまり、器官の穴のあり方によって、証明の仕方が異なるということ。

れらは穴の無い平坦な器官が必要とするものより力が低いもので充分であるから。

63: 器官の位置から推し量る方式とは例えば何か? ——その位置が2つのこと、ひとつは器官がある位置、もうひとつは器官とそれに繋がり接合する器官との接合を示すとき、それぞれの器官の治療はこれらの点のそれぞれ単独から、あるいはこれら両方から証明される。

64: それらの点のそれぞれ片方、あるいは両方からの証明は何に役立つか? ——病人だ器官の位置から推し量る証明は、気質の悪化から生じる病気の治療で必要とされ、役立つ。器官とそれに接して繋がる器官との接合から推し量る証明は、実体の排出に役立ち、必要とされる。それら両方からの証明は、実体の排出、吸引、除去に [役立つ]。

65: 気質の悪化の治療で必要とされるものの、器官の位置からの証明とは例えば何か? ——器官の位置が薬品が届くほどに近く、薬品の力がその状態に留まるなら、その力がその器官の疾患を治療するに足るような薬品によってのみ治療する。器官の位置が薬品が達しないほどに遠い、あるいは薬品の力がその状態に留まれないなら、投入する途中でその力が減少して落ちたことを知る分だけ薬品の力を増大させ、そこに届くようにする。

66: それは例えば何か? ——食道や胃の治療を意図するとき、その病を治療するに足る力をもつ薬品によって治療する、薬品がこれらのそれぞれに、その間に隔てる他の器官を通過することなく届くならば。肺の治療を意図するなら、それを治療するための薬品はより強くより激しいものにする。肺へ到達するまで薬品が通過し、その力が投入される多くの器官のために。

67: 肺を治療するための薬品の力はどのような器官に投入されて浸透するか? ——外から肺を治療するための薬品の場合、その力は必然的に、胸の筋肉、肋骨 (adlā') の骨そのもの、肋骨を裏打ちする膜、筋膜のような肺を覆う膜に投入されて浸透する。そして肺の実質へ届き、その実質そのものに沈む。内から治療するための薬品の場合、[その力は] 必然的に、口を通り、食道、胃、門脈 (bawwāb)¹⁰⁷⁾ を通過する。これは胃から腸へ、空腸 (sā'im)¹⁰⁸⁾ として知られる腸によって浸透するもので、肝臓と腸の間に作られた檻 (marbid)¹⁰⁹⁾ として知られる血管、肝臓の凹面にある血管、その凸面にある血管に入っていく。そして中空 (ajwaf)¹¹⁰⁾ と名付けられた大血管へ、そして心臓へ浸透し、そこから肺へ到達する。肺を治療するための薬品の事情が記述した通りなら、外から肺を治療するためのものについて、述べられたような器官へ浸透する際にその力が弱くなることも起こり得る。また内から治療するためのものについて、口と肺の間にある器官を通過する際に [その力が] 弱くなるとか、通らねばならない器官に存在してそれ [薬品] に混ざる他の実体のために、その力が壊れることが起こり得る。

68: 器官とそれに繋がり接合する器官との接合による証明とは例えば何か? ——肝臓の実体の排出を意図したとき、その実体が肝臓の凹面にあるなら、下剤によって排出する。なぜなら、肝臓の凹面は特に腸と接合しているから。その実体が凸面にあるなら、利尿剤によって排出する。なぜなら、肝臓のアーチは特に腎臓と接合しているから。

69: 器官の位置およびその他の器官との接合による、実体の排出、吸引、除去の証明とは例えば何か? ——器官に実体が既に注いでいるとき、まだその実体が注いでいるなら、その器官から遠くにあり、方向が反対で、いくつかの場合で接合し、道で平行するような場所から、それを吸引すべき

107) = πύλη. Vena portae のこと。

108) = νήστις.

109) 中腸 (μεσεντέριον) のこと。もともとは腹部 (の奥) を指していた言葉である [Lane I: 1012c]。マジューシーによれば、marābid は jadāwil のこと [Koning 1903: 202-3]。

110) κοίλη φλέψ の訳語。

ことが知れる。その実体が既に止まり、その注入路が途切れているなら、それが発生した場所自体から、それを吸引し除去すべきことが知れる。

70: 実体の、遠く反対の場所からの吸引とは例えば何か? ——その器官が身体の上部にあるなら、身体の下部から排出する。その下部にあるなら、上部から [排出] する。

71: 実体の、それが中にある器官に接合する場所からの吸引とは例えば何か? ——実体が子宮に寄っていて、そこに集まって注いでいるなら、乳房の方向に吸引する。鎖骨より上にある器官のいずれかに寄っていて注いでいるなら、橈側皮静脈 ('irq qīfāl)¹¹¹⁾ の瀉血 (faṣd) によって排出する。鎖骨より下にある器官のいずれかに注いでいて寄っているなら、尺側皮静脈 ('irq bāsālīq)¹¹²⁾ の瀉血によって排出する。

72: 実体の、それが中にある器官と、道が平行する場所からの吸引とは例えば何か? ——疾患が身体の右側にあるなら、それを引き起こす実体は右手あるいは右足から排出する。同様に、疾患が身体の左側にあるなら、それを引き起こす実体は左側から排出する。

73: 止まっていてその注入路が途切れている実体の、それが発生したところからの吸引と除去とは例えば何か? ——その器官に発生した実体に長い時間が経過しておらず、まだ滞留が長引いていないなら、それが発生した器官に近くてそれに接合する場所から吸引する。実体が子宮に発生したときに行うように。というのも、そのときには腿の内側に置く吸玉によって、あるいは伏在静脈 ('irq ṣāfin)¹¹³⁾ の瀉血によって吸引する。その実体が器官に発生してから長い時間が経過したなら、それが発生した器官自体から抽出して除去する。咽頭炎 (dhubḥa)¹¹⁴⁾ の際、舌の下にある血管を瀉血して行うように。

74: 治療の、器官の力から推し量る証明はいくつの形式によるか? ——3つの形式による。

75: それは何か? —— (1) 第一はその器官が他の諸器官へ達する力の起源で根源である場合。脳、心臓、肝臓のように。(2) 第二はその器官が身体全体を利するような共通な機能を為す場合。胃や横隔膜 (ḥijāb)¹¹⁵⁾ のように。(3) 第三はその器官に感覚が多く敏感である場合。目のように。

76: 器官の力から、その器官が他の諸器官へ流れる力の起源で根源である場合に、またそれが共通で包括的で全ての器官を利するような機能を為す場合に、推し量る証明とは例えば何か? ——その器官が、他の諸器官が必要とする力の起源、根源、脈である、あるいはその利益がそれら全てに共通する、そしてそこかその他にある病因のためにそこに薬品をもたらす必要があるなら、そこにもたらず [薬品] がその [器官の] 力を一挙に消散させるものであったり、それを激しく冷やすものであったり [しないよう] 注意し避けるべきこと、あるいはまた適切でない性質の薬品を投与 [しないよう] 注意すべきことが知れる。また他の諸器官へ流れる力の起源でなく、それに利される器官の全てを包括するような機能を為さないなら、必要とされる薬品によって治療する。

77: 一挙に器官の力が消散することへの注意や警戒とは例えば何か? ——消散性の硬膏によって肝臓や胃を治療する必要があるなら、消散性の薬品を収斂的で香りの良い他の薬品と混ぜる。これによって、これら器官の力を留めてその通りに維持することを意図している。

78: 器官を激しく冷やすことへの配慮や用心とは例えば何か? ——ある人間の胃または肝臓が本性において弱いとき、発熱のときに激しく冷たい冷水を飲んで [しまわないよう] 注意して防ぐ。そ

111) = φλέψ κεφαλική. Vena cephalica のこと。

112) = φλέψ βασιλική. Vena basilica のこと。

113) Vena saphena のこと。対応するギリシア語は見つかっていない。[Koning 1903: 795-96] を参照。

114) κυνάγχη の訳語。

115) 1:30 の注を参照。

の発熱が、その患者が極端に冷たい冷水を飲む必要があるような非常に強い燃焼する発熱であるとしても。

79: 適切でない性質の薬品の投与を避けることは例えば何か? ——下剤による身体の洗浄を必要とするとき、その弱い胃または肝臓にスカンモニア¹¹⁶⁾ やトウダイグサ (shabram)¹¹⁷⁾ を飲ま [ないように] 注意する。あるいは飲ませる下剤をその性質を矯正するものと混ぜる。[このようにするのは、] 胃の力または肝臓の力が消散しないように。

80: 器官の感覚の敏感さからの証明とは例えば何か? ——その器官が感覚しない、あるいは感覚の少ない器官なら、一挙に治療するための薬品を必要な量だけ与えることができる。その薬品が、力と刺激が極端に激しいとしても。なぜなら、このような器官では、薬品の力の激しさとその刺激から被る損傷によってその力が消散する恐れが無いから。その器官が感覚の多い器官であるときは、激しい力と刺激をもつ薬品から被る損傷によってその力が消散するのを免れない。そのため、刺激が強い薬品を多くの量与えたり、一挙に与えたりすべきではない。しかるに、それに与えるものは長い期間に分けてかなり警戒し配慮して行う。

81: これらの器官のそれぞれ、特にそれ自体が病んだときの治療で辿る 4つの方式から推し量る証明はいくつか、また簡潔な言葉で記述すればそれは何か? ——その状況から記述されることの、それらの証明は5つ。(1) 第一は器官の気質から推し量る証明で、これによってその器官を治すための薬品の量の尺度が証明できる。(2) 第二は器官の機能の範囲から推し量る証明で、これによって薬品の量の制限が証明できる。横隔膜の疾患で為されるように。あるいは、そこから身体全体へ力が流れる鉞脈であることから [推し量る証明]。心臓の疾患で為されるように。(3) 第三は器官の性分から推し量る証明で、これによって器官に発生して保持されているものの排出の方法が証明できる。(4) 第四は器官の位置や、それと他の器官との接合から推し量る証明で、これによって薬品を強めるか弱めるか、またその使用方法が証明できる。(5) 第五は器官の感覚の量および繊細さから推し量る証明で、これによって薬品の力のあるべき程度、また器官にそれらを与えるべき回数が証明される。

82: 治療の際に考慮される目的や意図はいくつか? ——10。

83: それは何か? —— (1) 第一は病気の種が示すことによって意図される目的。(2) 第二は病気の原因から推し量るそれ。(3) 第三は病気の強さから推し量るそれ。(4) 第四は自然な過程から外れるようにして生じた身体の気質から推し量るそれ。(5) 第五は自然な気質から推し量るそれ。(6) 第六は病人の年齢から推し量るそれ。(7) 第七はその習慣から推し量るそれ。(8) 第八はその時点の季節から推し量るそれ。(9) 第九は病人の住む土地から推し量るそれ。(10) 第十はその病気の時の大気の状態から推し量るそれ。

[第6章] —— [単独薬品および複合薬品について]¹¹⁸⁾

01: あるものが熱であると言われるのはいくつの形式によるか? —— [2つの形式による。] (1)

116) 「これは胃と肝臓に対して非常に害を為す。その激しさは調節によって、またはセリの種かアニスの種によってなくすることができる。悩みを引き起こし化膿させるもの。食べ物への欲を無くし、渴きを引き起こす。[Sīnā II: 594]」

117) *πυρούσα* / *Euphorbia ptyusa* L. 「これは胃と肝臓に害を為す。[Sīnā II: 679]」 [Sīnā II: 678–79] [Bayṭār III: 67–69]

118) ラテン語訳に相当する箇所は無い。

現実的に (bi-l-fi‘l)¹¹⁹⁾、(2) あるいは可能的に (bi-l-qūwa)¹²⁰⁾。(1) 現実的にとは、火のようなもの。(2) 可能的にとは、ピレトリウム (‘āqarqarhā)¹²¹⁾ やコショウなど。

02: 可能的なものとは何か、またあるものが可能的と言われるのはいくつの形式によるか? ——あるものが存在するが、後に形容されるような状態にはまだなっておらず、[そのような状態] なることが可能な場合。これは2つの方法で脱却される。すなわち、それは (1) 変化あるいは (2) 発展によって可能態を脱して現実態になる。(1) 変化とは、その種のものがかつてあったような [状態に] 留まる場合。白いものが赤くなる時のように。(2) 発展とは、変容し変換される場合。パンが血液になるように。というのも、それ以前にはそれは可能的に血液であったが、変換され変容したとき現実的に血液になり、それがかつてパンであったような [状態に] 留まっていない。

03: あるものが身体を温めると言われるのはいくつの形式によるか? ——2つの形式による。

04: それは何か? ——すなわち、それが身体を温めるのは、(1) その熱の性質を増大させ増進させることによって、(2) あるいはその実質を増大させることによって。(1) その身体の加温が熱の性質の増大によるなら、それは加温性の薬品 (dawā’ musakhkhin) と呼ばれる。加温性の薬品による加温は、現実的であるか、可能的である。現実的な場合は火のようなもの。可能的な場合は実体としてではなく、[その] 種のもんとして。ここでいう種とは、極端に [加温] し易いもの、し易くないもの、かなりし易くないもの。極端に [加温] し易い種とは、毒蛇の毒のようなもの。し易くない種とは、カンタリス (dharārīh)¹²²⁾ など。これらは両方とも身体を悪化させる。かなりし易くない種とは、ピレトリウムやユーフォルビウム (farbiyūn)¹²³⁾ など。これら3つのうち最初の2種は、致命的なもの (ashyā’ qattāla) の類に入る。(2) その実質を増大させることによって身体を温めるものもまた現実的にか、可能的にかである。現実的な場合は、身体の肥えた幼児と [他の] 人間を縛りつけて、その胃とその胃が合わさるように。可能的な場合は、身体に与えられる食料のようなもの。

05: 身体に与えられる全てのものの作用はいくつの形式によるか? ——3つの形式による。なぜなら、身体に与えられるものには (1) 身体が [そのものより] 極端に勝るもの、(2) [そのものが] 身体より極端に勝るもの、(3) 最初は身体に勝るが最後は身体が勝るようなものがある。(1) 身体が極端に勝るものは食料 (ghadhā’) と呼ばれる。(2) 身体より極端に勝るものは薬品 (dawā’) と呼ばれる。(3) 最初は身体に勝るが最後は身体が勝るようなものは薬効ある食料 (ghadhā’ dawā’i) と呼ばれる。

06: 薬品の類はいくつか¹²⁴⁾? ——4つ。

07: それは何か? ——すなわち、(1) 身体に変質させられることなく身体を変質させるもの。この類は致命的な薬品の類。これらの薬品は、毒蛇の毒のように熱によって、あるいはオピウム (afyūn) のように冷によって死なせる¹²⁵⁾。(2) 身体に変質させられるが、反対に身体を変質させ悪化させ

119) =ἐνέργεια. 現実態として。

120) =δύναμις. 可能態として。

121) πύρεθος / *Anacyclus pyrethrum* (L.) Link. [Sīnā II: 611–12] [Baytār III: 157–58]

122) καθαριίδες. ツチハンミョウをいぶして、乾燥させたもの。[Sīnā II: 720] [Baytār II: 413–15]

123) εὐφόρβιον / *Euphorbia resinifera* Berg. 用いられるのは、同じ名前と呼ばれるその樹脂。[Sīnā II: 628–29] [Baytār III: 216–18]

124) 6:06 以下が英訳 [Ghalioungui 1980] では第6章となっているが、Bar-Hebraeus, *Tahrīr* の区分に従った。

125) 「別の点では感覚を麻痺させることは冷却により、刺すものが [為す] 変成や消散は希薄化や乾燥による [と我々は考える]。そのようなものから薬品が調合される。オピウム、バラの木、オオバコの液汁は冷却する [類] のものである。[Galen XIII: 155]」

るもの。この類の変質は、ドクニンジン (shawkarān)¹²⁶⁾ で起こるように細かくし和らげることによるか、あるいはカンタリスで起こるように腐敗させることによる。この類もまた身体を悪化させるものである。(3) 身体に変質させられるが、反対に身体を変質させて激しく温めるもの。ピレトリウムや海狸香 (jund bīdastar)¹²⁷⁾ のように。(4) 最初は身体を変質させるが、その後で身体に変質させられるもの。それは変質させられるとき、身体の熱の実質を増大させる。タマネギやニンニクのように熱が余剰な熱性のものであっても、レタス (khass)¹²⁸⁾ やオオムギ (sha'īr)¹²⁹⁾ の煎じ液のように冷が余剰な冷性のものであっても。

08: 薬品の類はどうして4つになるのか? —なぜなら、身体に与えられるものは、その力が身体のと同等なら、身体がそれに作用し、そして反対にそれが身体に働きかけるのであり、絶対的に薬品と呼ばれる。それが身体より強いと、身体がそれに作用できず変質できないが、[反対に]それが身体を変質させるようなら、それは必ず悪化させる致死的なもの。身体がそれより強いと、それを変質させ変容させることができ、それをその[身体の]実質に同化させられるようなら、それは食料と呼ばれる。何らかの変質によって影響されながら、食料も身体の器官に影響することもあるが。これら影響と変質は、時に感覚に明らかであり、時に最初は明らかでないが長い期間の後で明らかになる。身体に明らかに影響するような食料は、レタスやニンニクのように、薬効ある食料と呼ばれる。というも、これらは消化される前に身体に影響する。つまり、レタスは冷やす、そのため眠くなり¹³⁰⁾、ニンニクは温める、そのため喉が渇く。そして、これらは時間を経た後で身体の実質の量のみを増大させ、その性質は変化させない。

09: 可能的に身体を温めるあるいは冷やす薬品は、一部はタマネギやニンニクのように身体に外側から与えられるとそれを害するが内側から与えられると害さないものになり、一部は鉛白 (isfidaj)¹³¹⁾ のように内からは害するが外からは害さないものになるのはどうしてか? —その一部は、利するあるいは害するのが、外からあるいは内からとなる。最初の種類、つまりタマネギやニンニクなどは外から身体の外側に接触すると潰瘍を作るが、内側に与えられても潰瘍を作らない。これは6つの原因による。(1) 第一はそれが胃と肝臓で変質すること。(2) 第二は薬品が身体にある体液と内部で混ざり、そのきつさを失うこと。(3) 第三はこのような薬品が、他の食べ物と共に身体に与えられること。(4) 第四はそれと与えられると身体と同じ場所に停滞せず、場所から場所へ移動していくこと。(5) 第五はそれが体内で分離すると、そのうち利益の優れたものは栄養になるが、栄養に相応しくないものは滓と共に排出され出ていくこと。(6) 第六は人間がこのようなものを摂取するのはそれに害されないためにも必要な量だけ、適切な時にであるから、これを逸脱するなら害されてしまうこと。[一方]鉛白やそれに続くような他のものは、身体の内側へ与えられると害するが、外側に与えられると害さない。なぜなら、[このようなものは]実質が濃厚であるから。これは、実質が希薄な薬品は身体の奥深くへ速やかに沈んで達するが、実質が濃厚なものは長い時間をかけなければ達しないからである。身体の外側からも内側からも利するあるいは害するものには、毒蛇の毒や狂犬の唾液のように実質が希薄なものがある。これらは両側から害する。またマス

126) κόνειον / *Conium maculatum* L. [Sīnā II: 674–75] [Baytār III: 94–95]

127) καστόριον. [Sīnā II: 417–18] [Baytār I: 234–36]

128) θρίδαξ / *Lactuca sativa* L. [Sīnā II: 707–8] [Baytār II: 326–28]

129) κριθή / *Hordeum* L. [Sīnā II: 682] [Baytār III: 83–84]

130) 冷却と睡眠の関連については、Aristoteles, *De Somno et Vigilia*, 第3章、および *De Partibus Animalium* 第2巻7章 653a10–20 を参照。

131) ψμίθιον. 「これは鉛の灰である。[Sīnā II: 369] [Sīnā II: 369–70] [Baytār I: 42–43]

チック (maṣṭīkī)¹³²⁾ やカンショウ (sunbul al-ṭīb)¹³³⁾ のようなものがある。これらは両側から利する。

10: ブドウ酒 (khamr)¹³⁴⁾ は身体の内側に与えられるとそれを温めるが、外側から接触しても温めないのはどうしてか? ——ブドウ酒が身体の内側に与えられたときにそれを温めるのは、身体に変質されられて同化されると、その栄養になるからである。外から身体に接触したときにそれを温めないのは、内在熱がそれに接触し、それを変質して身体に同化する前には、身体がそれを変質させられないからである。またブドウ酒は身体の内側に与えられたときいつも温めるわけではない。そのように作用するのは、人間がそれを適度な量だけ摂取したときのみ。この場合、それは食べ物のように [作用する]。[摂取する] 食べ物の量が適量なら、自然な熱を増進させ、その実質を増大させる。それが過剰なら、熱を窒息させ消してしまう。この状態では、多くの薪が小さな火の上に置かれたようになる。したがって同様に、ブドウ酒を適度な量だけ飲めば、それは栄養になることによって [身体を] 温めるが、過剰に飲むなら、身体を冷やしてしまう。

11: 致死的な薬品を人間が何度も摂取したのに、死に至らないことがあるのはどうしてか? ——その原因は、その量が少ないことであり、これは驚くことではない。小さな部分の火では温められず、まして燃焼させられない。同様にまた、小さな雪の部分では冷やすことはできない。それでも、小さな部分のそれが燃焼できないとしても、火 [そのもの] が燃焼できないとは言えることにはならない。しかるに、致死的な薬品の作用について判断すると、その身体へ対抗性によって死なせるのであって、その量によってではない。

12: オビウムが現実的に熱くなるまで火によって温められ、そして身体に与えられたとき、それを冷やすのはどうしてか¹³⁵⁾? ——その理由は、熱性のもはその熱が本性的か、偶然性かである。同様に、熱性のもはその熱が本性的か、偶然性かである¹³⁶⁾。冷性のもも同様である。あらゆるものについて、本性的な力は偶然的な力より強く優勢である。本性的な力というものは停滞するが、偶然的な力というものは変容し変化してしまう。これにより、本性的に温めるまたは冷やすものと、偶然的にそのように作用するものとは区別できる。

13: 単独薬品の力を試す原理 (qawānīn)、つまり規定 (dustūrāt) や条件 (ṭarq) はいくつか、またそれは何か? ——その力を確認できるよう、単独薬品はそれぞれ8つの条件に基づいて試される。(1) 第一はその薬品に偶然的に帯びるような性質が一切無いこと。(2) 第二は薬品が試される疾患が純粋で単純な疾患あり、複合のものでないこと。(3) 第三はそれによって反対の疾患が治療されること。(4) 第四はその薬品の力が治療しようとする疾患の力と同等で、その作用が治癒として明らかになること。(5) 第五はその薬品の働きについて、それが摂取される時の働きが加温か冷却か調べる。というのも、ある期間の後では温めるが、最初は冷やすようなら、その加温は偶然的なものである。同様にまた、ある期間の後では冷やすが、最初は温めるようなら、その冷却は偶然的なものである。(6) 第六はその働きについて、それがあらゆる身体、あらゆる時において同じ働きであり、その冷却と加温が恒常的なことか調べる。というのも、もしその通りなら、その作用は本性的なものであるが、もしその通りでないなら、その作用は偶然的なものである。(7) 第七は薬品の試験はその加温や冷却に関連するようなものについてであって、その他についてではない

132) σῆβοϋς / *Pistacia lentiscus* L. [Sīnā II: 553-54] [Baytār IV: 448-50]

133) νόρδοϋϋ / *Nardostachys jatamansi* DC. sunbul al-ṭīb はその1種でインド産のもの。[Sīnā II: 602-3] [Baytār III: 48-51]

134) οἶβοϋϋ. [Sīnā II: 685-86, 719] [Baytār II: 341-49]

135) 「ドクニンジンやオビウムで香りつけたものを熱くしてから身体に伴うと、身体に無感覚が生じるほどの冷却を為す。もしかして最も感覚があったとしても。[Galen XIII: 365]」

136) 重複である。

こと。というのも、薬品の加温は人間の身体にのみ関連しているなら、それが熱であると言われるのはそれが人間の身体を温めるからであって、他の諸動物や他の諸物体にそのように作用するからではない。しかるに、ドクニンジン¹³⁷⁾が人間の身体を冷やすからといって、またムクドリ (zarāzīr) の身体も冷やすとは限らないし、バイケイソウ (kharbaq) がウズラ (summān) の栄養になるからといって¹³⁸⁾、人間の栄養になるとは限らない。(8) 第八は、薬品はその性質によって身体を温めたり冷やしたりするが、食料は身体の実質を増大させ増進させることによってそのように作用することを、[試験を] 行う者が知ってから、食料と薬品を区別すること。

14: 薬品の力を確認しようとする者が用いるそれらの条件の他に、先に述べたあの原理や規定の他に、薬品の力についての知識が算出できるような方式は他にあるか?—確かに、他に多くの方式がある。これらは、用いる者にとって支えとなり、その知識を豊富にしてその根拠を強めるところを整頓してくれる。つまり5つの方式。(1) 第一はそのものの変容の容易さ、あるいは困難さから推し量る方式。(2) 第二はそのものの硬化の容易さ、あるいは困難さから推し量る方式。(3) 第三はそのものの味から推し量る方式。(4) 第四はそのものの匂い¹³⁹⁾から推し量る方式。(5) 第五はそのものの色から推し量る方式。

15: その変容の容易さと困難さから、薬品の力はどのように確認されるか?—火の本性へと変容し易いような薬品は全て可能的に熱であるが、このような薬品が必然的に人間の身体を温めるといふわけではない。それが必然的にそうなるのは、実質が希薄で、緻密で固く隙間が無いときのみ。それが実質が濃厚、あるいは物体が希薄なら、それを火へと変容させ、容易にその本性へと変換することができる。人間の身体は熱はそれ [薬品] に対し [火へと変容させるように] そのように作用しない。そのため、それは身体を温めない [こともある]。

16: 2つの熱、つまり火の熱と身体熱の両方が同等に作用するものは、実質が希薄で物体が密なものではないこと、また実質が濃厚で物体が希薄なようなものは、火の熱が容易にそれより強くなって勝るが、身体熱は容易にそれに勝って征服することがないことはどこから知られるか?—それは2つのことから知られる。(1) ひとつは油、(2) もうひとつは乾いたアシヤ髪。油は火に近づけられると容易に着火するが、身体に当たるときには容易に温めたりせず、明らかに温めたりしないことから、それを示す。(2) 乾いたアシヤ髪は火に当てられると容易に燃焼するが、人間の身体に与えられても温めたりしない。

17: 油、その本性は火に当てられるとそれ [火] を掴んで着火するものであるが、それが身体に当たった時にはそれを温めないのはどうしてか?—それはなぜなら、油は粘ついて実質が濃厚であり、身体に当たったときには、その粘着性とその実質の濃厚さのために、最初に当たった身体の部分に固着し付着してしまい、長い期間の後でなければ離したり分断したりするのが困難になる。そのため、油に浸した全ての物体に、それが長く滞留することになる。その原因は、それが空気中で容易に細かくなったり希薄になったり分解したりしないこと。身体に当たる水が空気に分解されるように [はならない]。[その原因は] また身体の内側へ浸透し達しないこと。この証拠は、同じ容器に水と油を注いで加熱すると、水が油より先に消えるのがわかること。

137) 6:07 の注を参照。

138) ここでは、kharbaq abyad / ἑλλέβορος λευκός / *Veratrum album* L. を指す。「バイケイソウはウズラの食料であるが、悪いことに人間を死なせてしまう。[Galen XIV:227]」「イブン・シーナー曰く。これを飲むことは時として痙攣を引き起こし、これを過剰に [摂取することは] 人間を死なせる。これは犬や豚にとって毒である。これを飲んだものの糞はニワトリを死なせる。ウズラはこれを餌とし、これを食べる。[Baytār II: 321]」[Sīnā II: 705–7] [Baytār II: 320–23]

139) おいを意味する単語であるが、rā'īha を「匂い」、natn を「臭い」と訳す。

18: 乾いたアシや髪の毛はどれも容易に燃焼するが、人間の身体を温めないのはどうしてか? — それは2つの原因による。ひとつは (1) 熱の実質、もうひとつは (2) 実体の本性。すなわち、(1) 火は全ての物体で最も希薄で最も熱いので、燃焼するような物体に沈み、その内側および深部へ最も簡単に進み、最も容易に浸透して達することになる。そして、その [物体の] 部分は分断されて希薄になり、その [火の] 本性へと [近づく]。人間の身体は、濃厚で蒸気状であって弱いのので、それが当たるものに対して、その本性へと変容し変換するような働きをすることはできない。身体を温めるものは全て、まず身体がそれに働きかけて変化させる必要がある。そしてその後反対に、それが身体を温めるのである。これが、熱の実質からの原因である。(2) 実体の本性からの原因は、これら [乾いたアシや髪の毛] の両方が分割されることがなく、挽いたり粉碎されたりすることによってその部分が分断され、埃ほどになつたりしないこと。というのも、身体を温めるための薬品は全て、極小の部分に分割され、身体が熱の働き、その影響、その変化を受け入れ易くなる必要がある。そのため、ショウブ (qasb al-dharīra)¹⁴⁰⁾ は我々のもとにあるその他の種のアシ (qasb)¹⁴¹⁾ より人間の身体をよく温める。火への変容の容易さと困難さから、薬品の力を証明する方式は、既に明らかになり明白になった。今は、硬化の容易さや困難さからそれを証明する方式を明白にし説明するべきである。これらの方式は両方とも薬品の力の検査において必要であるが、前者は可能的に熱の薬品を考慮する際に、後者は可能的に冷の薬品を考慮する際に必要とされる。この後者によれば、2つのものが実質の濃厚さと希薄さにおいて同じ状況にあるなら、それらのうち冷による硬化をより受け入れ易いものは、気質においてより冷のもの。また2つのものが実質の希薄さと濃厚さにおいて同じ状況にない場合、その片方における実質の濃厚さが他方の気質の冷に比例するなら、それらは両方とも同じように硬化する。しかし、その片方つまり実質がより濃厚なものはその濃厚な実質の固さのためにより硬化が激しいと、それを扱う者は想定する。その片方の気質の冷が他方の実質の濃厚さより激しく、この反対となるなら、それらの硬化が同じ時間で起こることはない。それらのうち気質においてより冷のもの、あるいは実質においてより濃厚なものは、より短い期間で硬化するはずである。また冷がより少ないもの、あるいは濃厚さがより少ないものの硬化はより長い期間がかかるはずである。それらのうち片方が他方よりかなり固い、あるいは少し固いについても同様になる。というのも、2つの点のいずれかにおける過剰の程度に応じて、必然的にそのことは起こる。単独薬品の力の検査の範疇に入る方式のうち2つの解釈についての話は既にあり、またそれらの簡明な説明によって既に明白にした。今はまた、薬品の力の、その力からの確認へ導く第三の方式を明白にすべきである。その事情はどのようなものか、言ってみれば、あらゆる物体は4元素の複合から成り、物体の複合において元素の量は等しくないのだから、その複合における元素の量の相違のために物体には多くの特性ができる。また味にも、この量の相違のために多くの特性ができる。味 (ta‘m)、つまり風味 (madhāq) は多いので、そのうち身体に適切なものと適切でないものを区別するための道具が必要となる。この道具とは舌である。そして舌に感覚が多くなるために、そこへ繋がる神経は数が多くなっている。すなわち、そこへ6つの神経が繋がっていて、その感覚の余剰のために、そこに当たる熱、冷、湿、乾を区別し、また身体に適切なものと適切でないものを区別する。身体の本性に適切なものは多様なものだから、一部は人間の本性にとってかなり適切であるが、一部は少しだけ [適切である]。同様に、人間の身体と調和しない

140) κάλαμος ἀρωματικός / *Acorus calamus* L. [Sīnā II: 644–45] [Baytār IV: 268–69]

141) κάλαμος と呼ばれるもの。qasb の名の付くものでは、イブン・バイタールはアシ (qasb)、ショウブ (qasb al-dharīra)、サトウキビ (qasb al-sukkar: *Saccharum officinarum* L.) を挙げている。[Baytār IV: 268–69]

ものは、一部はかなり調和しないが、一部は少しだけ [調和しない]。[そういうわけだから、] ものの味かわれる性質、つまりそれらの味は必然的に多くなるはずである。

19: 味覚が知覚する性質の数はいくつか、またそれは何か?——複合のもの [の数に] は限りがない。なぜなら、それらは複合において増大と減少から生じるから¹⁴²⁾。単独で純粋なものは8つ、つまりえぐみ (‘ufūša)、苦味 (marāra)、辛味 (ḥarāfa)、酸味 (ḥumūḍa)、渋味 (qabḍ)、塩味 (mulūḥa)、脂っこさ (dusūma)、甘味 (ḥalāwa)¹⁴³⁾。

20: それら8つの風味は何から生まれるか?——味かわれる物体の実質の、希薄さと濃厚さにおける相違から、またその気質の相違から¹⁴⁴⁾。

21: 味かわれるものの実質の、希薄さと濃厚さにおける相違から、それらはどのように生まれるか?——その実質が濃厚な実質なら、それはその実質の濃厚さのために、甘い、えぐい、苦いである。その実質が希薄な実質なら、それはその実質の希薄さのために、辛い、酸っぱい、脂っこいである。その実質が濃厚と希薄の間にある実質なら、それはその実質が希薄と濃厚の間にあるために、渋い、塩っぱいである。

22: 味かわれる物体の気質の相違から、それらはどのように生まれるか?——その気質が熱なら、その味は苦い、辛い、塩っぱいである。その気質が冷なら、その味はえぐい、酸っぱい、渋いである。その気質が熱と冷の間にあるなら、その味は甘い、脂っこいである。というのも、実質の希薄さと濃厚さの種類は、物体の気質の熱と冷の種類と対応しあうのである。

23: それらからいくつの種の複合が生じるか?——それらの種類が複合されると、9種の複合が生じる。1つは味の無い物体の種、つまり2つの中間、部分が希薄なものとの濃厚なものとの中間と、気質が熱のものとの冷のものとの中間の両方が共にもつ種。他の8つは、味がある物体の種である。

24: 味が無いものの種類はいくつか、それは例えばどのようなものか、またそれはどのように言われるか?——味が無いものは、味が欠損したものと呼ばれ、純粋な水のようなもの。このようなものの種類は2つ。すなわち、(1) 乾いたもの (mā huwa yābis)、(2) 粘ついたもの。(1) 乾いた種類は、身体の毛穴に入り込んで塞いでしまう [もの]、と形容される。(2) 粘着性の種類は、味が無い [もの]、と形容される。2種類のうち乾いたものの例は、デンプン糊 (nashā)¹⁴⁵⁾、亜鉛華 (tūtiyā)¹⁴⁶⁾、鉛白 (isfīdāj al-rašāš)、カラミン (qalīmīyā)¹⁴⁷⁾、生石灰 (nūra)¹⁴⁸⁾。これらはそれぞれ、しっかりと洗われた場合である。粘ついた種類の例は、甘口の油、卵の白身、新鮮なチーズ、豚の脂肪、洗った甘口の蜜蝋 (mūm) つまり精製された蝋 (sham‘)¹⁴⁹⁾。

25: 味かわれる味がある8つの種はどのように複合されるか?——それら4つのもの、つまり実質の濃厚さと希薄さ、物体の気質の熱と冷がその複合に関わるのだから、濃厚な実質と、気質の熱か冷かそれらの中間との複合から、3種の複合ができる。また [同様に、] 希薄な実質と2種類の気

142) 複合の味は、それを複合する味それぞれの増減次第で様々になる。

143) それぞれ、αῖστηρός, πικρός, δριμύς, ὀξύς, στρυφνός, ἄλυρός, λιπαρός, γλυκός に対応する。Aristoteles, *De Sensu et Sensibilibus*, 第4章 442a17–21 を参照。

144) 味の仕組みについては、Aristoteles, *De Anima*, 第2巻10章、*De Sensu et Sensibilibus*, 第4章を参照。

145) ἄμυλον。穀物を数日間水に浸して、軟らかくして潰してから乾かしたもの。主にコムギから抽出されたものを指す。[Sīnā II: 579] [Baytār IV: 478–79]

146) πομφόλυξ。[Sīnā II: 688] [Baytār I: 196–99]

147) καόμεια。少量の酸化鉄を含む酸化亜鉛。ここで指すのは、鉱石を炉で熱する際に鉄の棒を差し込み、鉱石からの発散物を棒に付着させて集めたものことだと思われる。銅、金、銀、鉄鉱から採られた。[Sīnā: 650–51] [Baytār IV: 279–81]

148) ἄσβεστος。kils, jir と同じ。[Sīnā II: 580] [Baytār IV: 340]

149) κηρός。[Sīnā: 562] [Baytār III: 90–92]

質との複合から、別の3種ができる。また2つの実質の中間と2つの気質のそれぞれとの複合から、2種ができる。

26: 濃厚な実質と、気質の熱か冷かそれらの中間との複合から生じる3種とは何か?——濃厚な実質が冷の気質と複合されると、そこからえぐい味が生まれる。濃厚な実質が熱の気質と複合されると、そこから苦い味が生まれる。濃厚な実質が熱の気質と冷の気質の中間と複合されると、そこから甘い味が生まれる。

27: 希薄な実質と、記述された3つの気質のそれぞれとの複合から生じる別の3種とは何か?——希薄な実質が熱の気質と複合されると、そこから辛い味が生まれる。希薄な実質が冷の気質と複合されると、そこから酸っぱい味が生まれる。希薄な実質が2つの性質の中間つまり熱と冷 [の中間] と複合されると、そこから脂っこい味が生まれる。

28: 濃厚な実質と希薄な実質の中間と、熱の気質か冷の気質の複合から生じる残りの2種とは何か?——その2つの実質の中間が冷の気質と複合されると、そこから渋い味が生まれる。熱の気質と複合されると、そこから塩っぱい味が生まれる。

29: 味わう際に味の性質はどのように区別されるか?——味わわれる物体が舌に触れてもそれに対して何も作用せず、接触の際に不快も快楽も感じないときは、それは味の欠損したものと呼ばれる。味わわれる物体が舌に触れて、それを乾かして圧縮して粗くするときで、このような作用が強いなら、それはえぐいものと呼ばれるが、その作用が強くないなら、それは渋いものと呼ばれる。舌に対して述べたような作用を全くせず、全てその反対の作用をする、つまり舌を洗ってそこにあるものを洗浄し、そして渋い何かがそれに張り付いているとそれを洗浄して洗うときには、それは塩っぱいものと呼ばれる。その洗浄があまりにも強力なら、それはまた硝石性 (bawraqī)¹⁵⁰⁾ のものとも呼ばれる。塩っぱいものや礫砂性のものよりよく洗浄し、舌が損傷するほど粗くなるようなときは、それは苦いものと呼ばれる。舌と接触したとき、そこに刺激や腐食を激しい熱と共に生じるなら、それは辛いものと呼ばれる。それによって生じる刺激が、辛いもので生じるような熱を伴わないが、それが接触するものに沸騰に似たことを生じるときは、それは酸っぱいものと呼ばれる。舌と接触したとき、それを矯正して、それが被った損傷を鎮めてその粗さを滑らかにする、またそれが隙間を満たして乾燥に潤滑剤を塗ってくれる軟膏のようになる、そしてそれとの接触が明らかな舌の快楽を伴うときは、それは甘いものと呼ばれる。それ [舌] にとって明らかな快楽が無いなら、それは脂っこいものと呼ばれる。風味の種類解釈について、それらはいくつか、それらはそれぞれ何から生まれるのか、それ [らのそれぞれ] はどのように確認されるのかについての話は既にあった。今は、匂いのことについて解釈することが残っている。このことは、味について前に述べたことに加えられなくてはならないのである。まず匂いの風味 [と比べた] 地位はどのようなものかを解釈しなくてはならない。匂いは多くの状況で味と一致する。すなわち、蒸気状のものは全て、味が影響するのと同じように感覚に影響する。それから、酢¹⁵¹⁾ やあらゆる酸っぱいもの、またニンニクやタマネギのようなあらゆる辛いものから嗅覚が獲得するものは、まさに味覚が獲得するものである。同様に、他のものそれぞれについても、嗅覚が感じる匂いは味覚が感じる味と多くの状況で似ている。そのため、多くのものについて、その汚れのために人間が味を決して感じないということになる。糞や、悪く不快な匂いがある腐敗した食べ物のように。それらの味はその匂いから確認できる。そのため、その匂いから導かれることがかなり確信できるので、[人々は] それらを味わお

150) bawraq (硝石) [= vitrov] . [Baytār I: 170-73]

151) [Sīnā II: 714-15] [Baytār II: 336-39]

うとしない。一部のもの、特にバラ (ward)¹⁵²⁾ のような極端に匂いの良いものは、匂いと味が非常に大きく異なる。この相違のため、バラやそれに似たものにおいては、匂いが示すことと味が示すことが一致しない。

30: バラの匂いがその味と違う理由は何か?—その理由は、そこにある味の力が苦味、えぐみ、水っぽさの複合であり¹⁵³⁾、そのためにそれは部分が同等でないこと¹⁵⁴⁾。というのも、前に述べた通り、苦い部分は希薄で熱、えぐい部分は濃厚で冷、水っぽい部分は味が欠損しているため冷であり、希薄と濃厚との中間である。嗅がれるものの実質は蒸気状の実質であり、その働きは脳の内側に影響する¹⁵⁵⁾。これは、物体の匂いを感じられるように嗅覚を動かすものは、嗅がれる物体から出て空気と混ざりような蒸気から発散して流れるもので、そして脳がこれを吸気によって鼻腔から吸引するからである。そのため、匂いのある物体は全て必ず熱性となる。というのも、多くの蒸気は熱から生まれなければならない。記述した通りなら、嗅がれる物体において多くの状況で一致するこれら2つの感覚は、特にバラでは一致しないことになる¹⁵⁶⁾。

31: 嗅がれるものの類はいくつか、その相違の原因は何か?—その類は2つ。それは、(1) 匂いの良いものと (2) 匂いのくさいもの。(1) 匂いの良いものの脳における立場とそこでの評価は、甘いものの舌における立場とそこでの評価に相当する。(2) くさい匂いの脳における立場とそこでの評価は、甘くないものの舌における立場とそこでの評価に相当する。これら2類は、片方は脳の中にある精神精気に調和し類似しそれに特有のものであるが、他方はそれに調和せず反し適切でないという点で、互いに異なる。舌に接触するものの味のうち、それに適切でそれに特有のものは1つだけであり、それは甘いものである。そのうち適切でないものの種類は多い。同様にまた、嗅がれる蒸気のうち、脳の中にある精気に適切でそれに特有のものは好まれる快いもの。それに適切でないものの種類は多く、嫌われる快くないものである。

32: 匂いの無い物体について、その匂いが無いことの原因は何か、またそれは例えば何か?—匂いの無い物体はどのようなものでも、それに匂いが無いのはそこから発散する蒸気が極端に少ないから、あるいはそこから出る蒸気が嗅覚の脈管に適切なような希薄と濃厚の中庸にないから。そのため、酸っぱいものや辛いものは実質が希薄であるためその味に類似した匂いをもつことになる。また塩っぱいものやえぐいものには匂いが無い。なぜなら、これら2つは両方とも濃厚であり、片方はその実質の濃厚に加えて気質が冷であるから。そのため、それらからつまり塩っぱいものとえぐいものから発散されるものは両方とも、少なくて乏しく、実質が濃厚で土性のものとなり、そのために吸気の空気と共に脳に入っていないのである。

33: 味のある薬品の気質をその風味から判断するように、匂いのある薬品の気質をその匂いから判断することは有効か否か?—薬品の気質の、その匂いからの判断は可能であるが、それを行う者が確信できるようなものではない。これは、匂いからは前に述べたようなことのみが証明できるからである。つまり、匂いのあるものは全て、気質が熱であり実質が希薄であること。その熱と希薄さの程度がどれほどかは、それが熱であり希薄であるという知識から人間が把握できるようなこと

152) róðov / Rosa. [Smā II: 451–53] [Baytār IV: 490–93]

153) mā fi-hi min qūwat al-madhāq と読む。

154) 「これは、水性と土性の実質の複合であると知られている。これには辛味、渋味、渋味を伴う苦味、少しの甘味がある。これを甘く苦くする原因のために、この水性のものには熱を失う [原因が] ある。また繊細さ [の原因] があり、その収斂性に効く。[Smā II: 451]」

155) Aristoteles, *De Sensu et Sensibilibus*, 第2章 438b24–27を参照。

156) 匂いの仕組みについては、Aristoteles, *De Anima*, 第2巻9章、*De Sensu et Sensibilibus*, 第5章を参照。

ではない。風味については、薬品の気質のそこからの判断は、それを行う者が常に確信をもてるものである。

34: 味わわれるものの気質はその味のどこから判断するのか、またその味からの判断は確かであるが、薬品の力のその匂いからの判断が確かでないのはどうしてか?—なぜなら、匂いは薬品から発散する蒸気のみを示し、またその蒸気は嗅がれるものの全ての部分から発散するわけではないから。もしその全てから蒸気が発散するなら、それが嗅覚を動かすこととそれに働きかけることは同じ動き同じ働きとならない。味覚は、それと共に舌が[味わわれるものに]接触する感覚であり、[一方]味の感覚はそれによって味わわれるものの全ての部分を動かし、その本性に応じてそれらのあらゆる部分にそのように作用する。そのため、薬品の気質のその味からの判断は薬品の匂いからのその判断より有効でより確かである。

35: 匂いのあるものの匂いがその気質を明らかに示さない原因は何か?—その原因は、多くの物体はその元素の最初の複合において部分が異なっていること。その実質の部分の相違が、匂いのある物体全てについて、その匂いがその気質を明らかに示さない大きな原因となっている。これは、匂いの無い物体は、その実質の濃厚さがそこから蒸気が発散するのを妨げているからである。またその匂いが無いことから、その気質の熱と冷の状態がどのようなものかを知ることはできない。匂いのあるものの匂いは、それは実質が希薄で気質が熱であることを示すが、このことからその実質の希薄さやその気質の熱の程度がどれほどかは明らかにならない。そのため、ものの匂いからのその気質全体の判断は確かではない。

36: 味わわれるものの味[が気質を示す]ように、匂いから嗅がれるものの気質を示すようなものが何も明らかにならない原因が、実質の部分の変化や相違であることは、どのようにして知られるか?—それは挙げておいた例、つまりバラから知られる。バラにはえぐいもの、苦いもの、水っぽいものが含まれる。そのうちえぐいものは必然的に土性で濃厚で気質が冷であり、苦いものは希薄で熱性であり、水っぽいものは気質が冷で希薄と濃厚の中間にある。この水っぽい部分のため、バラにあるえぐさと苦さは極端にならず、その匂いは良いものになる。すなわち、この水っぽい部分が熱によって熟して消化され、希薄になり温められると、そこから最も[発散]し易い蒸気が発散する。そのため、バラは匂いの良さと乾き易さが共存している。これらは全て、味覚によって試したとき、バラに存在すると試した者が判断できる特徴である。バラを嗅いだときには、その匂いからはそれらが存在すると判断することはできない。というのも、前に描写した通り、バラの全ての部分から蒸気が発散するわけではなく、その全ての部分が嗅覚に同じように働きかけるわけではない。

37: バラは部分が異なりそれらが等しくないことは、どこから知られるか?—それは2つの点から知られる。(1) 第一はバラには2つのもの、つまり含むものと含まれるものがあること。含むものとは固く土性のもの、つまりバラの物体のこと。含まれるものとは固い物質に含まれる湿ったもの、つまりバラの液汁(‘uṣāra)のこと。この液汁には3つのものがあり、それらはそれ[バラ]にのつての余剰物である。他の液汁に存在する余剰物のように。バラの部分が等しくないことを知ることができる2つの点のうち第二の点は、(2) バラの液汁に存在するこれら3つの余剰物は本性が異なること。これは、そのひとつは土性であり、バラの液汁におけるその地位が下層に沈殿するブドウ酒の粕のブドウ酒における地位[に相当する]からである。次のものは空気性であり、その地位はブドウ酒の上層に浮かび上るものの地位[に相当する]から。そして第三のものは水性で、全ての液汁にある水性の余剰物である。これはその[バラの液汁の]沸騰と、そのうち腐りうるものが腐

る原因。この水性の余剰物は、液汁の沸騰の原因となったり、それが腐る原因となったりする。

38: それ腐るのは何によって防ぐのか、また他の2つの余剰物によって腐らないのはどうしてか?——この余剰物が液汁の沸騰の原因となるのは、液汁にある本性的な熱が動き熱し始めて、それを征服するようになったとき。またそれが、液汁が腐る原因となるのは、沸騰の時に熱が熱すことができないとき。それ[液汁]が変化せずその時に完全には変容しないときには、それが熱に勝っている。液汁が腐るのをその余剰物が防ぐのは、2つのことのいずれかによる。(1) 火によって液汁が煮られてその水っぽさが消えてしまうこと、あるいは(2) 最も熱い太陽の下でそれが乾くこと。他の2つの余剰物、つまり空気性のものと土性のものが液汁を腐らせないのは2つの原因による。(1) ひとつは、それらが液汁から分離し、少し後で区別されて、特にそれらを伴わない液汁の実質が残ること。これは明らかに見られる。(2) もうひとつの原因は、それらの本性が腐敗からかけ離れていて、それらの実質がそれを受け入れ難いこと。というのも、それらは気質が乾である。単独薬品の力の、その風味からの判断が、その力のその匂いからの判断より有効でより確かであることははっきりと明らかになった。今は、薬品の力のその色からの判断について、その事情がどのようなものか告げることにしよう。その事情は、薬品の力のその色からの判断は、その匂いからのその判断より確かさや有効性からさらに遠いこと。その理由は、熱性の薬品、冷性の薬品、乾性の薬品、湿性の薬品があらゆる色をしているのが見つかること。しかし、あらゆる類の種子、根、液汁のうち、色によって気質を証明できるものがいくつか存在する。その例は、ブドウ酒、カイソウ(‘unṣul)¹⁵⁷、タマネギはそれぞれ、より白くなるにつれて熱が少なくなり、より黄色くなるあるいは赤みがかかるにつれて熱が激しくなること。コムギ(hinta)¹⁵⁸、キビ(jāwaras)¹⁵⁹、ササゲ(lūbiyā)¹⁶⁰、ヒヨコマメ(himmuṣ)¹⁶¹、ニオイショウブ(sawsan asmānjūnī)¹⁶²の根、ツルボラン(khunthā)¹⁶³の根、またこれらに似た他の多くの根や他の種子についても同様である。これらについてもこのことは同じとなることがある。すなわち、これらの類はそれぞれ多くの状況で、黄色や赤色のものが白いものより熱が激しい。この点で、薬品の力はその色から証明されるが、より優れてより確かなのは、限定と一致に基づき、議論の最初に述べた条件や原理に応じた実験から薬品の力を証明することである。実験については、風味は多くの状況でその力を示し、匂いもまた風味[が示すこと]を少し裏付ける。色がそれを示すことは、味と匂いの両方が示すことより少ない。これらが、単独薬品の力の算出へ導く手段である。しかるに、その知識を求める者はこれらを辿るべきである。

39: 薬品の分量について適用される方式や規定はいくつか、また一部の薬品は調合薬品に多くの量が合わされるが、一部は少しの量なのはどうしてか?——適用される規定、規範、原理は2つ。(1) これらの片方は単純なもの、(2) 他方は複合のもの。

40: 単純な規定とは例えば何か?——合わせる薬品が力の激しい薬品なら、それを少しの量だけ合わせるべきである。弱いものなら、それを多くの量だけ合わせて、それに入る性質の不足をその量の増大によって補うようにすべきである。同様にまた、効果の多い薬品は多くの量だけ合わせて、それに求められることの達成をその量の増大によって補うようにすべきである。その働きの少なさ

157) σκῖλλα / *Scilla maritima* L. [Sīnā II: 611] [Baytār III: 188–91]

158) πῦρός / *Triticum aestivum* L. [Sīnā II: 482–83] [Baytār II: 298–99]

159) κέγχρος / *Panicum miliaceum* L. [Sīnā II: 430–31] [Baytār I: 213–14]

160) σμίλαξ / *Vigna unguiculata* (L.) Walp. [Sīnā II: 543–44] [Baytār IV: 388]

161) ἐρέβινθος ὁ ἡμερος / *Cicer arietinum* L. [Sīnā II: 481–82] [Baytār II: 288–90]

162) κρίνον / *Lilium candidum* L. [Sīnā II: 590–91] [Baytār III: 56–59]

163) ἀσφόδελος / *Asphodelus aestivus* Brot. [Sīnā II: 708–9] [Baytār II: 352–53]

によって得られるものが効果の少なさに比例するなら、効果が少ない薬品は少しの量だけ合わせるべきである。

41: 複合の規定とは例えば何か?——単独薬品について、その力が激しいこととその効果が多いことに合意があるなら、複合薬品にはそれを中庸で適度な量だけ合わせるべきである。なぜなら、それが強いときは多くすべきではないし、その効果が多いからといって少なくすべきでもないから。薬品の力が激しく、その効果が少ないときは、それをごく少しの量だけ合わせるべきである。これは、その力の激しさによって、それが必要とされるための効果¹⁶⁴⁾を達成できることもあるから。同様にまた、薬品の力が弱く効果が多いときは、それを非常に多くの量だけ合わせるべきである。その量の増大が、その力が激しい場合に達成できるようなものに足るようにするために。薬品の力が弱く効果が少ないなら、それを適度で中庸な量だけ過不足なく合わせるべきである。というのも、それを増やしてはならないのは、効果が少ないから、その量を減らしてはならないのは、力が弱いから。

42: 複合薬品に合わせる単独薬品の量について適用される規定はいくつか?——2つ。

43: それは何か?——複合薬品に合わせる単独薬品の量については2つのことに基づく。(1) ひとつはその複合薬品を入手する目的。毒蛇の肉を解毒剤 (tiryāq) に合わせる時のように。(2) もうひとつはその複合薬品を調合する単独薬品のそれぞれに価値があること、必要とすることに依じる。

44: 複合薬品に調合される単独薬品のそれぞれに価値があること、必要とすることとは例えば何か?——単独薬品を合わせて複合薬品にすることが意図されるのは、そこに含まれる薬品に存在する有害な性質を変化させるためか、それらの薬品の力を増大させて激しくするためか、それらの力を減少させ失わせるためか、それらの力を浸透させ分散させて¹⁶⁵⁾それを必要としている身体の場合へ達するようにするためか、薬品の力を維持するためかである。

45: それは例えば何か?——有害な力の変化が意図されるような薬品とは、スカンモニアをコショウやアニス (anīsūn)¹⁶⁶⁾と混ぜるときなど¹⁶⁷⁾。薬品の力の増大が意図されるようなものとは、解毒剤にイリス (īrsā)¹⁶⁸⁾として知られるニオイショウブの根、キショウブ (wajj)¹⁶⁹⁾、チョレイタケ (ghārīqūn)¹⁷⁰⁾を合わせるときなど。薬品を力の減少させ失わせることが意図されるようなものとは、解毒剤にゴム (ṣamgh)¹⁷¹⁾を合わせるときなど¹⁷²⁾。薬品の浸透と分散が意図されるようなものとは、解毒剤に酒 (sharāb)を合わせるときなど。薬品の力の維持が意図されるようなものとは、熱い毒消し (ma'jūn)¹⁷³⁾にオビウムを合わせるときなど。

164) その効果のためにその薬品が必要とされることになったということ。

165) yubadhqir と読む。

166) ἄνησσον / *Pimpinella anisum* L. [Sīnā II: 342–43] [Baytār I: 82]

167) 「イブン・サラールビユーン曰く。スカンモニアには胃と内蔵への害がある。[……] これは、芳しくその匂いで強めるもののように胃に効く薬品、またショウガ、アニス、コショウ、塩のように胃からそれ [害] を速やかに取り除くものと混ぜなければならぬ。(Yohannān bar Serāpiyōn / Yūhannā b. Sarābiyūn: d.ca.873)」 [Baytār III: 25]

168) ἴρις / *Iris florentina* L. 「これはニオイショウブの根。後者は茎のある草で、白、黄色、空色 (asmānjūniya)、紫色の複合する様々な色の花をつける。これは īrsā、つまり虹 [= ἴρις] (qaws quzaḥa) と呼ばれる。[Sīnā II: 364–65]」 [Sīnā II: 364–65] [Baytār I: 97–98]

169) ἄκορον / *Iris pseudacorus* L. [Sīnā II: 453–54] [Baytār IV: 489]

170) ἄγαρικόν / *Polyporus*。一連のキノコの類であり、特定の種を指しているわけではない。[Sīnā II: 723–24] [Baytār IV: 199–201]

171) κόμμι。通常の場合、ṣamgh はアラビアゴム (ṣamgh 'arabī)、アラビアゴムノキ (*Acacia senegal*) から採れる樹脂を指す。[Sīnā II: 639] [Baytār II: 114–16]

172) Galenus, *De Antidotis* [Galen XIV: 1–209] には、これらを含む解毒剤の処方いくつも記録されている。

173) ἀντίδοτος の訳語。

46：複合薬品の調合で服用量に関して適用される規定とは何か？——薬品の調合を意図するときは、単独薬品をそれぞれ正規の服用量¹⁷⁴⁾だけ取って、それらを集める。そしてその全体から、それらの薬品から集められた部分が要求するものに応じた量を取る。しかるに、[調合する薬品が]2つなら、その服用量[の全体]において、それぞれ半分ずつにせねばならない。3つなら、3分の1ずつ。4つなら、4分の1ずつ。その複合薬品を調合する他の数の薬品についても、この規範に従う。

47：それは例えば何か？——薬品がスカンモニア、コロシントウリ(hanzal)¹⁷⁵⁾の果肉、アロエ(sabir)¹⁷⁶⁾、チョレイタケから調合されるなら、スカンモニアの正規の服用量は2分の1ディルハム強、コロシントウリの果肉は4ダーナク¹⁷⁷⁾、アロエとチョレイタケはそれぞれ2ディルハムであることは知られているのだから、この薬品の服用量は1ディルハムと2ダーナクとせねばならない。そして、そこに含まれるスカンモニアは8分の1ディルハム、コロシントウリの果肉は6分の1ディルハム、アロエとチョレイタケはそれぞれ2分の1ディルハムとなるようにする。スカンモニアを6分の1[ディルハム]にしても害悪は無い。

48：医者が薬品を調合し複合薬品を用いざるを得なくなるのは、いくつのことのためか？——6つことのため。

49：それは何か？——(1)第一は自然な事態から外れた身体の状態の程度における相違。(2)第二は薬品の使用の目的における相違。(3)第三は多くの薬品がもつことによる不快で嫌われる性質の矯正。(4)第四は薬品の、力の激しさによる有害な力を失わせる必要。(5)第五は対立する力が共存している薬品を必要とするような疾患への対抗。(6)第六は1つの薬品が医者の手に入れば、起きてしまっても備えができていないような疾患の不測の事態の多くの際にそれが助けになること。

50：そうせざるを得なくなるような第一の必要とは例えば何か？——医者が身体に生じる自然な事態から外れた状態を全て、単独薬品によって治療することができるなら、どんな時にも複合薬品は必要とされない。[しかし]これはあり得ないことなのだから、複合薬品が必要とされる。すなわち、多くの場合に身体のある程度の加温が必要となるが、その程度だけ温められるような単独薬品や、その病を治癒する薬品が見つからないなら、その量はそれを治癒する薬品の量に比例させるべきである。そのような場合は、2つの薬品、ひとつは平衡な気質より温かいものを多くの量だけ、もうひとつはそれより温かさが少ないものを混ぜて、それらから中程度に温める薬品を調合することが要求される。なぜなら、それは中程度で適度な量では、平衡な気質より温かいから。

51：そうせざるを得なくなるような第二の必要とは例えば何か？——単独薬品の多くは、他の何かと混ぜずに用いることができない。ある器官を軟膏の代わりに薬品によって治療する必要があるときに起こるように。というのも、そう望むとき、それに相応しい単独薬品が見つからない[ことがある]。もしそうなら、医者が優しくしなければならず、最初に軟膏を必要となった際には、薬品を油と混ぜて、また平凡な薬品をそれ[油]で煮て、そこに溶け出たものを溶かし、その調合に必要なとなる植物から採った薬品を乾かし、挽いて濾して取り、全体から軟膏が組み合わされるように工夫しなければならない。

52：そうせざるを得なくなるような第三の必要とは例えば何か？——多くの疾患では本性によって

174) 単独で服用するときの服用量。

175) *κολοκύνθις* / *Citrullus colocynthis* (L.) Schrad. [Sinā: 480–81] [Baytār II: 296–98]

176) *ἀλόη* / *Aloe vera* L. [Sinā II: 640–41] [Baytār III: 104–8]

177) 1ダーナク = 1/6 ディルハム

為るところにより、1つの単独薬品のみが必要となるので、その疾患はその他のものを必要としない。しかし、2つのことのいずれかのために、他の薬品をそれと混ぜることがある。(1)時にその不当な力を失わせるのを意図する、(2)時にそこにある嫌で不快な味や、嫌で酷い匂いの矯正を意図する。あるいはこれら両方の必要から。

53: それらの必要のうち最初の必要、つまり6つのうち第三の必要とは例えば何か?——鎮痛剤として知られる薬品、つまりマンドラゴラ (yabrūh)¹⁷⁸⁾ の根と、ケシのミルクつまりオピウムを合わせたものを、海狸香のような気質が熱である他の薬品と混ぜるような場合¹⁷⁹⁾。

54: それらのうち第二の必要、つまり6つのうち第四の必要とは例えば何か?——必要となる薬品が嫌な味や匂いがあるとき、その匂いの嫌さを失わせるような薬品をそれと混ぜ、好ましくなるようにする。ヒポクラテスがバイケイソウ¹⁸⁰⁾ をニンジン (dūqū)¹⁸¹⁾、パセリ (karafs jabafī)¹⁸²⁾、クミン (kammūn)¹⁸³⁾、アニスや他の匂いの良い薬品と混ぜたように¹⁸⁴⁾。また陸のスベリヒユ (farfayn al-barr)¹⁸⁵⁾ として知られる薬と阿魏 (hiltīta)¹⁸⁶⁾ を混ぜたように¹⁸⁷⁾。

55: 下剤つまりそのような状況で必要となるものが、それを好ましくするようなものと混ぜる必要があるのはどうしてか?——2つのことのため。

56: それは何か?——(1)ひとつはそれを飲み易くするため、(2)もうひとつは胃の中で安定させるため。飲む薬品の多くは、それを飲む者が摂取する際に、その不味さから吐き気をもよおし、呼吸の異常と胃の拒絶のためにそこに落ち着けないものが生じて、胃が即座に押し出してしまう。その一部は胃に落ち着き、少し停滞することができるが、その後で胃は拒絶し、それから生じて動かすげっぷの悪さのために押し出してしまう。

57: 複合薬品を用いる第五の必要とは例えば何か?——一部の疾患ではその治療において、対立する力が共存しているものが必要となることがある。防いで抵抗する薬品と分解する薬品を共に必要とする疾患のように。あるいは洗浄する薬品と滑らかにする薬品を [必要とする疾患のように。]あるいは半三日熱 (shatr al-ghibb)¹⁸⁸⁾ のように体液を濃厚にする薬品とそれを細かくし希薄にする薬品を [必要とする疾患のように]。これらのような疾患における複合薬品の必要は他の疾患においてより大きい。そのため、その場合には対立する2つの力を集めた薬品によって治療する必要がある。なぜなら、その時にこうすることは、効果がより多く効力がより大きくなるから。

58: 第六の必要とは例えば何か?——有毒動物の毒の多くと対抗し、致死的な薬品の多くと対抗する1つの薬品が必要となるとき、それらの毒や致死的な薬品に効く複合薬品を用いる。これはかつて解毒剤ティルヤークが、解毒剤ティルヤークの前にはミルディトス (mirūdītūs)¹⁸⁹⁾ として知られ

178) μανδραγόρας / *Mandragora officinarum* L. [Baytār IV: 510–12]

179) 鎮痛剤となる薬品は非常に強力で危険なほどの冷の気質をもつので、それを中和するために熱の気質をもつ薬品を加える。Galenus, *De Compositione Medicamentorum secundum Locos*, 第8巻 [Galen XIII: 150] を参照。

180) ここでは厳密には kharbaq aswad / ἐλλέβορος μέλας / *Helleborus niger* L. (フユボタン) を指す。[Baytār II: 321–23]

181) δαύκος / *Athamanta cretensis* L. jazar barrī と同じ。[Sinā II: 441] [Baytār I: 221–23; II: 409]

182) ὄρεοσέλινον / *Peucedanum oreoselinum* (L.) Moench. [Sinā II: 528–30] [Baytār IV: 310–14]

183) κύμιον ἡμερον / *Cuminum cyminum* L. [Sinā II: 523–24] [Baytār IV: 346–47]

184) Hippocrates, *De Diaeta in Morbis Acutis*, 第7節 [Hippocrates II: 2743–75] を参照。

185) πεπλίς / *Portulaca oleracea* L.

186) σίλφιον / *Ferula assa-foetida* L. [Sinā II: 479–80] [Baytār II: 283–85]

187) wa khalāṭa ma'a al-dawā'i al-ma'rūfī bi-farfayni al-barrī hiltītan と読む。Hippocrates, *De Diaeta in Morbis Acutis*, 第7節 [Hippocrates II: 274–75] には、「スベリヒユには阿魏のミルクを [混ぜなければならぬ]」とある。

188) = ἡμιτριταίος.

189) mithrūdītūs = μιθριδάτιον の誤りと思われる。自ら習慣的に服毒し、毒への耐性をつけようとしたポントスのミト

る毒消しや、それに続く他の毒消しが必要とされたような状況である。

59：解毒剤はどうしてティルヤーク (tiryāq)¹⁹⁰ と呼ばれるか？——なぜなら、あらゆる咬みつく動物の名前は、ギリシア語でテーリオン (tayrūn)¹⁹¹ といった。その毒消しつまりテリアカは咬みつく動物と有毒動物の毒に効くので、ギリシア人らはその言語におけるその名前を、咬みつく動物の名前から派生させてテーリアケーと呼んだ。アラブ人らがそれを修正してティルヤークと呼んだ。またギリシア人らをしてその薬品をテーリアケーと呼ばせたのは、そこに毒蛇の肉が含まれており、その毒蛇の名前がギリシア語において咬みつく動物全体の名前に入っていたこと¹⁹²。

60：ティルヤークを発明したのは誰か、それを完成させ完璧にしたのは誰か、またそのことを確かめ、その利点を暴いて紹介したのは誰か？——それを初めて発明したのは哲学者バグヌス¹⁹³。それを完成し完璧にしたのはアンドロマコス (Andrūmākhus)¹⁹⁴。これは、その調査で意図される目的のため、またその発明者がそれを調査しようとした発想のために他の薬品より適切である毒蛇の肉を増やした人。それを確かめ、その利点や長所を紹介したのはガレノス (Jālīnūs)。これは、そこに含まれる薬品一つ一つの理由、その服用量が異なる理由、必要とする者がそれと共に飲む様々なものの理由を告げている。そして、フナイン・イブン・イスハーク (Hunayn ibn Ishāq) は、それについてガレノスに先行された後で、後者が要約して述べた、収穫を求める者にとっての種子のようにされたこと、また学問の徒にとって宝庫に等しい彼の書物の1冊以上にあるような有力な意見を抜粋した¹⁹⁵。[前者は] ティルヤークについての書物を著し、それを2つの小論として、そこでティルヤークのことを最も明白な言葉で解釈したのである¹⁹⁶。

61：ティルヤークの効果において特有であり、そのためにそれが他の飲まれる複合薬品より優越でより役立つことになるような、長所や価値とは何か？——複合薬品には、先行して、小さな欠点から身体に起こる害を矯正することによって、病気の発生から健康を守るものと、発生した後で病気を治癒するものがある。ティルヤークはこれらの両方を両立しているものなので、それは薬品で最も優越し最も貴重なものとなる。すなわち、それは人間を有毒動物や致死的な薬品から降りかかる害から隔離する。そのため、人間が先取りして飲んだとき、それは身体がそれらの毒や致死的な薬品に害されることから守る。身体に外から現れるような害から守り、それを防ぐだけでない。それはまた身体に生まれたり、生まれそうな有害なものから害されるのを防ぐこともある。

62：一部の人が薬品の力や作用のことを疑うのはどうしてか？——一部の人が薬品の力や作用のことを疑うのは、2つの点から。(1) ひとつはそれぞれに記述される力を彼らが疑っていること。(2) もうひとつはそれを調合するものの調合を彼らが疑っていること。

63：その作用や力への彼らの疑いとは例えば何か？——彼ら曰く。人間が飲み込み胃へ達するようなものが全て必ず、まず肝臓へ浸透し、それから血液と共に身体全体へ達するならば、薬品には特に肝臓に効くもの、脾臓に効くもの、腎臓に効くもの、膀胱 (mathāna) に効くものがあると、ど

リダテス6世 Mithridates VI (132-63BC) の名前を冠した解毒剤。あらゆる毒に効くとされ、様々な調査が同じ名前と呼ばれた。[Pliny XXV, 3] [Galen XIV: 1-5, 283-84] [Sinā V: 403-404]

190) = θηριακῆ.

191) = θηρίον.

192) θηρίον (野生の) 獣の意味。また人間に害を為す動物も意味する。

193) Bāghnūs とあるが Magnus か。世界初の解毒剤は上記のミトリダテス6世に帰せられる。

194) Andromachus. ネロ帝 (在位 37-68AD) の侍医を務めた人物。

195) *De Antidotis* [Galen XIV: 1-2091], *De Theriaca ad Pisonem* [Galen XIV: 210-94], *De Theriaca ad Pamphilianum* [Galen XIV 295-310]。これらはそれぞれ、*Kitāb al-adwīya al-muqābila li-l-adwā'*, *Kitāb fī al-tiryāq ilā Fīsun*, *Kitāb fī al-tiryāq ilā Bamfūliyānus* の書名で翻訳された。[Bergsträsser 1925: 31]

196) フナインの著作、*Kitāb al-tiryāq* のこと。これは関連する書物からの抜粋集であつたらしい。[Ibn al-Nadīm: 464]

うして言うことが許されるのか。

64: この疑いはどうやって解決したのか、またそれに対する答えはどのようなものか?——言ってみれば、アメフラシ (arnab bahri) は——これは海から出るもののひとつである——身体に与えられると身体の他の器官ではなく特に肺に潰瘍を生じることが実験によって明らかにわかっている¹⁹⁷⁾。またカンタリスが身体に与えられると、特に膀胱に潰瘍を生じることがわかっている¹⁹⁸⁾。これ [らのこと] が明らかにされているなら、一部の薬品は膀胱に生まれた結石を崩すこと、一部は胸に集まったものを細かくすること、それが出ていき易いように崩して助けること、そして他の薬品一つ一つが器官一つ一つに特有の作用を為すこともまた可能である。

65: 薬剤の調合への彼らの疑いとは例えば何か?——彼ら曰く。その力が対立するようなものが調合されて互いに混ぜられるとき、それらの力はその状態に留まることができず、その力は壊れて絶えてしまう。湿ったものを互いに混ぜる[場合]、このことの正しさは明らかに支持される。すなわち、激しく沸騰する水と非常に冷たい水を混ぜると、これら混ぜられた2種の水のどちらもそれ以前[の状態]に留まっていない。それらから第三のもの、その2種のどちらとも別のものが生まれる。熱い水と冷たい水が混ぜられたときの事情が記述した通りなら、その力が対立する薬品が調合されたときもまた、これと同じことが起こるだろう。このことが、その力が壊れてしまうことを示すのである。

66: その疑いはどうやって解決したのか、またそれに対する答えはどのようなものか?——言ってみれば、薬品や治療するために身体に与えられる他のものには、本性的な力によってその作用を為すもの、偶然的な力によってその作用を為すものがある。偶然的に帯びた力によってその作用を為すものは、冷水や熱湯のように、複合の際にその力が残らない。本性的な力によってその作用を為すものはその力が残り、またそれが他の偶然的な力を帯びていても、その本性的なものが離れてしまうことはない。そのため、それらのもののうち、カラシ¹⁹⁹⁾のような強い熱性の力をもつものは偶然的に冷やしても、それを接触させるのが長引いたときには、必ず身体を温める。ドクニンジンやオピウムのような冷の力 [をもつもの] は、それを接触させるのが長引いたときには、もしそれが偶然的な熱を帯びていたとしても、必ず身体を冷やす²⁰⁰⁾。前者による身体の加温と後者によるその冷却のため、身体に当たるものについて、前者の可能的な熱によってはその身体が燃焼してしまうのではないか、後者の可能的な冷によっては感覚が絶えてしまうのではないかと思われ想像されてしまうほどである。

67: 複合薬品のことについて医者らが信じている見解はいくつか?——2つ。

68: それは何か?——(1) ひとつは実験の徒 (aṣḥāb al-tajārib)²⁰¹⁾ の見解。(2) もうひとつは類推

197) λαγωός θαλάσσιος. 「これは有毒な薬品に数えられていて、肺に潰瘍を作ることによって [摂取した者を] 死なせてしまう。[Sinā II:378]」 [Baytār I: 30]

198) 「ガレノス曰く。それが膀胱に潰瘍を作るのは、きつい実体をそこへ寄せることによる。身体は [そのような実体から] 解放されることがなく、それへの特定性をもつ。[Sinā II: 720]」

199) 「反対に、カラシを冷たい空気の中、非常に冷たい水のもと、冬の時に挽いて、突然繊細で弱い身体にもたらすと、それは雪や水がそれに触れた場合と同じ程度に震える。しかしもし、より長い時間生き物の身体に伴っていると、まず少しの熱を感覚に生み出し、そしてさらに長い時間の後でそれから多くの [熱を生み出し]、火のもとに思えるようになる。[Galen XIII: 365]」

200) 6: 12の注を参照。

201) 経験主義者 (ἐμπειρικοί) のこと。観察主義者 (τηρητικόν)、想起主義者 (μνημονευτικοί) とも呼ばれる。病気の治療が成功するのは、一部は原因を除去することで達成される場合もあるが、大概は偶然の結果である。従って、有効な治療は多くの「経験」から導き出されるため、医師個人は経験を積めば積むほど優れた医師になる可能性がある、と考える人々である。

の徒 (aṣḥāb al-qiyās)²⁰²⁾ の見解。

69：実験の徒が信じる見解とは何か？——彼らの主張によれば、複合薬品は全て、人々が夢に見たものに応じて、あるいは彼らに一致して起こったことや意図しない探究に応じて調合されたにすぎない。そのうちには、個別にその調合を示し、全ての人々に存在する一般的な考えによって導かれるものがある。多くの薬品は実験されて、同じ作用を為すのがわかるが、それぞれ一部の身体ではその作用が多いが、一部では少ないのがわかるように。彼ら曰く。このような話が [当てはまる] 薬品について実験を通じて見て観察する際、このような状態にある多くの薬品を調合すべきだと我々の理性は示している。そして我々はそれらから複合された薬品によって人間を治療する [べきである]。というも、治療される人間の本性に適切な単独薬品がそこに1つ [でも] 含まれるかもしれない。

70：類推の徒が信じる見解とは何か？——彼ら曰く。あらゆる病気にはそれに特有の、その力がその治療とその疾病の治癒に適切な力であるような薬品がある。それらの薬品は調合されたとき、病人が必要とする回復のために互いに助け合う。また薬品には別に、それだけを単独にしても病人の治療に適切なものが何も無いが、互いに調合されたときには、その調合によって病気の治療と病人の回復に適切な別の力を帯びるような薬品がある。

71：それは例えば何か？——肉を生長させる薬品を必要とする潰瘍にとって最も適切な薬品は、イリスつまりニオイショウブの根、ウマノスズクサ (zarāwand)²⁰³⁾、オポバナクス (jā'ushīr)²⁰⁴⁾ の根、ヤハズエンドウ (karsanna)²⁰⁵⁾ の粉末、乳香 (kundur)²⁰⁶⁾ の粉末。なぜなら、これらは全て肉を生長させるから。緑青 (zinjār)²⁰⁷⁾ と混ぜておいた油に溶かした蠟によって人間の潰瘍を治療するなら、その調合のために、肉を生長させる薬品によって治療することになる。それを複合する2つの薬品はそれぞれ、肉の生長と極端に対立している。これは、緑青が潰瘍の肉を腐食させ溶かして消し去るのは、それが熱性できつい薬品だからであり、[一方] 油に溶かした蠟は優しく刺激の無い薬品であるが、これは潰瘍に肉の汚れた場所を生むからである。それらから、つまり油に溶かした蜜蠟と緑青から調合された薬品は、肉を生長させる必要がある潰瘍に肉を生長させる。これは、これらの薬品はそれぞれ混合の際に、それに伴う不当なものを失い、その悪を排除するからである。つまり、油に溶かした蜜蠟と緑青のそれ [不当なものや悪] を。

72：複合薬品について憶測される2つの見解で、より正しいのはどちらか、またその正しさはどこからわかるか？——実験の徒が憶測するような見解は正しくない。なぜなら、薬品の調合は思弁的な類推無しに [できるものでは] なく、思弁的な類推によって [できるもの] であるから。類推の徒が憶測する見解は真であり正しい。これは、薬品は調合されるのは、それを調合する単独薬品の力に応じて、その薬品が適切となるような自然な事態から外れた状態の種類に応じて、病人だ器官の本性に応じて、その組み合わせによって必要なものが証明できること、つまり年齢、気質、その時点の季節、その時の大気の状態、土地、職業、習慣のあり方に応じて思考や類推が必要とするも

202) 類推主義者 (ἀναλογιστικοί) のこと。教条主義者 (δωγματικοί)、合理主義者 (λογικοί) とも呼ばれ、医学において理性に大きな役割をもたせた人々。病気にはそれを引き起こしている原因があるが、そのような原因は感覚から隠されている。医師は理性を用いることでその原因を発見できる。そして発見された原因に続けて、その治療法も類推によって見出される、という。

203) ἀριστολογία/Aristolochia rotunda L. [Sīnā II: 470–72] [Baytār II: 463–64]

204) πάνακες/Opoponax. [Sīnā II: 418–19] [Baytār I: 212–13]

205) ὄροβογ/Vicia ervilia (L.) Willd. [Baytār IV: 323–24]

206) λίβανος. [Sīnā II: 515–17] [Baytār IV: 348–52]

207) ἰὸς ζυστός. [Sīnā II: 464–65] [Baytār II: 476–78]

のよってであるべきだと彼らは信じているからである。それとともに、複合薬品のそれぞれが有効あるいは有害になるような原因もまた知っていることがあるから。その例は、既に話した通り、緑青が油に溶かした蜜蝋と混ぜられるとき、そこから肉を生長させる薬品ができること。そのようなこと〔類推の徒がそのような原因を知る〕になるもとの発想は、実験の徒ではわからず、告げられないことである。類推の徒にはそれがわかり告げることができ、それによって〔彼らは〕実験の徒に反論し、その言葉を棄てている。

73: 複合薬品のことに関する類推のみとはどういうことか、また実験のみとはどういうことか?—薬品の調合を算出できる類推は、既に述べたような目的が要求するものに依る。また実験は、類推によって算出された複合薬品の長所を試すことができる。すなわち、薬品の調合の長所と優れた点は、用いられる薬品について実験がその長所と働きの優れた点を裏付ける際のみわかる。

74: 複合薬品の調合に、最も優れて最も素晴らしい調合というものはあるか?—否。誓ってそのようなものは決して無い。しかし、他の病気ではなくある病気により効くような、他の調合ではなくある調合というものは存在する。制限の無い絶対的な意味では、薬品の調合には、全ての調合より素晴らしいと言えるようなものは無い。

75: 複合薬品についてそれが優れているあるいは素晴らしいと言われるのはどのような点でか、またそれをその〔あるべき〕状況で使用できる者とは誰か?—複合薬品についてそれが最も優れて最も素晴らしいと言われるのは、それがあらゆる複合薬品で最も素晴らしいという絶対的な意味ではなく、これやその〔特定の〕作用をする複合薬品で最も素晴らしく最も優れているという〔意味〕である。その薬品をその〔あるべき〕状況で使用できる者とは、それを複合する単独薬品それぞれの力を知っている人である。

76: 複合薬品の使用を必要とする者にとって、2つのことのどちらがより相応しいか?—より相応しいのは、実験によって既に試された薬品を、その使用の方法がわかってから使用すること。何らかの事情から薬品を調合せざるを得ないなら、それが実験されていなくても、自分のために薬品を調合して使用することができる。。

77: ある複合薬品が存在するときは、どのような点でどのような発想でその薬品が調合されたのかは、どのようにしてその人に知られるのか、また〔未だ〕存在しないような薬品の調合を意図するときは、どのような方法でどのような規則でそれを調合するか?—それらのことは両方とも、その人が既に知っていて、それまでの人生において既に熟練していることからわかる。すなわち、治療を意図する病気それぞれの本性とそのそれぞれの治療を把握するための方法が、また単独薬品それぞれの力が前もってある人にわかっているなら、必要とする薬品の調合で辿るべき方法によって存在する薬品を調合する者が採った学説や思考についての知識がその人から消え去ることはない。

78: ある人が全て安全性が同じような多くの複合薬品を見つけるときには、それらやそのようなもののうちどれを選ぶべきか?—より少ない数のより発見し易い薬品から調合される薬品、そのうち最も効果の多いもの、その薬品によって意図される目的に最も適切で最も類似するもの。

79: 病気の段階はいくつか、またそのそれぞれはどのようにわかるか?—病気の時は4つ、つまり(1)初期(ibtidā'),(2)増大期(tazayyud),(3)絶頂期(intihā'),(4)鎮静期(inhīṭā')²⁰⁸⁾。(1)初期の範囲は、自然な機能が害を被り、病気を引き起こす原因を自然な能力がまだ熟し始めているとき。(2)増大期の範囲は、病気が増大して強くなり、その増大によって能力が弱くなり、また能力は病気に働きかけ始めているが、その働きは秩序が無く完璧ではないとき。(3)絶頂期の範囲

208) それぞれ、ἀρχή, ἀνάβασις, ἀκμή, παρακμήに対応する。

は、病気が止まって増大せず、本性による病気の征服あるいは病気による本性の征服を示すような徴を能力が表しているとき。(4) 鎮静期の範囲は、病気が減少して打倒されている、また本性が病気を熱すことによって排除していて、問題が全て解決しているとき。

第7章——血管の脈拍について²⁰⁹⁾

01: 脈打つ血管の脈拍とは何か?——脈拍とは、心臓と脈打つ血管が拡張と収縮によって、内在熱を平衡に維持するため、動物精気を増大させるため、精神精気を生むために動かす局所的な動き。またそれは脈拍の別の定義、つまり欺かない使者や無口な呼びかけ人、隠されたことを明瞭な反対の動きによって告げるようなもの [という定義] によっても定義される²¹⁰⁾。

02: どのようなものによって内在熱は平衡に維持されるか?——収縮によって出ていく熱い蒸気が出ること、拡張によって入ってくる冷たい空気が入ることによって²¹¹⁾。

03: 脈拍を変化させるものはいくつ?——3つ。

04: それは何か?——(1) 本性的なもの、(2) 本性的ではないもの、(3) 自然な事態から外れたもの。

05: 本性的なものとは例えば何か?——本性的なものとは、男性と女性の本性、熱、冷、湿、乾の気質、身体のか弱く痩せた体格や肥満で太った体格、季節つまり春、夏、秋、冬、大気の様々な状態、年齢、睡眠と覚醒、安らぎや休息、体操などである²¹²⁾。

06: 本性的ではないものとは例えば何か?——人間の意志によって起こり、本性からではないもの。ただし、本性はその平衡を好み、それへの傾向をもつ。これには3つの種類がある。すなわち、(1) 身体に外から届くもの、暑さや寒さ、入浴のように。(2) 内からもたらされるもの、食べ物や飲み物のように。(3) 人間が行うもの、体操のように²¹³⁾。

07: 自然な事態から外れたものとは例えば何か?——自然な事態から外れたものとは、その発生が本性からでも意志からでもないもの。その一部は嘔吐のように力を消散させるもの、一部は充満のように力に負担をかけそれを開放するもの²¹⁴⁾。

08: 脈拍の類はいくつ?——10。

09: それは何か?——(1) 第一の類は拡張の程度から推し量るもの。(2) 第二は動きの間隔から推し量るもの。(3) 第三は強さの程度から推し量るもの。(4) 第四は血管の物質の固さと軟らかさから推し量るもの。(5) 第五はその穴に注がれるものの量から推し量るもの。(6) 第六は血管の物質の熱さの性質から推し量るもの。(7) 第七は弛みや静止の間隔から推し量るもの。(8) 第八は動きと弛みの拍子から推し量るもの。(9) 第九は量の特性から推し量るもの。(10) 第十は血管の脈拍の数から推し量るもの。(1) 第一の類は拡張から推し量るが、この類は大きい脈、小さい脈、中

209) ラテン語訳に相当する箇所は無い。底本のテキストは第7章から第10章までをフナインの甥フバイシュによる補遺としている。第7, 9, 10章で扱われる脈拍、発熱、尿は診断のために必要な知識である。

210) 脈拍の定義はギリシアの医学者らにとって頻繁に問題となったようで、様々な定義がガレノスによって伝えられている。ここの記述に近いものでは、Pseudo-Galenus, *Definitiones Medicae* (ガレノス以前の時代の著作) に以下のような記述がある。「脈拍は拡張と収縮によって、内在する熱を冷やし、生命の力を増し、精神精気を生むためのもの。別に言えば脈拍とは、深く隠されたことを欺かずに告げる者、見えないことを告知する者、知られていないことの証明であり音楽的な動きや予言的な刻みに仕立て見えないことを予告するような者。[Galen XIX: 376]」

211) 呼吸の役割のひとつは、心臓に集まる熱を冷やし、過剰に熱くならないようにすることである。Aristoteles, *De Partibus Animalium*, 第3巻6章 668b33–669b12、*De Respiratione* を参照。

212) Galenus, *De Pulsibus ad Tirones*, 第9章 [Galen VIII: 462–67] を参照。

213) Galenus, *De Pulsibus ad Tirones*, 第10章 [Galen VIII: 467–70] を参照。

214) Galenus, *De Pulsibus ad Tirones*, 第11章 [Galen VIII: 470–73] を参照。

庸な脈に区分される。(2) 第二は速い、遅い、中庸に [区分される]。(3) 第三は強い、弱い、中庸に [区分される]。(4) 第四は固い、軟らかい、中庸に [区分される]。(5) 第五は充満、空虚、中庸に [区分される]。(6) 第六は熱い、冷たい、中庸に [区分される]。(7) 第七は連続的、断続的、中庸に [区分される]。(8) 第八は美しい拍子と悪い拍子に [区分される]。この悪い拍子は、子供の脈拍が青年の脈拍に似ているときにその拍子が悪くて拍子から外れた脈拍、幼年の脈拍が老人の脈拍に似ているときにその拍子が悪くて拍子からずれた脈拍、子供の脈拍が他の年齢の脈に似ていないときに拍子とかけ離れた脈拍に区分される²¹⁵⁾。(9) 第九は一様と多様に [区分される]。(10) 第十は規則的と不規則、つまり秩序に従うものと外れたものに [区分される]。

10: その状況を完璧にして完成するために、脈拍の種類はそれぞれ何を必要とするか? —— (1a) 大きい脈は強い力、それを強く要求する必要、そして軟らかく従順な道具、つまり血管の物質そのものを必要とする。(1b) 小さい脈はこれら3つと反対の特徴のいずれかによってその状況を完成させる。つまり、力の弱さ、その必要の少なさ、その道具の固さからそれは起こる。(2a) 速い脈はそれを要求する必要と健全な力を必要とする。(2b) 遅い脈はこれらと反対のいずれかを遅くなるために必要とする。(3a) 強い脈はその発生に、力の健全さ、軟らかく適切な道具を必要とする。(3b) 弱い脈はこれらと反対の原因のいずれかから起こる。(4a) 固い脈は血管の物質の固さからのみ起こる。(4b) 軟らかい脈は血管の物質の軟らかさから起こる。(5a) 充満した脈は精気の多さか血液の多さ、あるいはその両方の多さから起こる。(5b) 空虚な脈はこれらそれぞれの少なさと不足から起こる。(7a) 連続的な脈はそれを要求する必要の多さと激しさから起こる。(7b) 断続的なものはそれを要請する必要の少なさから [起こる]。(6) 熱い脈と冷たい脈は血管に注がれる実質の熱さあるいは冷たさから起こる。(8) 美しい拍子と悪い拍子、(9) 一様なものと多様なもの、(10) 規則的なものとその反対のものは、脈の類のうち4つに起こる。つまり、(i) 動きの性質から推し量る類、これは速い脈と遅い脈に区分されるもの。(ii) 拡張の程度から推し量る類、[これは大きい脈、小さい脈、中庸に区分されるもの。(iii) 強さの程度から推し量る類]、これは強い脈、弱い脈、中庸に区分されるもの。(iv) 弛みの間隔から推し量る類、これは連続的な脈、断続的な脈、中庸に区分されるもの²¹⁶⁾。(10) 規則的な脈と不規則な脈は多様な脈に特有であり、一様なものには [起こら] ない²¹⁷⁾。

11: 身体にある脈打つ血管全てのうち、両手首にある血管のみ触診されるのはどうしてか? —— 3つの理由のため。

12: それは何か? —— (1) 第一はそれらで触診するのが最も容易であること。(2) 第二はそれらで触診するのが最も見事であること。(3) 第三はそれらで触診するのが最も適切であること。

13: それらでの触診が最も容易となるのはどうしてか? —— 手首の肉が少なく、そこの血管がはっきりしているから。

14: それらでの触診が最も見事となるのはどうしてか? —— なぜなら、それらの血管での触診では、身体のごくも暴くことを強制されないから。というのも、両手を覆い隠すことは人間の習慣にはな

215) 年齢に応じて、厳密には年齢に連動する気質に応じて、あるべき脈拍が決まっている。具体的には、幼児の脈は非常に速いが、老人の脈は非常に遅い。また青年の脈は強く、老人の脈は弱く、子供の脈はその中間にある。Galenus, *De Pulsibus ad Tirones* [Galen VIII: 464] を参照。

216) テキストには3つの類しか列挙されていないが、校訂時の欠落か。アエギナのパウロスの記述によれば、第9類は大きさ、強さ、頻度、および他のこと(内容から速さと考えられる)に関する [Adams 1844, I: 202-13]。従って、本来の4つ目は、「強さの程度から推し量る類 [上記の第三のもの]」であろう。(ii) の「拡張の程度から推し量る類」は「大きい脈、小さい脈、中庸」となるはずなので、この間の箇所が欠落していると思われる。

217) 偽ガレノスの著作にはこれら脈の10の類が記録されているが、順番が異なる [Galen XIX: 634-37]。また、アエギナのパウロス, *De Re Medica*, 第2巻12章 [Adams 1844-47, I: 202-13] を参照。

い。

15：それらでの触診が最も適切となるのはどうしてか？——なぜなら、それらの場所は真っ直ぐな場所であり、診察によるその動きの知覚で最も重大である。これは、それらが真っ直ぐで心臓と平行しているため。

第8章——医学の理論の別の区分について²¹⁸⁾

01：他の人々は医学の理論と実践を前述の区分ではなくどのように区分するのか、彼らが自然なもの〔自然要素〕に加えたものはいくつか、またその加えられたものとは何か？——一部の医者は医学の理論を以下の区分によって区分する。彼ら曰く。医学の理論は自然要素の理論の知識、自然でない要素の知識、自然な事態から外れた要素の知識に区分される。彼らは既に述べたあの7つの自然要素の数に他の4つの、それらに密接に結びついた要素を加えた。それは、(1) 人間の年齢 (asnān al-nās)²¹⁹⁾、(2) 色 (alwān)、(3) 体格 (sahnāt)、(4) 男性と女性の相違である。

02：自然でない要素はいくつか？——6つのもの。

03：それは何か？——(1) 第一は人間の身体を取り巻く大気、(2) 第二は運動と静養、(3) 第三は入浴、(4) 第四は食べるものと飲むもの、(5) 第五は睡眠と覚醒、(6) 第六は排出と保持、そして性交 (nikāh)²²⁰⁾。ある人々はこれに精神的現象を加える。

04：自然な事態から外れた要素はいくつか？——3つ。

05：それは何か？——(1) 病気、(2) それを引き起こす原因、(2) それと結びついた症状。

06：年齢はいくつか？——4つ。

07：それは何か？——(1) 少年 (fityān) の年齢、(2) 青年期に達した青年 (shabāb) の年齢、(3) 中年 (muktahilīn) の年齢、(4) 老年 (mashā'ikh) の年齢。

08：少年の年齢とはどのような年齢か？——身体が成熟〔の途中〕にあるような年齢。その終わりは多くの場合30歳ごろ。

09：青年期に達した青年の年齢とはどのような年齢か？——成熟が完璧になったが、まだ身体が減退を始めていないような年齢。その終わりは多くの場合35歳ごろ。

10：中年の年齢とはどのような年齢か？——減退や衰えが明らかになったが、その力が低下も衰弱もしていないような年齢。その終わりは多くの場合60歳ごろ。

11：老年の年齢とはどのような年齢か？——力が弱まりが明らかになったような年齢。それは60歳から人生の最後まで。

12：少年の年齢の気質は何か？——熱かつ湿²²¹⁾。

13：青年期に達した青年の年齢の気質は何か？——熱かつ乾。

14：中年の年齢の気質は何か？——冷かつ乾。

15：老年の年齢の気質は何か？——根本的器官の気質は冷かつ乾。その身体に集められた湿に応じて、その気質は冷かつ湿にもなる。

16：身体にある湿とはいくつか？——4つ。

218) ラテン語訳の第1章02, 15-21節、第2章01-11節に相当する。

219) ここでいう年齢とは、年頃という意味である。

220) テキストでは、「第五は睡眠と覚醒、そして排出。第六は保持と性交」となっているが、T写本の読みを採る。また、性交は排出のひとつに数えられる。

221) [Lloyd, 1964: 100-101]を参照。

17:それは何か?—(1) 小さい血管にある湿、(2) 露の湿りのように、あらゆる器官に拡散した湿、(3) 諸器官の部分の間にある隙間にある湿、(4) あらゆる器官の部分の相互の繋がりを〔実現させている〕湿で、これが消えると身体が減びてしまうようなもの。

18:肌の色の種類はいくつか?—2つ。

19:それは何か?—(1) 内の原因から生じるもの、(2) 外の原因から生じるもの。

20:内の原因から生じる種類とはどのような種類か?—体液の優勢あるいはその平衡から生じるもの。

21:平衡を示す色はどのような色か²²²⁾?—白と赤から複合される色。

22:過剰や平衡からの外れを示す色はどのような色か?—黒色 (aswad)、黄色 (aşfar)、赤色 (aḥmar)、白色 (abyaḍ)、色白 (ashqar)。黒色、黄色、赤色は熱の優勢を〔共通して〕示す。ただし、黄色は胆汁の優勢を示し、黒色は黒胆汁の優勢を示し、赤色は血液の優勢を示している。白色と色白は冷と粘液の優勢を示す。

23:外の原因から生じる肌の色の種類はいくつか?—2つ。

24:それは何か?—(1) 大気的气質から生じるもの、スラブの国の寒さから生じる白さやスーダンの国の暑さから生じる黒さのように。(2) 精神的現象から生じるもの、悲しみから生じる黄色さや恥じらいから生じる赤さのように。

25:髪の毛の色の種類はいくつか?—4つ。

26:それは何か?—(1) 黒 (aswad)、(2) 赤 (aḥmar)、(3) 金色 (ashqar)、(4) 灰色 (ashyab)。

27:髪の毛の黒い色は何によるか?—激しい燃焼が生じるほどの熱の多さによる。

28:髪の毛の赤い色は何によるか?—熱と燃焼の不足による。

29:髪の毛の金色は何によるか?—髪の毛の赤さを生じる程度に〔満たないほどの〕熱の〔さらなる〕不足による。

30:白髪は何によるか?—内在熱の極端な弱さや腐敗した粘液がかびることによる。そのため、これは多くの場合老年期に生じる。

31:目の色の種類はいくつか?—4つ。

32:それは何か?—(1) 黒 (akḥal)、(2) 青 (azraq)、(3) 灰色 (ashhal)、(4) 褐色 (ash'al)。

33:目の黒さはいくつの原因によるか?—7つの原因による。

34:それは何か?—(1) 視覚精気 (rūḥ bāṣir)²²³⁾ の不足、(2) その不純、(3) 水晶状の湿 (ruṭūba jalīdīya)²²⁴⁾ の小ささ、(4) その位置が窪んでいること、(5) 卵の白身に似た湿 (ruṭūba bayḍīya)²²⁵⁾ の多さ、(6) その不純、(7) ブドウ状膜 (ṭabaqa 'inabīya)²²⁶⁾ の色の黒さ。

35:目の青さはいくつの原因によるか?—7つの原因による。

36:それは何か?—黒さを引き起こすことの反対のこと、つまり(1) 視覚精気の多さ、(2) その澄み、(3) 水晶状の湿の大きさ、(4) その突出、(5) 卵の白身に似た湿の不足、(6) その澄み、(7) ブド

222) 色 (lawn) は単独で体色を意味する。体内を探る方法が無い時代には外見から体内の状況を把握する様々な方法が考案された。体色もそのひとつであり、予後に重要であることを考えれば、第8章で扱う内容も診断に関係するといえる。Hippocrates, *Prognosticon*, 第2節 [Hippocrates II: 112-19] を参照。特に外見を用いた技術は人相学に通じるもので、アラビア語では *firāsa* と呼ばれた。

223) 視覚精気とは視覚の力を担う精気のこと。ガレノスの説によれば、脳から中空の神経(視神経にあたる)を通して目に達する特別な精気が、見る対象物との間の媒介(空気や水)を変化させることで、物が見える。

224) = ὑγρὸν κρυσταλλοειδές. 水晶体のこと。

225) = ὑγρὸν ὠιδές. 眼房水のこと。

226) = ῥαγοειδῆς χιτῶν. 虹彩のこと。

ウ状膜の黒さの不足。

37：目の灰色と褐色は何によるか？——黒さを生じる原因の一部と青さを生じる原因の一部が組み合わさるとき。灰色は視覚精気が褐色 [の目] より多くより澄んでいることを示す。

38：体格の種類はいくつか？——5つ。

39：それは何か？—— (1) 身体の肥え (khiṣb)、(2) 痩せ (huzāl)、(3) やつれ (sakhāfa)、(4) 屈強 (talazzuz)、(5) 中庸。

40：身体の肥えは何によるか？——肉の多さあるいは脂肪の多さによる。

41：肉の多さは何によるか？——熱を伴う湿の多さによる。

42：脂肪の多さは何によるか？——冷を伴う湿の多さによる。

43：痩せは何によるか？——肉の減少あるいは脂肪の減少による。

44：肉の減少は何によるか？——乾による、特にそれに冷が伴うとき。

45：脂肪の減少は何によるか？——熱による、特にそれに乾が伴うとき。

46：やつれは何によって生じるか？——熱か湿、あるいはその両方による。

47：屈強は何によって生じるか？——冷か乾、あるいはその両方による。

48：中庸の体格は何によるか？——気質の平衡による。

49：男性と女性の相違とは何か？——男性はより熱くより乾いている。女性はより冷たくより湿っている²²⁷⁾。

50：大気の変化はいくつの原因によるか？——5つの原因による²²⁸⁾。

51：それは何か？—— (1) 第一は季節 (awqāt al-sana)、(2) 第二は星の出と入り (ṭulū' al-kawākib wa ghurūbi-hā)、(3) 第三は風 (riyāh)、(4) 第四は土地 (buldān)、(5) 第五は蒸散物 (bukhārāt)。

52：季節はいくつか？——4つ²²⁹⁾。

53：それは何か？—— (1) 春 (rabī'), (2) 夏 (ṣayf)、(3) 秋 (kharīf)、(4) 冬 (shitā')²³⁰⁾。

54：春の気質は何か？——平衡。

55：夏の気質は何か？——熱かつ乾。

56：秋の気質は何か？——冷かつ乾。

57：冬の気質は何か？——冷かつ湿。

58：星は大気の気質をどのように変化させるか？——太陽がそれ [大気] に近づくとき、あるいはそれが太陽に近づくとき、大気は熱量が増大する。特にそれ [太陽] が大きくなるときはいつも。また太陽がそれから遠ざかるとき、あるいはそれが太陽から遠ざかるとき、大気は冷たさが増大する²³¹⁾。

59：風はいくつか？——4つ。

60：それは何か？—— (1) 北風 (shamāl)、(2) 南風 (janūb)、(3) 東風 (ṣabā)、(4) 西風 (dabūr)²³²⁾。

227) 熱および乾を表す単語として通常用いられる aḥarr / aybas ではなく askhan / ajaff を用いている。ここだけ訳し分けたが、「男性はより熱でより乾、女性はより冷でより湿」の意味。以下 hārr / yābis の代わりに sakhīn / jaff を用いている箇所があるが、気質に関する話であれば特に訳し分けしないことにする。気質における性差については様々な説があり、必ずしもこの通りに考えられていたわけではない。この通りの見解は、遡れば Hippocrates, *De Dieta*, 第1巻34章 [Hippocrates VI: 512] に由来する。[Lloyd, 1964: 102-3] を参照。

228) 以下 8:50-95 は、3:03-04 で列挙された健康と病気に共通する原因あるいは非自然要素の解説である。

229) Hippocrates, *De Aere Aquis et Locis*, 第10章-11章 [Hippocrates II: 42-53] を参照。

230) それぞれ, ἦρ, θερος, φθινόπωρον, χειμών に対応する。Hippocrates, *De Dieta*, 第68節 [Hippocrates VI: 594-605] を参照。

231) 太陽が近づくときは夏のこと、遠ざかるときは冬のことである。

232) それぞれ, βόρειος, νότος, εὔρος, ζέφυρος に対応する。

- 61: それらの風それぞれの力は何か? ——北風は冷かつ乾。南風は熱かつ湿。東風と西風は平衡であるが、東風は熱かつ乾に寄っていて、西風は冷かつ湿に寄っている。
- 62: 土地の相違の種類はいくつか? ——4つ²³³⁾。
- 63: それは何か? ——(1) 第一は方角 (nawāhī)、(2) 第二は高度 (irtifā‘)、(3) 第三は山と海の近さ (mujāwarat al-jibāl wa-l-bihār)²³⁴⁾、(4) 第四は土壌の土 (turbat al-arḍ) の性状。
- 64: 方角はいくつか、またそのそれぞれの力は何か? ——方角は4つ、つまり(1) 南、(2) 北、(3) 東、(4) 西。南の方角が最も熱であり、北の方角が最も冷である。東と西は平衡である。
- 65: 土地は上昇と下降²³⁵⁾ に応じてどのように異なるか? ——上昇すればそれはより冷になり、下降すればそれはより熱になる。
- 66: 土地は海の近さに応じてどのように異なるか? ——海が土地の南側にあるなら、その土地はより熱でより湿になる。海が土地の北側にあるなら、その土地はより冷になる。
- 67: 土地は山の近さに応じてどのように異なるか? ——山が土地の南側にあるとき、その土地は冷が増大する。なぜなら、そこは南風から遮蔽され、北風のみが吹くから。山が土地の北側にあるとき、その土地はより熱になる。
- 68: 土地はその土壌の性状に応じてどのように異なるか? ——その土に石が多いなら、その土地はより冷でより乾になる。土地の土壌に石膏が多いなら、その土地はより熱でより乾になる。[土壌] 良質な泥なら、それはより冷でより湿になる。
- 69: 大気は蒸散物のためにどのように変化するか? ——淀んだ水 (naqā’i‘)²³⁶⁾、死骸、腐敗した野菜やその他の腐敗するものが近いとき。
- 70: 運動は身体をどのように変化させるか? ——それが適度なときはそれを適度に温める。適度ではないときはまず過剰に温め、そして後で冷やしてしまう。
- 71: 静養は身体をどのように変化させるか? ——それを冷やし、異常に湿らせる。
- 72: 入浴の種類はいくつか? ——2つ。
- 73: それは何か? ——(1) 真水によるもの、(2) 真水によらないもの。
- 74: 真水による入浴の作用は何か? ——それは必ず身体を湿らせる。冷たい水による入浴であれば[身体を] 冷やし、熱い水による入浴であれば温める²³⁷⁾。
- 75: 真水ではない水による入浴の作用は何か? ——それは必ず身体を乾かし、温めることも冷やすことも決してない。しかし、塩水、苦い水、硫黄の水²³⁸⁾ による入浴であればそれを温める。明礬の力が優勢な水²³⁹⁾ であればそれを冷やす²⁴⁰⁾。
- 76: 食べ物の種類はいくつか? ——2つ。
- 77: それは何か? ——(1) 賞賛される糜汁を生むもの、(2) 欠点のある糜汁を生むもの。
- 78: 賞賛される糜汁を生む食べ物の種類はいくつか? ——3つ。
- 79: それは何か? ——(1) 淡泊なもの、(2) 中庸なもの、(3) 濃厚なもの。

233) Hippocrates, *De Aere Aquis et Locis*, 第3章-6章 [Hippocrates II: 14-27] を参照。

234) 山と海との位置関係を指す。

235) 土地の高度のこと。

236) Sol tendre où il y a de l'eau stagnante. [Kazimirski 1860: I: 1330b]

237) Hippocrates, *De Dieta*, 第2巻57章 [Hippocrates VI: 570-71] を参照。

238) 硫黄質の温泉のこと。

239) 明礬質の温泉のこと。現在でいうアルミニウム質の温泉のことか。

240) [Galen VI: 35] を参照。

- 80: 賞賛される糜汁を生む淡泊な食べ物とは例えば何か? —— シャコ (darārīj)²⁴¹、ニワトリ (farārīj)²⁴²、ハタハタ (samak raḍrāḍī)²⁴³ の肉など。
- 81: 賞賛される糜汁を生む中庸な食べ物とは例えば何か? —— 混ぜりもののないパン、羊 (da'n)²⁴⁴ や雌山羊 (mā'iz)²⁴⁵ の1年子の肉など。
- 82: 賞賛される糜汁を生む濃厚な食べ物とは例えば何か? —— 豚や仔牛 (‘ijl)²⁴⁶ の肉など。
- 83: 欠点のある糜汁を生む食べ物の種類はいくつか? —— 2つ。
- 84: それは何か? —— (1) 淡泊なもの、(2) 濃厚なもの。
- 85: 欠点のある糜汁を生む淡泊な食べ物とはどのような食べ物か? —— 黄胆汁を生む全ての食べ物。カラシ、コショウソウ (ḥurf)²⁴⁷、ニンニクのように。
- 86: 欠点のある糜汁を生む濃厚な食べ物とはどのような食べ物か? —— 黒胆汁あるいは粘液を生む食べ物。黒胆汁を生むものは、レンズマメ (‘adas)²⁴⁸、キャベツ (kurnub)²⁴⁹、雄山羊 (tuyūs)²⁵⁰ や雄牛²⁵¹ の肉など。粘液を生むものは、キノコ (fuṭr)²⁵²、仔羊 (ḥumlān)²⁵³ の肉、ハビース (khabābīs)²⁵⁴ など。
- 87: 飲み物の種類はいくつか? —— 3つ。
- 88: それは何か? —— (1) 飲み物の成果のみをもたらしもの、水のように。(2) それに加えて栄養の成果をもたらしもの、ブドウ酒や発酵酒 (nabīdh)²⁵⁵ のように。(3) それらに加えて薬品の成果をもたらしもの、ロブ (rubūb)²⁵⁶ のように。
- 89: 飲み物の成果、つまりそれから獲得できる利益は何か? —— それが、身体に栄養を運んで分散する媒介になること。
- 90: 栄養の成果、つまりそれから受けることができる利益は何か? —— それが、その本性をその [あるべき] 状態に維持するために、身体から消散するものの代わりになること。
- 91: 薬品の成果、つまりその利益は何か? —— それが、人間の身体の本性をその [あるべき] 本性へ変換すること。
- 92: 睡眠は身体をどのように変化させるか? —— 最初はその外側を冷やし、その内側を温め、また湿らせる。長びいたときには、その後で身体の内側を冷やす。
- 93: 覚醒は身体をどのように変化させるか? —— その外側を温め、その内側を冷やし、また乾かす。

241) ἄτταρήν. [Sīnā II: 446] [Baytār II: 371]

242) περιστέρα. Galenus, *De Alimentis Facultatibus*, 第19章 [Galen VI: 700] を参照。

243) 厳密に何を指すのかは不明。Galenus, *De Alimentis Facultatibus*, 第28章 [Galen VI: 718] には「それ [岩場に住む魚 (πετραῖος ἰχθύς)] からの栄養は消化し易いだけでなく、人間の身体にとって非常に健康に良く、中庸な粘度の血液を生むものである。」とある。

244) πρόβατον. [Sīnā II: 722] [Baytār III: 123]

245) αἴζ. [Baytār IV: 421–23]

246) μόσχος.

247) κάρδαμον / *Lepidium sativum* L. [Sīnā II: 476–77] [Baytār I: 268–70]

248) φακός / *Lens culinaris* Medik. [Sīnā II: 617–19] [Baytār III: 160–61]

249) κράμβη / *Brassica oleracea* L. [Sīnā II: 531–32] [Baytār IV: 315–19]

250) τράγος.

251) βούς.

252) μύκης. 特定の種ではなく、様々な種類のキノコを指す。[Sīnā II: 632–33] [Baytār III: 224–25]

253) ἄρνεϊος.

254) 濃縮したプディングのこと。

255) [Baytār IV: 473–75]

256) 濃縮した果物や野菜の汁のこと。

94: 性交の身体への作用は何か? ——必ずそれを乾かし、内在熱を減少させる。そしてそのためにそれを冷やすことになる。また、過剰な動きによってそれを温めることもある。

95: 精神的現象が身体に引き起こすことは何か? ——(1) 一挙にあるいは少しずつ、熱を動かして身体の外側へ上げるもの。一挙にの場合は怒り、少しずつの場合は快楽。(2) 一挙にあるいは少しずつ、熱を内へ捕らえて鎮静させるもの。一挙にの場合は怯え、少しずつの場合は哀しみ。(3) 内在熱を時に内部へ、時に外部へ動かすもの。不安や恥じらいのように。

96: その実質で区分したとき、諸器官の種類はいくつか? ——2つ²⁵⁷⁾。

97: それは何か? ——(1) 単純で単独であり生命をもたず、部分が等しいと言われるもの。(2) 複合で、道具的器官と呼ばれるもの。

98: 部分が等しい器官とは例えば何か? ——骨、軟骨、神経、被膜、脈打つ血管、脈打たない血管、単独の肉。概して、その全体とその全ての部分が同じ名前と呼ばれ、それ[全体]とその部分が同じ定義で定義されるような器官の全て。

99: 道具的器官とは例えば何か? ——頭、手、足、心臓²⁵⁸⁾、肝臓、脾臓。概して、それ[全体]とその部分が同じ名前と呼ばれず、その全体とその部分が同じ定義で定義されないような器官の全て。

100: その力やその定めの大さに応じて区分したとき、諸器官の種類はいくつか? ——4つ。

101: それは何か? ——(1) 主要器官。(2) 主要器官に奉仕する器官。(3) その統御とその状況の基礎が[実現する]ための内在の力と他から流れてくる別の力をもつ器官。(4) 内在の力をもつ器官。

102: 根源で鉦脈である主要器官とはいくつか? ——4つ。

103: それは何か? ——(1) 脳、(2) 心臓、(3) 肝臓、(4) 睪丸。

104: 脳は何にとつての根源で鉦脈であるか? ——感覚と運動。

105: 心臓は何にとつての根源で鉦脈であるか? ——生命。

106: 肝臓は何にとつての根源で鉦脈であるか? ——栄養。

107: 睪丸は何にとつての根源で鉦脈であるか? ——子孫、男らしさと女らしさ²⁵⁹⁾。

108: 奉仕される能力はいくつか? ——3つ。

109: それは何か? ——(1) 生殖力、(2) 成長力、(3) 栄養力。

110: 生殖力とはどのような能力か? ——精液を変容させ変化させ、そこから部分が等しい器官を作り、そしてこれらの器官から道具的器官を構成し、また道具的器官から身体全体を構成する能力。

111: 成長力とはどのような能力か? ——諸器官の長さや幅と深さを伸ばし、小さい[状態]から大きい[状態]へ移す能力。

112: 栄養力とはどのような能力か? ——栄養を栄養される[身体の部分]に同化させ、減少したものの代わりにする能力。

113: 奉仕する能力とはどのような能力か? ——生殖力には成長力と栄養力が奉仕する。栄養力には4つの能力、つまり吸引力、保持力、変質力、排出力が奉仕する。

114: 運動能力(quwā muḥarrika)はいくつか? ——その類は1つで、脳と脊髄(nukhā')から神経へ²⁶⁰⁾、意志での運動で運動する器官を運動させる筋肉へ浸透する能力の類。その種の数は運動す

257) 以下 8:96-113 は、1:27-45 で扱った内容と同じ

258) この箇所のみ fu'ād という単語が用いられている。[Lane I: 2323c]によれば qalb と fu'ād には差異があるというが、少なくともここで後者を用いた特別の理由は考えられない。

259) 1:28 の注を参照。

260) 神経には2種類あり、ひとつは感覚を司る軟らかい神経、もうひとつは運動を司る固い神経として区別されて

る器官の数に応じる。脳が根源で起源であり、そこから感覚と意志での運動が送られること、またこれらは熱によっては完成できないことが原因となって、脳は本性において冷かつ湿になっている。脳の本性における冷は2つのことのために為されている。ひとつは、そこでの動きが多く動きであること。想像の動き、思考の動き、記憶の動き、感覚の動き、意志での運動のように。あらゆる動きには熱が結びつき付随する。そのため、それらの動きが動く際に燃え上がったたり燃焼したりしないように、脳は冷になっている。もうひとつの理由は、思考の根源で起源である脳は補強と安定を必要とすること。また熱というものが動き易く移り易いのと同様に、冷というものは安定し長く停滞するものである。そのため、その冷のために思考が可能になり安定するように、脳は冷になっている。脳の本性における湿もまた2つの理由による。ひとつは、その動きの多さのために乾いてしまわないように。というのも、動きには熱の発生が付随し、また熱が多くなると、それには乾と乾燥が付随する。そのため、脳は湿になり、動きに耐えて持ちこたえ、過剰に乾いてしまわないようになっている。第二の理由は、それが2つの理由のために軟らかくなる必要があること。ひとつは、それが変化し易く動き易くなるため。第二は、感覚に相応しい軟らかい神経がそこから生えるため²⁶¹⁾。

[第9章] —— [発熱について]²⁶²⁾

01：発熱とは何か？——発熱 (*ḥummā*) とは自然な事態から外れた熱で、心臓から送られ、脈打つ血管から身体他の諸器官へ流れ、その機能を害するもの²⁶³⁾。

02：発熱の類はいくつか？——3つ。

03：それは何か？——(1) 精気に生じる類の発熱、これは一日熱 (*ḥummā yawmin*)²⁶⁴⁾ とされる。(2) 体液に生じる類の発熱、これは腐敗熱 (*ḥummā al-'ufūna*)²⁶⁵⁾ とされる。(3) 安定した根本的器官に固着する類の発熱、これは消耗熱 (*ḥummā al-diqq*)²⁶⁶⁾ という類。

04：一日熱は何によるか？——[それを] 生じる始原の原因による。

05：一日熱を生じる始原の原因の類はいくつか？——4つ。

06：それは何か？——(1) 第一は外から身体に届くものの類。激しい熱、激しい冷、薬品の力をもつものを混ぜた水による入浴のように。(2) 第二は身体に内からもたらされるものの類。食べ物や飲み物、熱性の薬品のように。(3) 第三は過剰な動きで動かすものの類。身体の場合は体操のように、精神の場合は怒りや悲しみのように。(4) 第四は外側の原因から外側の器官に起こる疾患の類。滑ることで足に生じる潰瘍のために、尿管に生じる腫瘍のように。

07：腐敗熱は何から生じるか？——先行の原因から。

08：腐敗熱を生じる先行の原因はいくつか？——5つ。

いた。前者は脳から伸びる感覚神経であり、7対が数えられる。後者がここで述べられる、脊髄から伸びる運動神経である。

261) 脳の内部で起こる精神的能力が、精神精気を介した脳内の加工として説明されている。脳は加工しやすいように軟らかいが、また加工したものが持続するように冷となっている。

262) ラテン語訳の第3章 01-04 節に相当する。

263) この定義はパラディオス *Palladius* (6c.-7c.) による定義に遡るものと思われる [Adams 1844-47, I: 188]。

264) = πυρετός ἐφήμερος.

265) = ἐπί σηπεδόνι πυρετός. 厳密に言えば、「(体液の) 腐敗による発熱」である。

266) = πυρετός ἐκτικός. ここでいう根本的器官とは心臓を指す。Galenus, *De Februm Differentiis*, 第1巻3章 [Galen VII: 281] を参照。

09:それは何か?——(1)体液の量の多さ、(2)その濃厚さ、(3)その粘着性、(4)それから生じる閉塞、(5)その滞留が長引くとき必然的にそれに付随する腐敗。これらの場合、その際に体液に起こる呼吸の無さのため。

10:消耗熱は何から生じるか?——様々な原因から。すなわち、ある時は始原の原因から生じる。悲しみ、不安、不眠、身体を温めつつ過剰に乾かすような他のことのように。ある時はそれに先行する他の病気のため。身体を激しく温めて激しく乾かす熱性の病気のように。あるいは身体を溶かし、それを平衡から外して熱かつ乾に[向かわせる]ような慢性の病気のため。時としてそれは一部の内臓に生じ、その害が心臓と結びついているような熱性の腫瘍のために生じるが、そのためにそれ[心臓]は共感としてその発熱を被る。

11:腐敗熱を包括する共通な種はいくつか?——純粋で単独なものは4つ。

12:それは何か?——(1)血液の腐敗による種、これはスノコス(sūnūkhūs)²⁶⁷あるいは不断の熱(hummā dā'ima)と言われる連続の熱(hummā muṭbiqa)。(2)黄胆汁の腐敗による種、これは三日熱(hummā al-ghibb)という1日発して1日発しないもので、ギリシア語でトリタイオス(tritai'us)²⁶⁸と呼ばれる。(3)粘液の腐敗による種、これは毎日発する熱で、ギリシア語でアンフィリュトス(amfirītūs)²⁶⁹と呼ばれる。(4)黒胆汁の腐敗による種、これは1日発して2日発しないもので、四日熱(hummā al-rib')²⁷⁰と言われ、ギリシア語でトリタイオス²⁷⁰と呼ばれる。その複合の種は多い。すなわち、[それらの]1つと1つから、1つと2つから、2つと2つから、3つから、あるいは4つから複合されるもの²⁷¹。

13:それら腐敗から生じる4つの発熱それぞれに特有の種はいくつか?——連続の熱²⁷²の種は3つ。(1)第一は始めから終わりまで増大し続ける発熱の種。(2)第二は始めから終わりまで減少し続ける発熱の種。(3)第三は始めから終わりまで同じ状態に留まる発熱の種。それら4種の腐敗熱のうち残りの3種²⁷³は、それぞれ2種類ある。すなわち、(1)不断のもの、(2)中断のあるもの²⁷⁴。

14:不断の熱はどのようなもののためか、また中断のある熱²⁷⁵はどのようなもののためか?——発熱の継続は、腐敗が血管の内にあるとき。中断のある熱は、血管の外で一部の器官に腐敗があるときに起こる。

15:腐敗熱を包括する種類はいくつか、またそれは何か?——2種類。すなわち、(1)一部の器官に生じる疾患を伴うもの。(2)器官に生じる疾患を伴わないもの。(1)器官の疾患を伴うものは、一部の内臓の腫瘍を伴って生じる発熱のようなもの。(2)器官の疾患を伴わないものは、意識の混濁や気絶のような異常な症状を伴うもの、あるいは頭痛や渴きのような類似する特有の症状を伴うもの。

16:血管の内にある腐敗はどのようなことのために不断の熱を生じるか?——それは2つのものの

267) = σύννοχος.

268) = τριταίος. 最初の発熱から数えて3日目に再発することから三日熱と呼ばれる。

269) = ἀμφίρυτος. 鎮静しても、最初の発熱があった日の翌日には再発するため毎日熱と呼ばれる。

270) テタルタイオス(τεταρταίος)の誤り。Galenus, *De Febrium Differentiis*, 第2章[Galen VII: 336]を参照。最初の発熱から数えて4日目に再発することから四日熱と呼ばれる。

271) 複合の腐敗熱に関しては9:46-51で扱う。

272) 血液の腐敗による種のこと。

273) 黄胆汁、粘液、黒胆汁の腐敗によるもの。

274) 三日熱、毎日熱、四日熱は定期的に発熱が起こるが、各発熱の間で弱い熱を帯びている場合と、完全に熱を帯びていない場合がある。ここでいう不断のものは前者で、中断のあるものが後者である。

275) 血液の腐敗による不断の熱に対して、血液以外の体液による3種の腐敗熱は中断のある熱と呼ばれる。

ため。(1) 既に腐敗したものが1つの場所、つまり大血管の穴に集まり、分断も区分もされないこと。腐敗するものが血管の外にあり、発熱の各発作の間にある期間に、それが腐敗の起源がある起点に徐々に集まるときのように。(2) もうひとつの原因は、血管の内にあるものが腐敗するとき、自然な事態から外れた熱のためにその全てが等しく着火すること。これら2つのことのために、発熱は連続的で不断であり続けて、その既に腐敗したものが消え去って全て消えるか、熱して矯正されるか、あるいはその両方を被ることになる。これは血液の腐敗から生じる発熱について既述した通りのこと。他の3つの体液の腐敗から生じる発熱については、発熱の継続は腐敗が血管の内であり、そのことが発熱を生じる体液の分解を妨げるとき。すなわち、腐敗した実体が、堅く物質の詰まった管に閉じ込められているなら、そこでは発汗によっても他の外側の排出によっても排出ができなくなる。そのため、1回目の発作の終わりの後で熱が留まって継続し、2回目の発作の始めが続いて、その腐敗のために他の熱が1回目の熱と同様に動かされることになる。これは連続的に続き、先行する発作の終わりに後続する発作の始めが続き、腐敗の終わりと静止まで、連続の熱のように発熱の全体が不断になる。血液性の発熱となる原因は時に状態が一様で、時に増大し、時に減少する²⁷⁶⁾。腐敗する血液が腐敗した後で消え去り分解する[もの]より多いとき、絶頂と最後に達するまで発熱が徐々に増大するが、ここからそれは増大型 (*mutazayyida*)²⁷⁷⁾ と名付けられている。消え去る血液が腐敗するものより多いとき、全体が減少するまで発熱は徐々に減少するが、ここからそれは鎮静型 (*munḥaṭṭa*)²⁷⁸⁾ と言われる。消え去る腐敗した血液が腐敗するものと等しいとき、その絶頂と終わりの時まで発熱は同じ状態を継続する。ここから、それは状態が等しい発熱 (*mutasāwiya al-ḥāl*)²⁷⁹⁾ と呼ばれる。

17: 血液が腐敗し分解するときの状態が異なるのは何から起こるか? —それが血液に起こるのは3つの原因から。

18: それは何か? — (1) 第一は血液の量と質に応じて。(2) 第二は身体を統御する能力の健全と弱さに応じて。(3) 第三は身体の屈強とやつれに応じて。

19: それはどのようにか? —血液の量がより多くなり、その気質がより湿になり、それを統御する能力がより弱く、それを含む管がより堅くより密になるにつれて、その腐敗はより容易になり、腐敗したものの分解はより遅くなる。これらの状態に関してこの反対となるような血液の状態は、腐敗とその後の分解に関してもまた既述した通りのことの反対となる。その一部の状態に関して最初のものに似ているが一部は異なるような血液は、2つの事柄、つまり腐敗とその後の分解に関して中間の状態にある。

20: 血液が血管の外で腐敗することはどのようにして起こるか、またどのような点でこの状態にあるそれから発熱が起こるか? —血液が血管の外で腐敗するのは、内側あるいは外側のある器官にそれが多くの量集まり、そこに腫瘍が生じてその腫瘍の中で腐敗するとき。この状態で発熱が生じるのは、腫瘍に集まった血液の腐敗が熱を生むから。またその熱がまず腫瘍のある器官を温め、そしてそこから隣接する器官へ散布され、その結合のためにそれを温め、その器官から他の繋がる器官へ浸透する。これらの器官から、それと繋がる他の[器官]へ浸透し、1つ1つ通過して、心臓へ達することになる。というのも、諸器官は全て、隣接することや血管における接合によって互い

276) 9:13 を参照。

277) = ἀναβαστικός, ἐπακμαστικός ともいう。

278) = παρακμαστικός.

279) = ὁμότονος ἀκμαστικός ともいう。

に繋がっている。心臓が温められてその熱が過剰になるとき、その熱は分裂した脈打つ血管における接合によって、それを必要とする器官に身体全体へ達する。その異常な熱が身体全体を包むと発熱となる。

21: 発熱と共に悪寒はいつ起こるか、またそれは何によるか?——中断のある熱では悪寒はその発熱の発作の初めに起こり、不断の熱では悪寒は峠の際に生じる。それが警告されているならその前に、共に生じる危機的な症状の1つとしてならその時に起こる。悪寒の発生は腐敗した余剰物が感覚のある器官に流入して、それを刺激するあるいは冷やすことによる。そのため、悪寒は中断のある熱では不断になる。なぜなら、このような発熱では腐敗は血管の外であるから。不断の熱では峠の時にのみ起こる。なぜなら、本性はその時に腐敗した余剰物を排出し、それを閉じ込めている血管から出すから。

22: 中断のある熱の周期はどのようなことのために異なるのか?というのも、黄胆汁の腐敗から生じる発熱は1日発して1日発しない、黒胆汁の腐敗から生じる発熱は1日発して2日発しない、粘液の腐敗から生じる発熱は毎日発するのであった。——それは3つの原因による。

23: それは何か?——(1) 第一は腐敗する体液が集まり易いこと、あるいは集まり難いこと。(2) 第二はそれが腐敗し易いこと、あるいは腐敗し難いこと。(3) 第三はそれが排出し易く分解し易いこと、あるいはそうし難いこと。

24: それはどのようにしてか?——粘液は毎日発する発熱を生じるが、それはその量の多さのために集まり易く、その湿のために腐敗し易く、その粘着性のために分解し排出し難いことから。黒胆汁は1日発して2日発しない発熱を生じるが、それはその量の少なさのために集まり難く、その冷と乾のために腐敗し難く、粘着性が無いために分解し易いことから。黄胆汁は1日発して1日発しない発熱を生じるが、それはこれら3つの状態に関して粘液と黒胆汁の中間にあることから。すなわち、それは粘液と比較すると、その量が[粘液]より少ないためにより集まり難く、その気質が乾であるためにより腐敗し難く、その熱が希薄なためにより分解し易い。[一方]それを黒胆汁と比較すると、その量が[黒胆汁]より多いためにより集まり易く、その気質が熱であるためにより腐敗し易く、その実質が希薄で細かいためにより分解し易い。これらの原因のため、粘液は毎日発する発熱を生じ、黒胆汁は1日発して2日発しない発熱を生じ、黄胆汁は1日発して1日発しない発熱を生じる。

25: 中断のある発熱の周期が、一部は順序と秩序に従い、一部は秩序と順序に従わないのはどうしてか?——発熱の周期が秩序と順序に従うのは、腐敗した体液が最初からその状態に留まって変化しない場合、その洗浄とそれが集まる場所への流入が同じ場合、それが集まり腐敗する器官の状態がかつてのように留まる場合、病人の管理がかつての通りの場合。周期が秩序と順序に従わないのは、血液が時に黄胆汁に時に黒胆汁に変容し変換されるように、その片方が他方に変換される際に体液が変化するから、あるいは他の体液が周期の間に起こるから。すなわち、それはある体液が腐敗して乱れ始める際には、その[体液の]本性に応じた発熱が発する。そして他のある器官から、それ以外には存在しない、あるいは身体全体に存在する他の体液が流入することによって散らされて、その[体液の]本性に応じた発熱の発作を生じる。管理にある欠点とは、病人の管理に欠点があり、その欠点のためにその身体に様々な種の体液が生まれ、そこからそれぞれその[体液の]本性に類似した様々な発熱が生じるとき。このようなことが起こるときは必然的に、発熱の周期はかなり先行するか、初めからの周期とは別の周期が共に生じるはずである。この通りであれば必ず、周期の秩序と順序は壊れる。

26：中絶のある発熱の各発作の期間が時に長く時に短くなるのはどうしてか？——それは2つの原因による。

27：それは何か？——(1)ひとつは体液とそれに特有な実質の本性。(2)もうひとつは発作の滞留の長引きを助けるあるいは妨害するものの増大と減少から。

28：それはどのようにして起こるか？——体液の特有な実質のため。粘液はその本性において分解し排出し難いので、それから生じる発熱の発作は多くの場合に18時間滞留する。黒胆汁もまた冷であり腐敗し難いので、それから生じる発熱の発作は多くの場合に24時間滞留する。黄胆汁は黒胆汁より腐敗し易く、粘液より分解し易いので、それから生じる発熱の発作は大抵は12時間滞留する。

29：それはどのようにして起こるか？——それは、発作の滞留の長引きを助けるもの、あるいは妨害するものの増大と減少のため。それを助ける要素と妨害する要素は3つであり、それら3つそれぞれの状態は異なるのだから、発熱の発作の期間また異なるはずである。

30：その3つの要素とは何か？——(1)第一は腐敗する余剰物の本性。(2)第二は病人の力の程度。(3)第三はその身体の造り。

31：発熱の発作の長さや短さは余剰物の本性のためにどのように起こるか？——余剰物がより濃厚でより多く、より粘つきより冷になるにつれて、発作は期間がより長くなる。それがより少なくより希薄でより温かく、粘着性がより減少すると、そのために発作は期間がより短くなる。

32：発作の期間の長さや短さは病人の力のためにどのように起こるか？——力がより強いときは、そのために発作は期間がより短くなる。より弱いときは、その弱さのために発作は期間がより長くなる。

33：発作の期間が長くなったり短くなったりするのは、身体の造りのためにどのように起こるか？——身体がより温かくより希薄になるにつれて、そのために発作は期間がより短くなる。より屈強になりより密になるにつれて、そのために発作は期間がより長くなる。

34：さて、それが集まるとき、そのために発熱の発作が長引くのはどのようなものか、またそれが集まるとき、そのために発作が短くなるのはどのようなものか？——発熱の発作が最も長いのは、余剰物が多くて濃厚で冷たく、排出力が弱く、排出される余剰物が出ていく出口が狭いとき。最も短いのは、余剰物が少なく希薄で熱く、その力が強く、排出の際にその余剰物が辿る経路が広いとき。

35：中絶のある熱の一部の発作は患者はそれを除去して熱はその人から離れるが、一部はその間に患者から熱が離れずそれを除去できないのはどうしてか？——その理由は、1回目の発作の期間は時間が短く、2回目の発作が始まる前に1回目の発作が終わるとき、2回目の発作の始めと1回目の発作の終わりの間の時間全てで、患者に熱に冒されないこと。また[一方]2回目の発作が早まり、1回目の発作が終わって清められる前に[2回目の発作に]入るとき、2回の発作の間に病人が発熱から解放される時は残らないこと。

36：身体の一部の器官の疾患と共に生じる腐敗熱とは例えば何か？——例えば、肝臓の疾患と共に生じる発熱、腎臓の疾患を伴う発熱。これらはそれぞれ疾患を伴う器官と関連し²⁸⁰⁾、その[器官の]名前から派生した名前と呼ばれる。

37：腐敗から生じる発熱が器官の疾患から派生した名前とは異なる名前と呼ばれるのは、いくつの原因によるか？——5つの原因による。

280) ilā al-‘aḍwi alladhī takūnu ma‘a ‘illati-hi と読む。

38: それは何か? —— (1) 第一は発熱を生じる実体の多さ、(2) 第二はその性質、(3) 第三は熱の動きの種、(4) 第四は熱の相違、(5) 第五はそれに後続し結びつくもの。

39: 実体の多さを示す名前と呼ばれる発熱とは例えば何か? ——ギリシア語でヒルジス (ilūdhīs)²⁸¹⁾と言われる発熱。というのも、この発熱は熱と混ざった非常に多くの湿を伴う。

40: それを生じる実体の性質を示す名前と呼ばれる発熱とは例えば何か? ——ギリシア語でカウス (qā'usūs)²⁸²⁾、つまり燃焼性の発熱と言われる燃焼する発熱²⁸³⁾。というのも、これを生じる胆汁のきつさのために胸や胃の辺りに激しい燃焼を伴う。

41: 熱の相違を示す名前と呼ばれる発熱とは例えば何か? ——ギリシア人らは発熱の熱の相違を示す名前前で4つの発熱を呼んだ。それは、イビアロス (ibiyālūs)²⁸⁴⁾、リフリヤ (līfūriyā)²⁸⁵⁾、カルムジス (qarūmūdhīs)²⁸⁶⁾、チフォジス (tīfūdhīs)²⁸⁷⁾。

42: イビアロスでの熱の相違はどのようなものか、また異なるのはどうしてか? ——イビアロスと呼ばれる発熱では冷と熱が身体の外側と内側の両方から起こる。冷はまだ腐敗していない粘液のため、熱はしっかり腐敗した粘液のため。

43: リフリヤでの熱の相違はどのようなものか、また異なるのはどうしてか? ——リフリヤと呼ばれる発熱では、身体の奥深くは熱が激しく、その表皮は弛んだようになる。これは、これを生じるものの濃厚さと粘着性のため。なぜなら、熱が身体の内側から外側へと容易に散布されたり行ったりせず、腐敗した場所に閉じ込められ滞留したまま留まるから。

44: カルムジスでの熱の相違はどのようなものか、またカルムジスと呼ばれる発熱が異なるのはどうしてか? ——その説明は、強烈な寒さ (zamharīr) は身体の表皮に激しい冷を伴うこと。なぜなら、それを引き起こす体液が非常に冷たい粘液であり、そのために温めるのが困難であるから。

45: チフォジスでの熱の相違はどのようなものか、また異なるのはどうしてか? ——チフォジスと呼ばれる発熱は身体の内側に強い熱を伴い、朽ちた溝や井戸から上昇するものに似た蒸気がそこから表皮へと上昇する。これは、このような発熱で腐敗してこれを生じる湿は、容易に分解して蒸気を生むからである。なぜなら、それは粘着性が多くないから。その蒸気がきついのは、その気質が乾に寄るからである。

46: 腐敗から生じる発熱の複合はいくつの形式によるか? ——3つの形式による。

47: それは何か? —— (1) 中断のある発熱と中断のある発熱から、(2) 不断の発熱と不断の発熱から、あるいは (3) 中断のある発熱と不断の発熱から複合される。

48: 複合の発熱の発作の入りはいくつの形式によるか? ——2つの形式による。

49: それは何か? ——複合する2つの発熱の発作は、(1) 同じ時に両方とも始まるか、あるいは (2) それぞれ異なる時に別々に始まるかである。これらの前者は混合 (mizāj)、後者は接合 (mushāraka) と言われる。

50: 複合の発熱を生じる2つの体液が複合されるのはいくつの形式によるか? ——2つの形式によ

281) =ἐλώδης「湿地の」という意味。

282) =καῦσος。

283) 「燃焼性」と訳した muhriq は καυστικός の訳語。

284) =ἡπιάλος。テキストには athniyālūs とあるが、abiyālūs の誤りであろう。Galenus, *De Febrium Differentiis*, 第1巻9章 [VII: 309] を参照。

285) =λιπυρία。

286) =κρυμώδης。

287) =τυφώδης。これらは不断の熱の種に数えられる [Galen XVIIa: 889]。

る。

51: それは何か? —— (1) ひとつは複合される2つの体液が均等で同等になるような複合。(2) もうひとつは2つの体液のいずれかが優勢となるような複合。

52: 根本的器官に固着する発熱、つまり消耗熱の種類はいくつか? ——3つ。

53: それは何か? —— (1) 第一の種類は、根本的器官のそれぞれに特有の小血管にある湿が減少し、肉や脂肪のような柔軟な器官にある湿に熱が固着するもの。(2) 第二の種類は、その湿もまた消え去り、部分が等しい器官の部分の間にある隙間に拡散し、それらの器官を栄養する、湿り気や露のような湿に熱が固着するもの。(3) 第三の種類は、その湿もまた消え去りし、器官のそれぞれの部分を互いに繋げて組み合わせ、分断しないようにしている湿に熱が固着するもの。

54: 発熱が身体の部分を全て等しく侵食するが、時に発熱は精気に、時の体液に、時に根本的器官にあると言われる理由は[何か]? ——その理由は、発熱が身体を複合している3つの類、つまり根本的なもの、湿ったもの、精気を包括する疾患であること。それらはその発生の初めとなったものから派生した名前と呼ばれる。すなわち、それが生じて生まれるのが、まず精気を温めて、そして散布される、また精気から湿へ導かれ、そして湿の後で根本的器官を温めるような原因からなら、それは一日熱と呼ばれる。既に腐敗した湿が初めとなり、そして精気を温め、その後で根本的器官を襲うなら、それは腐敗熱と呼ばれる。根本的器官がまず温められ、そしてそこから熱が精気や体液へ導かれるなら、それは消耗熱と呼ばれる。

55: 中断のある三日熱と四日熱はそれぞれ、その発病の時間の割合はその離れ²⁸⁸⁾の時間の割合に対してどれほどか? ——それらの発熱それぞれの発作の発病は、その離れのおよそ3分の1であり、その中断はその発病のおよそ3倍である。そのため、三日熱の発作は12時間、中断は36時間であり、その1つの周期は全体で48時間となる。また四日熱の発病は18時間、離れは54時間であり、その1つの周期は全体で72時間となる²⁸⁹⁾。

56: それ以前に保持されていたものが器官から流れるのはいくつかの形式によるか、またそれ以前に流れていたものが保持され遮られるのはいくつかの形式によるか? ——保持されていたものの流れは6つの原因のいずれかによる。(1) 第一はその実体が希薄になり細かくなること、女性に起こる出血のように。(2) 第二はものが多くなっていること、酔った時に人間に起こるように。(3) 第三はそれを含む器官の物質が淡く希薄になり、浸透する脈管が拡大すること、性交の時に起こるように。(4) 第四は熱い空気や吸引する薬品のように外から、あるいはそれを含む器官以外の器官にある熱のように内から、何かがそれを吸引すること。(5) 第五はそれを保持する力が弱いこと、排便[時]などいくつかの時の気絶の際に起こるように。(6) 第六は排出力が強くなっていること、燃焼性の発熱のときに冷水を飲むことで起こる発汗のように。[一方] 流れない類は6つの原因による。これは既に述べた原因の反対である。つまり、それが遮られるのは、(1) その実体の濃厚さ、(2) その少なさ、(3) 脈管の物質の詰まり、(4) それを吸引するものが内からも外からも無いこと、(5) 排出力の弱さ、(6) 保持力の健全さによる。

57: 吸引はいくつの形式によるか? ——吸引は3つの形式のいずれかによる。

58: それは何か、またそのそれぞれは例えば何か? —— (1) 熱による、ランプの燃料で見られるように。(2) 空虚の強制による²⁹⁰⁾、吸い取るパイプや、拡がったりしぼんだりする鍛冶屋の革

288) 熱が離れている期間のこと。

289) 9:12の注を参照。

290) 空虚充填説のこと。特にケオスのエラシストラトス(c.330-255BC)が採った説。Galenus, *De Naturalibus*

袋²⁹¹⁾で見られるように。(3) 吸引する本性的な力による、磁石で見られるように²⁹²⁾。

59: 腫瘍の種類はいくつか?—純粹で単独のものは4つ。それは、(1) 血液から生じる腫瘍で、フレグモーネ (falghamūnī)²⁹³⁾ と呼ばれるもの。(2) 黄胆汁から生じる腫瘍で、エリュシペラス (humra)²⁹⁴⁾ として知られるもの。(3) 粘液から生じる腫瘍で、オイデーマ (ūdhīmā)²⁹⁵⁾ と言われるもの。(4) 黒胆汁から生じる腫瘍で、硬結 (jusāh) や硬化症 (ṣalāba) として知られるもの²⁹⁶⁾。複合の腫瘍は多い。すなわち、それらは血液と黄胆汁から、血液と粘液から、血液と黒胆汁から、黄胆汁と黒胆汁から、黄胆汁と粘液から、粘液と黒胆汁から複合される。また腫瘍がそれら4つの体液のうち3つから複合されることも、それら4つの全部から複合されることもある。複合の腫瘍を生じるこれら体液の複合は2つの形式による。なぜなら、[そのような] 体液は量が同等で均等になるか、あるいはその一部が優勢となるかであるから。

60: 血液から生じる腫瘍の徴候は何か?—赤さ、固さ、触るときの抵抗、痛み、熱さ、腫れ。

61: 黄胆汁から生じる、エリュシペラスとして知られる腫瘍の徴候は何か?—熱さ、黄色が混じった赤さ、少しの痛み、腫瘍の進行の速さ。

62: 粘液から生じる腫瘍の徴候は何か?—白さ、弛緩、指が触れた場所が窪んだまま残ること、痛みが無いこと。

63: 黒胆汁から生じる腫瘍の徴候は何か?—激しい固さ、感覚が無くなること。

64: 打たれた場所が腫瘍になるのはどうしてか?—本性というものは全ての器官、特に弱い器官へ矯正するための実体を送って、それを治癒する。しかるに [そこが腫瘍になるのは]、打たれた器官にもたらされるこの実体のため、打撃から生じる痛みのため、そこから必然的に生じる熱のためである。というのも、痛みは実体を動かして吸引し、また熱はそれが多くなった場所へ実体を吸引するのだから²⁹⁷⁾、必然的に打たれた場所には実体が入り、そこを腫瘍にすることになる。

65: 複合の腫瘍の徴候は何か?—そこには、既に述べたような純粹で単独の腫瘍を示す多様な徴候が集まる。またそこで最も優勢なものは、その腫瘍を複合する体液のうち最も優勢な種の徴候である。

[第10章] — [尿について]²⁹⁸⁾

01: 尿は浴場の外で触ると熱いが、浴場の内で触ると冷たいのはどうしてか?—ガレノス曰く。尿は浴場の外でも内でも同じものであるが、空気に応じて感触は変化する。すなわち、浴場の内では浴場の空気の熱さのために冷たい感触がするが、浴場の外では浴場の外にある空気の冷たさのた

Facultatibus [Galen II: 1-214] で詳しく述べられている。

291) ふいごのこと。

292) 磁石は何でも引き寄せるわけではなく、鉄など特定のものののみを引き寄せる。同様に、特定の体液を吸引する器官が存在すると考えられた。

293) = φλεγμονή. 腫瘍は、身体の一部に集中的に流れ込む体液によって生じるとされる。そのため、その原因となる体液に従って分類されている。

294) = ἐρυσίτελας.

295) = οίδημα.

296) Th 写本と S 写本によれば、「スキロス (saqīrūs) と呼ばれるもの」。スキロスはギリシア語の σκίρρος に当たり、「固い」という意味である。これは濃厚で粘っこい体液あるいは黒胆汁から生じるとされる。

297) 9:58 を参照。

298) ラテン語訳に相当する箇所は無い。

めに熱い感触がする²⁹⁹⁾。

02：尿の部分はいくつかが³⁰⁰⁾？——2つ。

03：それは何か？——(1) 水っぽくて注がれていくもの、(2) 水っぽい [部分] に混ざっているが、分離して瓶に沈殿するもの³⁰¹⁾。

04：水気があり注がれていくものの部分はいくつかが？——2つ。

05：それは何か？——(1) 粘度、(2) 色。

06：尿の中で分離して沈殿するものの種類はいくつかが³⁰²⁾？——3つ。

07：それは何か？——(1) 濁り (ghamām)³⁰³⁾、つまり瓶のてっぺんに分離するもの。(2) 付着するもの (muta'alliq)³⁰⁴⁾、つまり途中で分離するもの。(3) 澱 (rāsib)³⁰⁵⁾、つまり底に落ち着くもの。

08：粘度の種類はいくつかが？——3つ。

09：それは何か？——(1) 薄いもの、(2) 濃いもの、(3) 中庸。

10：色の種類はいくつかが？——6つ。

11：それは何か？——(1) 白色、(2) 黄色つまりシトロン (utruj)³⁰⁶⁾ の色、(3) 火炎色つまり火の色、(4) 澄んだ赤色つまりサフラン (za'frān)³⁰⁷⁾ の雌しべの色、(5) 暗赤色つまり血 [の色]、(6) 黒色。

12：それらの色がそれぞれ尿に生じるのは何によるか？——(1) 白色は尿にそれを染める胆汁が混ざっていないため、あるいはそれに混ざる多くの粘液のため。(2) 黄色は尿に混ざってそれを染める少しの胆汁のため。(3) 火炎色は尿に混ざってそれを染める多くの胆汁のため。(4) 澄んだ赤色は尿に混ざってそれを染める、前者 [火炎色の尿] より多くの胆汁のため。(5) 暗赤色は尿に混ざる多くの血液のため³⁰⁸⁾。(6) 黒色は過剰な冷、激しい燃焼、あるいは排出されて尿に混ざる黒胆汁のため³⁰⁹⁾。

13：最も賞賛される尿はどのような尿か？——その中に白くて滑らかで、病人である期間全てで一樣な滓が沈殿するもの。沈殿する滓がこのような状態なら必然的に、その尿の色もまたは適度に黄色で、その粘度は薄いものと濃いものの中の中庸にあることになる。

14：尿の粘度の薄さは何によるか？——消化不良あるいは閉塞による。

15：尿の粘度の濃さは何によるか？——体液の熟成、あるいは排出されて尿に混ざる濃厚な体液による。

16：尿の粘度の中庸は何によるか？——体液の量と質に関しての平衡、あるいはその正しい熟成による。

17：薄い尿の種類はいくつかが？——2つ。

18：それは何か？——(1) 薄いままの排出された尿がその薄さに留まる場合、(2) あるいは薄い

299) Galenus, *De Simplicium Medicamentorum Facultatibus*, 第3巻8章 [Galen XI: 554-57] を参照。

300) 以下の記述は偽ガレノスの著作、*De Urinis, De Urinis Compendium, De Urinis ex Hippocrate, Galeno* の記述に近い。週れば、尿を用いた診断は Hippocrates, *Prognosticon* (前5世紀後半の著作) で論じられている。

301) それぞれ、χυμός, παρυσίασάμενον に対応する。

302) 尿を診断に用いる場合は容器に入れて行う。

303) = νεφέλη. 「濁り」と訳したが、元となっているギリシア語を考えれば「雲」でも構わない。

304) = ἐναϊώρημα. 「浮遊するもの」という意味であり、表面に浮かびもせず底に沈みもしないものを指す。

305) = ὑπόστασις. rāsib を「澱」、thufi を「滓」と訳す。

306) μηλέα Μηδική / *Citrus medica* L. [Baytār I: 13-15]

307) κρόκος / *Crocus sativus* L. [Sinā II: 464] [Baytār II: 467-69]

308) 尿に胆汁が混ざるとその量に応じて色が変わる。その量が少ない方から順に、黄色、火炎色、澄んだ赤色となる。ここでいう胆汁とは黄胆汁のことである。胆汁の色については 1:24 を参照。

309) 従って、尿の色の変化はそれに混ざる体液による。

まま排出された尿がその後で濃くなる場合。

19: 濃い尿の種類はいくつか?—2つ。

20: それは何か?—(1) 濃いまま排出された尿がその後で澄んで薄くなる場合、(2) あるいは濃いまま排出された尿がその濃さに留まる場合。

21: その薄さに留まる薄い尿は何を示すか?—病気を生じる実体を本性がまだ熟成し始めておらず、決してそれに影響していないことを示す。

22: 薄いまま排出され、そしてその後で濃くなり不純になる尿は何を示すか?—病気を生じる実体を本性が熟成し始めていることを示す。

23: 濃いまま排出されてその濃さに留まる尿は何を示すか?—身体の体液がその沸騰の絶頂にあることを示す。

24: 濃いまま排出され、そしてその後で澄んで薄くなる尿は何を示すか?—体液の沸騰が鎮まったこと、またそれが分離し始めたことを示す。

25: 白く薄い尿は何を示すか?—健康の時には、気質の冷に付随する力の弱さを示す。老人に起こるように。病気の時には、様々な状態を示す。すなわち、様々な慢性の病気においては、病気を生じる実体がまだ熟成していないことを示す。尿がこのようなものであり、発熱が既に多くの周期を経ているとき、四日熱で起こるように。なぜなら、尿が四日熱の初めにこのように形容されるなら、それは閉塞を示すから。燃焼性の発熱のような熱性の病気では、尿がこのようなものであり、病人に意識の混濁を生じないときは、それによっていずれ生じる脳炎を示す。病人に意識の混濁が既に生じてしまったなら、それは死を示す。

26: 黄色く薄い尿は何を示すか?—本性が弱く、そのために病気の実体を熟成できなかったので尿が濃くなったが、既に弱い熟成を始めていること。そのため、尿の色は黄色へ変化する。

27: その色が火の色をした薄い尿は何を示すか?—本性の色への作用がかなり明らかになったが、粘度へはまだ何の作用もしていないこと。

28: 澄んだ赤色をした薄い尿は何を示すか?—(1) 長い期間でその状態を継続しているときは、病気がまだ熟成していないことを [示す]。(2) 実体の少なさや欠乏を [示す]。食料を摂取していないとき青年に見つかるように。(3) 身体の内側にあり、多くの胆汁を生むような激しい熱を [示す]。三日熱で起こるように。(4) 眠れないこと、不眠、不安、身体が過剰に温まったことを [示す]。

29: 薄い尿の色が暗赤色にも黒色にもなることがないのはどうしてか?—なぜなら、尿の色が暗赤色になるのは血液により、血液の完成は消化と熟成により、消化と熟成によって尿は濃くなるから。そのため、暗赤色の色 [の尿] が薄い尿になることはない。というのも、尿の粘度の薄さは消化不良と熟成していないことを示す。黒色が薄い尿と共にあることはない。なぜなら、尿の色の黒さはそれに混ざる黒胆汁のため、体液を燃焼させる強い熱のため、あるいはそれを硬化させる冷のためであるから。これらのいずれも実体を濃くする。そのため、尿がそれ [黒さ] を伴って薄くなることはない。

30: 白く濃い尿は何を示すか?—血管の中に集まって多くなった生の糜汁を [示す]。

31: 尿の濃い粘度が黄色、火炎色、澄んだ赤色と共にあることがないのはどうしてか?—なぜなら、それら3つの色は実体の少なさや消化力の弱さにより、また濃い尿は消化力の健全さと実体の多さによるから。そのため、それら3つの色はどれも尿の粘度の濃さと共にあることがない。

32: 暗赤色の濃い尿は何を示すか?—血液の多さを [示す]、連続の熱で起こるように。

33: 黒く濃い尿は何を示すか?—(1) 冷の優勢を [示す]。内在熱が鎮静して支配されてしまっ

た者に起こるように。(2) 血液の燃焼を [示す]。その身体が熱性の原因によって激しく燃焼する者に起こるように。(3) 黒胆汁の排出を [示す]。四日熱が鎮静する時や黒胆汁性の鬱 (waswās)³¹⁰の終わりに起こるように。

34：尿から分離するものの状況から知るべきことはいくつか、またそれは何か？——尿から分離するものの状況から知るべきことは4つ。(1) 第一は分離するものの色。(2) 第二はそれが見られる [瓶の中での] 位置。(3) 第三はその物質の粘度。(4) 第四はそれが見られる時。

35：その色から確認する必要があることとは例えば何か？——それが白色か、黒色か、赤色か、黄色か、青黒い (akmad)³¹¹ かを知ること。

36：その位置から知る必要があることとは例えば何か？——それは時に瓶のてっぺんに浮かび、時に中間に付着し、時に瓶の底に沈殿している³¹²。

37：その物質の粘度から確認する必要があることとは例えば何か？——例えばそれは、連続的で滑らかであったり、ちぎれてつぶれていたりする。あるいは葉状 (ṣafā'ih)³¹³、粥状 (dashīsh)³¹⁴、粒状 (mutahabbab)³¹⁵、残渣に似たもの (shabīh bi-l-nukhāla)³¹⁶、ヤハズエンドウの種に似たもの (shabīh bi-l-karsanna)³¹⁷、砂に似たもの (shabīh bi-l-raml)³¹⁸、血液の類、膿の類³¹⁹ であったりする。

38：それが見られる時から知る必要があるものとは例えば何か？——それは病気の期間全てで見られるとか、数日は見られるが数日は見られないとか、病気の初めから見られるとか、何日も後で見られるということがある。

39：尿から分離する最も賞賛できるもの [は何か？]³²⁰ ——瓶の底に沈殿し、白く滑らかで、病気の期間の全ての日で一様なもの。

40：尿に沈殿する滓が白く滑らかで、数日はこの状態にあるのが見られるが数日は [見られない] とき、これは何を示すか？——力が弱くて、身体にあり病気を生じる実体をどんな時にも熟成させることができなことを示す。

41：尿に沈殿する滓が白く、数日ずっと底にあり、滑らかでないとき、これは何を示すか？——本性が1度に完全に熟成できないことを示す。そのため、これは先の [10: 40 の] ものより悪くより悪質であるが、沈殿する最初の滓の熟成において本性が熟成に成功しなかったためである³²¹。そのため、これはより悪くより悪質である。

42：尿に沈殿する滓が散らばりちぎれていて、滑らかでない原因は何か？——その原因は、本性が熟成しようとする糜汁に生まれる濃厚なガスがそれをちぎり散らして、その結合を減少させること。

43：尿に沈殿する滓が白く、瓶の底に落ち着き、滑らかでないとき、いつ賞賛され、いつ賞賛されないのか、またそのそれぞれがそうなるのはどうしてか？——賞賛されない状態は、数日ずっと同

310) waswās 自体が μελαγχολία の訳語である。鬱は過剰な黒胆汁から生じる病気と考えられた。

311) = πελιδνός. 青あざのように青黒い色のこと。

312) 10:06-07 を参照。

313) = πεταλώδης.

314) = κριμνώδης.

315) 偽ガレノスの著作に見られる尿の澱の種類のうち、σανδαράχωδης (鶏冠石に似た) が残っているが、「粒にした」あるいは「水でふくれた」を意味する mutahabbab が対応するかは不明。

316) = πιτυρόδης.

317) = όροβοειδής.

318) = ψαμμώδης.

319) 血液の類や膿の類とは、血液や膿が混じっているような尿を指す。

320) T 写本の読みを採用。

321) 文字通りには、「熟成において本性に対し熟成のないことが起こった」。

じ状態を継続すること。なぜなら、そのような場合、本性が希薄にして分解できないほどガスが多くて濃厚であることを示す。これは最も悪質である。賞賛される状態は、時にそうであり時にそうでないこと。そのような場合、ガスは量が少なく濃厚さが少なく、容易に希薄になることを示す。

44: 尿から分離するものが底に沈殿せずに、中間に付着したり上層に浮かんだりするのは何によるか?——本性が消化し熟成する実体の中に保持されているガスによる。すなわち、消化や熟成の時にガスが希薄にならず分解されず、尿から分離するものの穴の中に保持されて留まるとき、それ〔分離するもの〕を上へ運び上昇させるが、それを底に置いて停滞させたり落ち着かせたりしない。その量が多いなら、上方の場所へそれを上昇させるので、それは濁りとなり、この名前で呼ばれる。その量が多くないなら、中間の場所へ上昇させるので、それは付着したまま留まり、付着するものと呼ばれる。

45: 尿に沈殿する滓は何を示すか、また浮かぶ滓つまり濁りは何を示すか?——沈殿する滓は完全で完璧な熟成を示す。なぜなら、ガスが希薄になり分解しきったから。付着する滓は中間の熟成、つまり明らかな熟成を示す。なぜなら、それを上昇させるガスの量が少なく、容易に希薄になり膨らむから。浮かぶ滓つまり濁りは、弱くて隠れた熟成を示す。なぜなら、そこにあるガスが多くて濃厚であるから。

46: 尿から分離する滓の場所の相違はてっぺん、中間、底となるが、善さと悪さを示す序列はどのようなものか?——黒い滓のように、欠点があり悪質なものの場合、それが浮かぶなら、それが示す悪さはより少なくより隠れている。付着するなら、それが示す悪さは中間的に明らかである。沈殿するなら、それが示す悪や悪質さはより大きくより完全である。白くて一様で滑らかな滓のように、賞賛され優れたものの場合、それが浮かぶなら、それが示す善さは弱くて隠れている。付着するなら、それが示す善さは中間的なことを示す。底に落ち着くなら、それが示す善さはより大きくより完璧である。このような事情であるので、尿から分離する滓の場所の相違は善さと悪さの程度の相違を示している³²²⁾。

47: その色が赤いとき、尿に沈殿する滓は何を示すか?——消化不良、消化ができていないことを示す。すなわち、それが消化や熟成がまだしっかりしていない化膿した血液のためであり、そのために病気が長引くことを示す。本性が血液の熟成の完成に長い期間を必要とし、また病気が終わるのは血液の消化と熟成が完成したときであるために。

48: 青黒い色をした沈殿する滓は何を示すか?——冷の優勢や力の死。

49: 黄色く沈殿する滓は何を示すか?——非常に多くの熱や病気の悪性と悪質さ。

50: 黒い滓は何を示すか?——時に身体にある実体を燃焼させる過剰な熱を、時に実体を硬化させて黒くする激しい冷を示す。

51: 沈殿する滓の黒さが熱によるのか冷によるのか、どのように区別されるか?——まず青黒さを帯び、そしてその後で黒くなるなら、その黒さの原因は冷である。まず黄色く、そしてその後で黒くなるなら、その黒さの原因は熱である。

52: 白く沈殿する滓、その色に似た生のもの、白い膿は何によって区別されるか?——白く沈殿する滓は部分の結合と、識別できる部分が見つからないほどの緻密さから起こる。生のものには、砂のように識別できる小さい部分がある。白い膿は、その匂いの臭さによってこれら両方と区別される。

322) つまり、黒い滓つまり悪い滓の場合は、現れる位置が低いほど悪いことを示し、白い滓つまり善い滓の場合は、現れる位置が低いほど善いことを示す。

53: 油状の尿とはどのような尿か、またその種類はいくつか？——油状の尿³²³⁾とは、油に似た尿を意図する。また尿が油に似ているのは、色に関して、粘度に関して、あるいはその両方に関してである。

54: 油状の尿は何を示すか？——油状の尿は概して、腎臓あるいは他の諸器官の脂肪の溶解を示す。詳しくは、それは様々なことを示す。すなわち、色に関してのみ油状ならその溶解が初期にあることを示す。粘度に関して油状なら、その溶解が増大期にあることを示す。その両方つまり色と粘度に関して油状で、それを見た者が本当に油だと思ってしまうほどなら、その溶解が全盛や絶頂に達していることを示す。

55: 腎臓の脂肪の溶解による油状の尿と、他の身体全体の諸器官の溶解によるものは何によって区別されるか？——腎臓の脂肪が溶けたなら、その全体が尿と共に出ていくので、それは速やかに出ていき、病気の最初から脂のように尿の上に浮かぶ。他の身体全体の器官の脂肪が溶けるなら、それは徐々に出ていき、出ていくのが遅くなる。

56: ヤハズエンドウの種に似た沈殿する滓は何によるか？——腎臓の肉あるいは他の諸器官の肉の溶解による。

57: そのように形容されるとき、沈殿する滓が腎臓の肉の溶解によるのか、その他の器官の肉の溶解によるのか、何によって区別されるか？——尿が熟成しているか熟成していないか、発熱が急性か急性でないかによって。すなわち、ヤハズエンドウの種に似た沈殿する滓が熟成した尿を伴うなら、疾患は腎臓にのみある。熟成していない尿を伴うなら、疾患は身体全体にある。同様にまた、ヤハズエンドウの種に似た沈殿する滓が急性の発熱を伴うとき、疾患は身体全体にある。発熱が伴わないとき、あるいは発熱があっても急性でないとき、疾患は腎臓にのみある。

58: 葉に似た沈殿する滓は何を示すか？——根本的器官の外側の表面が剥がれた、あるいは膀胱の内側の表面が[剥がれた]ことを[示す]。

59: 葉に似た沈殿する滓が、根本的器官の剥がれのためか膀胱の剥がれのためか、何によって知られるのか？——それに伴う発熱、尿の熟成によって。

60: それは発熱からどのようにわかるのか？——葉に似た沈殿する滓が発熱を伴うとき、それは根本的器官の外側の表面が剥がれていることを示す。発熱を伴わないとき、それは膀胱の内側の表面が剥がれていることを示す。

61: それは尿の熟成からどのようにわかるのか？——葉に似た沈殿する滓が熟成した尿を伴うとき、それは疾患が膀胱にのみあることを示す。滓が熟成していない尿を伴うとき、それは疾患が身体全体にあることを示す。

62: 残渣に似た沈殿する滓は何を示すか？——発熱が深くまで達するように血管に影響していて、剥がれと切れがその外側の表面から内側に窪んだ部分まで及んでいることを[示す]。それに加えてまた、膀胱に疥癬の類の疾患があることも示す。

63: 身体全体の血管の疾患のために尿と共に出ていく残渣と、膀胱の疥癬のために出ていく残渣は何によって区別されるか？——それに伴う、あるいは伴わない発熱によって、また濃い尿と薄い尿によって。

64: それはどのようにか？——その残渣が発熱を伴うとき、疾患は身体全体にある。それに発熱を伴わないとき、疾患は膀胱にのみある。同様にまた、残渣が濃い尿つまり熟成した尿を伴うとき、疾患は膀胱にのみある。薄い尿つまり熟成していないものを伴うとき、疾患は身体の血管全体にあ

³²³⁾ = ελαιώδης.

る。

65: 粥に似た沈殿する滓は何を示すか?—熱の根本的器官への影響が外側の表面から進行し、その物質を広く深く達して、そこに影響したこと。また一部の時には血液の燃焼を示すこともある。

66: 根本的器官の溶解から生じる粥状の沈殿した滓と、血液の燃焼から生じるものは何によって区別されるか?—根本的器官の溶解から生じる粥状の沈殿した滓は白く、血液の燃焼から生じるものは赤い。

67: 匂いが臭い尿は何を示すか?—量が多く性質が悪い腐敗、身体の本性の死³²⁴⁾、消化して熟成する力の激しい弱さを示す。

68: 滓が沈殿できないのはどのような尿か、またその原因は何か?—その色が異なっても³²⁵⁾、水っぽくて非常に薄い尿は全て滓が沈殿できない。これは、尿の薄さと水っぽさが実体の欠乏と少なさに付随するから。沈殿する滓は消化力を超えるものであり、消化することができない [ものが滓として排出される]。このような事情なら、極端に薄い尿に沈殿する滓があり得ないのは明らかである。というのも、まず尿が濃くなり、そして沈殿する滓がそこから分離しなければならない。尿が極端に薄いときに沈殿する滓を伴うことがない色は、黄色、白色、火炎色、澄んだ赤色である。

69: 白く水っぽさがあり、沈殿する滓が白いような濃い尿は何を示すか?—それは身体に生のもの³²⁶⁾が多量の量集まったことを示す。

70: 赤い滓が沈殿するような赤く濃い尿は何を示すか、またそれは何のためか?—血液の多さ、熟成していないこと、病気の長引き、その回復を [示す]³²⁷⁾。

71: 血液の多さ、[血液が] 熟成していないことを示すことが濃さと赤さであるのはどうしてか?—それらの特徴が、血液の豊富とその量の多さに付随するから。病気の期間の長さを示すのは、熟成していない多くの血液が完全に熟成するまで長い時間を必要とするから。病気の回復を示すのは、病気を引き起こす体液つまり血液が本性に最も特有な体液であるから。

72: 白い滓が沈殿するような赤く濃い尿は何を示すか?—血液の量が多く、熟成していない [度合い] が少ないこと、また病気が長引くが大きく長引かないことを示す。

73: 沈殿する滓の白さはどうしてか?—それが熟成しているから。

74: 滑らかで落ち着く様な滓が沈殿するような黒く濃い尿は何を示すか?—病気が熟成していないことを [示す]。というのも、それは色に関しても粘度に関しても熟成していないから。そのため、その黒さが身体を清浄にするための黒胆汁の本性の不足のためでないとき、それは悪さを示す。

75: 色が白いとき、尿の粘度が中庸にならない理由は何か?—粘度の中庸は熟成を示し、また白い色は熟成していないことを示すから。身体にあるものを熟成させる本性が、尿の色を熟成へ変化させられないことはない。これ [色の変化] は、変化し難く熟成し難い尿の粘度を変化させ熟成させることに関して、最も容易で最も簡単で最も強力なことである³²⁸⁾。

76: その粘度が中庸でその色が黄色の場合、尿は何を示すか?—胆汁の混ざった多くの水を飲んだことによる湿のために尿の色が変化し、尿の水っぽさが火炎色あるいは澄んだ赤色から黄色へ変化したことを [示す]。粘度が中庸になったのは、その水っぽさが熟成したから。

77: そのように形容される尿に滓が沈殿できないのはどうしてか?—尿の薄さは実体の少なさ、

324) 身体の諸機能が正常でなくなり、停止してしまうということ。

325) その色がいかなるものであってもということ。

326) 生の糜汁のこと。10:30を参照。

327) 病気が長引くが、いずれ治るとのこと。

328) 尿が熟成されるのであれば、真っ先に色に変化して白くなるということ。

またそれが十分に熟成していないことによる。尿の粘度が中庸で、火の色に寄っているとき、これらの特質は尿に何かが沈殿するのを妨げる。

78: 沈殿する滓を伴わないときそれは何を示すか、また沈殿する滓が無いときそれは何を示すか？——賞賛される沈殿する滓を伴うものは、賞賛される熟成を示す。これは一般的で、その種類全てを包括する。沈殿する滓が無いときもまた、身体に多くの実体の余剰が無い者のうち不安や不眠を繰り返すような者の熟成を特に示すことがある。

79: 暗赤色の尿と黒い尿が中庸な粘度を伴わない理由は何か？——尿の赤さと黒さは過剰や平衡からの外れによるもので、これらは濃い粘度で類似しているから。また粘度の中庸は平衡に特有でそれに類似するので、中庸な色を伴うから。

80: 尿に沈殿する滓が優れて賞賛されるのはいつか、また悪く欠点があるのはいつか？——最も賞賛され最も優れるのは熟成した後で、それ以前に尿が薄かった場合。賞賛されるものから最もかけ離れているのは、実体の重さのために熟成する前である場合。

81: 尿に血液や膿があるとき、それは何を示すか？——それは必ず潰瘍を示すが、潰瘍のある器官が知られるように示すわけではない。それは腎臓か、膀胱か、尿道 (barbakhay al-bawl) の片方か、これらの上にある器官のいずれかにある。

82: 腎臓と膀胱から流れる膿とこれらより高い器官から流れる膿は何によって区別されるか？——腎臓と膀胱から流れる膿は長い期間流れ続けるが、その上にある器官から流れる膿は1日か、2日か、3日だけ流れることによって。

83: 一挙に排出される血液は何を示すか？——腎臓の血管が割れたことを [示す]。これは、膀胱と尿道には、そこで何かが割れたり破れたときに多くの血液がそこから流れるような大血管が無いからである。

84: 尿に沈殿する砂は何を示すか？——腎臓あるいは膀胱に生まれた結石を [示す]。

85: 血液や膿の尿は共通して何を示すか？——尿の道具のいずれかにある潰瘍を [示す]。これは腎臓、尿道、膀胱、またそれに加えて男の陰茎 (qaḍīb) や女の陰門 (farj) が尿の道具の数に入る。

86: 嫌な匂いの尿とそれに伴う垢は何を示すか？——特に膀胱の潰瘍を [示す]。

87: 白く滑らかな滓が沈殿するとき、膿の尿は何を示すか？——膀胱で既に熟成した熱性の腫瘍を [示す]。これは、その場所に生じる熱性の腫瘍が熟成したとき、熟成した体液がそこから流れて膀胱の穴へ向かい、尿と共に出ていくから。そのため、尿に沈殿する滓において、賞賛される熟成を示す徴候が明らかになる。

89: 血管の接合によって身体全体に、あるいは特に尿の脈管に疾患があることを尿が示すのはどのような場所か？——疾患が身体全体にあるのを示すのは、発熱において示されるようなもので、これは2つの形式による。なぜなら、それは発熱において2つの事柄のいずれかを示すから。(1) 体液が害されたものであること、腐敗から生じる発熱において示されるように。あるいは(2) それが発熱が回復したこと、一日熱において示されるように。疾患が尿の脈管にあるのを示すのは、腎臓か、膀胱か、尿道か、男の陰茎か、女の陰門にある潰瘍を示すようなこと。

ヒポクラテスの医学学派に従って、フナイン・イブン・イスハークによる質問と回答集、およびそれに連結されたフバイシュ・イブン・アル＝ハサンの質問集は完成した。